
ゆるいロウきゅーぶ

ベガF91

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆるいロウきゅーぶ

【Nコード】

N2220V

【作者名】

ベガF91

【あらすじ】

京子の強引で慧心学園の女子バスケット部のコーチをするはめになってしまった七森中の「娯楽部」の4人。ロウきゅーぶはロリアニメですが、まさかの百合小説です。なんていうか、ゆるゆりとクロスすると百合しか思い浮かばなかったので……（＾　＾；）

小学生がやってくる！（前書き）

最近、戦いものばかり妄想していた自分ですが、たまにはスポーツものを書こうと思い書いた小説です。

小学生がやってくる！

七森中の「倶楽部」の歳納京子、船見結衣、赤座あかり、吉川ちなつの4人はとある小学校に来ていた。

そこは慧心学園であつた。

「とうとうついたか…私たちの戦場！」

「違うだろ」

京子にツッコミを入れる結衣。

「ここって警備員さんもいる…」

「すごいです…」

「はあ…なんでこうなつたのやら…」

さかのぼること昨日のことだった。いつものようにあかりとちなつは倶楽部の部室（元は茶道部の部室であつたが廃部したため今は倶楽部の部室である）に向かつていた。

その部室の扉の前に京子と結衣の二人が立っていた。

「あれ？京子ちゃん、結衣ちゃん？」

「どうしたんですか？部室に入らないんですか？」

「実は…二人に大変重要なお知らせがあるんだ…」

「な、なに…？」

京子の言葉に息をのむ二人。京子がこんなことを言い出してきた。

「この部活は廃部になった！」

「「えええ！？」」

ポカッ！

「違うだろ！」

「うええん…」

「実は、3日だけ休部することになったんだ」

「どうして？」

「美星先生が慧心学園の女子バスのコーチをしてってくれて頼まれて」

「美星先生って前、京子ちゃんたちの担任だった人？」

「そう、今あの人は慧心学園の先生になったんだ。それで私は断ろうとしたんだけど京子が強引に引き受けちゃって…」

「もう、京子先輩は…」

「というわけで、2人もコーチに行かない？美星先生の許可もとっ

てるし」

「私たちもいいの…？」

…というわけで4人は慧心学園に行くことになったのだった。ノリノリの京子に対して結衣は京子が何かしないか心配してあかりとちなつは緊張気味であった。

体育館に着き扉を開けたその先には…

「……お帰りなさいませ、お嬢様！」「……」

「え…？」

「これは…」

「おお！メイド服！！」

体育館に入った先には5人の小学生の少女たちはメイド服を着ていた。そんな光景を見た結衣とあかりとちなつは言っまでもなく驚きと戸惑いそれに対して京子は興奮状態であった。

「君たちが女子バスケットの…？」

「け、慧心学園初等部、湊智花です」

「同じく、三沢真帆です」

「永塚紗季です」

「か、香椎愛莉：です」

「ひなた、袴田ひなた」

「せいの」

「よろしく願います！お嬢様方！」

「えっ」と……」

「おう！私たちにおまかせ…」

「お前は黙ってる！その…お嬢様ってやめてくれるかな…？」

結衣の言葉に少女たちはこそこそと話し合った結果……。

「「「「「わかりました！お姉ちゃん！」」」」」

「はは」

それでもまだちょっと恥ずかしがる結衣に対して京子はがっかりしていた。

「お嬢様がよかったのになー」

「おー、お姉ちゃんたちお名前は？」

「私は歳納京子！中学二年生だ！」

「小学生相手に態度でかくなるなよ…。船見結衣、京子と同じく中

学二年生です」

「赤座あかり、一歳年下の中学一年生です」

「吉川ちなつです。あかりちゃんと同じく中学一年生です」

「その、バスケ歴はどのくらいですか？」

「えっと、私が小学3年のころぐらいにそれで今は…」

「お姉ちゃん、敬語とかやめようよ。歳は近いんだし」

ツインテールの女の子、真帆が結衣の腕にくっついてきた。

「み、三沢さん…!」

「真帆かまほまほって呼んで。それとみんなのことさん付け禁止。ね、お姉ちゃん」

真帆という女の子は少し京子に似ていた。結衣は『お姉ちゃん』って呼ばれるのも恥ずかしくなった。

「その、お姉ちゃんって呼ぶのもやめてくれるかな…?」

「ええ!?!これもだめなの?妹メイド系とかグツとこない?」

(それは京子ならグツとくるけれど…)

「私はグツと来たよ、真帆ちゃん!」

「本当！？よかったよ、きょうたんがそう言ってくれて」

「ははは」

なんだかこの二人は妙に息が合っていた。それから話は止まることもなかった。

「私はメイドも好きだけど魔女っ娘も好きだね」

「じゃあ、今度衣装用意するよ！」

「おい、そろそろ話区切らないか…」

「そうだよ、あんたはちよつと下がって」

ここで眼鏡の女の子の紗季が結衣たちの前に来た。

「ごめんなさい、真帆ちよつと張り切りすぎてて」

「ああ、いいよ別に」

「あの、さっそくで申し訳ありませんがご指導の方をお願いしてもよろしいでしょうか？」

左片方にリボンをつけている女の子、智花が熱心にご指導をお願いしてきた。

「すみません、押し付けに」

「そうだね。じゃあ、着替えてきてくれる？それじゃあやりずらそ

うだし」

「ええ、なんで？パンツなら心配いらないよ。ほら」

真帆は自分のスカートをめくり、自分がスパッツ履いていることを結衣たちに見せた。

「なっ！？」

「あわわ…」

「おお！！」

それを見た結衣とあかりとちなつは顔が赤くなってしまい、京子はもう興奮状態で止まらなかった。

「みんなもはいてるよ」

今度は智花、紗季、愛莉の順番でスカートをめくり、その後愛莉は恥ずかしくなったのかしょぼんと落ち込んでしまった。

「バカ真帆！愛莉嫌がつてんじゃない！」

「いいじゃん、女同士なんだし」

「なんだかすごい元気のある子たちだね、結衣ちゃん」

「あ、ああ…。やっぱり着替えてきてくれる？」

「そ、そうですよね！」

「ほら行くよ」

「ええ？じゃあ、またあとでねゆいにゃん、きょうたん、あかりん、ちなたん」

5人は着替えるために更衣室に行った。

「もう、あれでよかったのになー」

「いいわけないだろ。ほら、私たちも体操服に着替えるよ」

小学生がやってくる！（後書き）

あかりの影は薄くなるかならないか小説の進み具合によります（笑）

初日の騒動

「…はあ、初日からなんでこんな…」

「私はメイド服のままでよかったのになー」

「いいわけないだろ」

そんな京子に呆れる結衣。4人は体操服に着替え終わり、ちょうど5人も体操服に着替えて結衣たちのところに来た。

「……おまたせしましたー」「……」

「あ、来た来た」

「……」
「……」
「……」
「……」
「……」

「おう、私たちにおまかせ！」

「京子先輩が教えるんじゃないのに…」

「なにかいった？ちなつちゃん」

「ううん、何も」

「じゃあ、総合練習して、君たちの実力をはかるとしようか。オフエンスを2人、ディフェンスを3人に分けて…」

「おふえんすってなに？」

オフェンスと聞いた真帆は頭にはてなが浮かんでいった。

「攻撃のことだよ。ディフェンスは守り」

「おおー、さすがもっかん」

「この中で智花ちゃんが経験者のようだね」

「はい」

その後も結衣はみんなにそれぞれの役割を決めていき、バスケの練習に取り掛かるうとしたその時京子が結衣にこんなことを言い出してきた。

「そういえば、愛莉ちゃん背高いよね。ディフェンスにしたら？」

「「「「あ！」「」「」」

「それも一理ある…って愛莉ちゃん…？」

「えぐ…ふええええん！」

京子と結衣に会話を聞いた途端、泣き出し始めた。

「あ、愛莉ちゃん…！？」

「やっぱり…大きいんだ…でか女なんだ私…」

愛莉が急に泣き出してしまい、結衣たちはどうしようか戸惑っている。

た。

「アイリーン！ゆいにゃんたちにちゃんと誕生日教えないから」

「そうよ」

「おー。愛莉、ティッシュあるよ」

そして紗季は結衣たちに愛莉のことを伝えた

「身長がコンプレックスなんです。背のことといわれるとあんな感じに…」

「そうだったのか…って痛！」

「まったく京子は…」

「愛莉に4月生まれって言うてもらえます？」

「それでいいの…？」

「これですつと誤魔化してきたんです」

結局、練習はできずに終わってしまい、愛莉はなんとか泣き止んだ

「すみません…取り乱したりして…」

「いいよ」

「京子先輩があんなこと言うから…」

「だって」

「明日からちゃんと練習しよ」

「……はい」「……」

その後、9人で体育館の掃除をすることに。その時

「ん？」

「どうしたの、結衣ちゃん？」

結衣とあかりが見た先にはボールを手に持っている智花がゴールめがけてシュートをした。

「うわ……」

そのシュートスタイルはとてもきれいだった。ボールはそのままゴールに入った。

「す、すごいよ！智花ちゃんの今のシュート！」

「うん……すごくきれいだった……！」

すっかり、結衣とあかりは智花のシュートに見とれてしまった。

その後、結衣たちは美星に車で送ってもらうことに

「久しぶりだね、あかり」

「美星先生もお元気で」

「それとあなたは初めてだね」

「は、はじめまして、吉川ちなつです」

「京子から聞いてるよ。ミラクルん似の女の子がいるって」

「きよ、京子先輩！なに教えてるんですか！」

「だってー」

「ははは。で、あの子たちはどう？」

「まだあまり…」

「にゃふふ、そっか…残念」

「でも、一人気になる子がいました…」

結衣が言う気になること言ったら智花のことだった。まだあの智花のシュートのことは忘れられなかった。

「ふーん、じゃあコーチ続けてみる？」

「3日の約束でしょう？」

「私は引き受けてもいいですけど」

「こら、京子」

そんな5人の他愛もない話は続いたのだった。

二回目のコーチ（前書き）

うーん、この小説に昂はいるか知らないか…。

二日目のコーチ

2日目、七森中の倶楽部の4人、結衣、京子、ちなつ、あかりは慧心学園初等部の女子バス部のコーチに来ていた。仕切りは結衣であとの3人は女子バス部のサポートとしての役割を果たしていた。

「じゃあ、シュートとパスの練習に分けようか」

結衣の指導の下、真帆と紗季はシュート練習、智花とひなたと愛莉はパス練習に分かれた。パス練習では智花とあかり、ひなたとちなつ、愛莉と京子の組となった。

「智花ちゃん上手」

「いえ、私もまだまだ」

「やー」

「わ…っと」

「おりゃー！」

「きゃ…つとえい！」

それぞれの練習が終わった後、5人で合同練習をすることに。その練習ぶりを見て、結衣はこんな評価をしていた。

（なるほど…確かに智花ちゃんは経験者だけあって上手いな…。真帆ちゃんと紗季ちゃんは初めてとはいえ、少しずつ上達していくな

…。愛莉ちゃんとひなたちゃんはまだ時間かかりそうかな…)

そして、練習が終わり休憩に入った中、結衣は智花に練習メニューを見せてもらっていた。

「これが練習メニューだね」

「はい」

「基本をちゃんと抑えるメニューみたいだね。でも、もう少し上達できる練習も少し付け加えた方がいいかな…」

「そうですね…はっ！」

なぜかここで智花は結衣に少しずつ近づいてたことに気が付き、その場から離れたのだが、結衣はどうしたのかって顔をした。その時、真帆が上から結衣に抱き着いてきた。

「あー！特訓メニューだ」

「わ！真帆ちゃん…」

(な！い、いくら小学生でも…結衣先輩は…！)

これを見たちなつに負のオーラが漂ってきて、それに気が付いたあかりが声をかける。

「どうしたの、ちなつちゃん？」

「う、ううん何も…！」

「ねえねえ、ゆいにゃん！すごい特訓で私たちを強くしてよ」

「え？」

「一時間にレベルが3上がるとすると…3日でレベル18！ねえ、レベル18ってどれくらい？地区大会優勝レベル？」

「あはは…。それは無理だよ。いくら3日で地区大会なんて…」

「え！？」

「でも、この調子で続けたら真帆ちゃんだってもつと…」

「困るよ！」

「真帆ちゃん…？」

いきなりの真帆ちゃんの大声にびつくりした結衣。それを聞いた京子たちも驚いていた。

「どうして！？ゲームなら一時間でレベル3くらいいくのに…」

「いくらゲームができて、今は無理だよ…。でも一か月間続ければ強く…」

「一か月じゃ待てないよ！」

「そ、そんなこと言われても…」

智花に視線を向けるも何も言わずにそっぽを向いてしまった。

「もういい!!」

「あ…!」

真帆はそのまま体育館を出てしまった。

その後、コーチを終えた4人は更衣室で着替える中…。

「なんで真帆ちゃんあんなに…」

「よっぽどバスケットに思い入れでもあんのかな…?」

「先輩はこれからもコーチ…」

「それは…」

「結衣ちゃん、なんか紙切れが…」

「え?」

あかりから紙切れを受け取り、読んでみるとそれは『今すぐ女子バスのコーチをやめろ』という警告の手紙だった。

「誰だ…?こんな…」

二回目のコーチ（後書き）

なんだか主人公が結衣になりそうなの…

女子バスケット部の裏側…（前書き）

ちょっと設定にオリジナルを付け足したので…ここは察してくれれば幸いです。

女子バスケット部の裏側…

いよいよ、コーチの最終日となり、慧心学園へと足を運ぶ七森中の
倶楽部の4人。

「今日で終わりだね」

「このまま続けてもいいんじゃない？」

「いや、そういうわけには…」

「あれ？誰かが…」

ちなつが指差した方を見ると、小学生の5人の男子がならんでいた。

「おい、女バスのコーチたちだろ。話がある」

そういわれて、4人は5人の小学生男子に体育館の裏側に連れて行
かれた。そして、その5人からの話によると男子バスケット部のメンバ
ーで、昨日の紙切れを書いたのは自分たちだといった。

「君たちがあの紙切れを…」

「今すぐ女子バスケット部のコーチをやめろ！さもなければ…」

「な、なんかあかりたち、小学生たちに責められてる…」

「…やめろって今日で女子バスケット部のコーチは終わりだよ」

「『『『『え!?!?!』』』」

「3日の約束だしね」

「そ、そうか…」

「なんだよ竹中、脅かすなよ…」

「だって真帆がすごいコーチがいるって自信满满だったから…じゃあ、試合には…」

「試合…?」

「なんのこと…?」

男バスの話がうまく合わない。試合とはいったい何のことなのか結衣たちは男バスの男子から話を聞いてみることに。するとこんなことを言い出してきた。

「今度の日曜日に俺たちと女子バスケット部で試合をするんだよ」

「ええ!?!」

「あんたたちはそのためのコーチだろ?」

「そんな話、美星先生や女子バスの子たちから何も…」

美星にはただ、コーチを3日間やってくれって言われただけで男バスとの試合をするなんて一言も言われてもいなかったため、結衣たちは驚いた。でも、いったいなんのための試合なのかは知らないた

め、男バスに聞いてみることに。

「でも、なんで女バスと試合なんて…」

「体育館の練習場所をかけてだよ」

「体育館をかけて…！？」

「俺たちは去年の地区大会で優勝をしたんだ。でも、実力はまだまだだから練習したいと思ってる！だけど、女バスが練習で使ってるから駄目だつて…。それで顧問に相談したら今度は美星とけんかして、いつの間にか試合で決めようって話になったんだ」

「でも、一緒に練習しようって思わないの？」

「そうだよ…」

「あんなヘタクソな奴らと練習なんてできるか！アイツらのバスケットなんて…ただの遊びじゃねえか！」

そんな竹中の話を京子は腹が立ってこんなことを言い出した。

「なんだよそれ…ヘタクソだからバスケットをするなってことか…？」

「そりゃあ…」

「じゃあ、君たちだってヘタクソだから入るなって言われたらどう思っただよ！？」

「そ、それは…」

「バスケは勝つためじゃなく楽しむためじゃないのかよ!？」

京子の怒りに少し足を引きずる男バスの子たちを見て結衣は止めに
入った。

「京子、落ち着けよ!」

「だって!結衣もむかつくと思わないのかよ!？」

「京子の気持ちはわかるけど…」

「じゃあ、なんで止めるんだよ!？」

「私たちはもと美星先生に3日間コーチを頼まれ、それに試合するなんて聞いてもないし、私たちは利用されたんだぞ。そこまで私は首を突っ込むわけにはいかないよ」

「だけど…」

そんな京子を差し置いて、結衣が一言言った。

「君たちの向上心は買っけど私たちはどっちの味方じゃないし…」

「あんたたちがその気になれば女バスの勝利も…」

「そんな3日間でできるわけないよ…」

「そっか、だよな。なら今日は解放してやるよ」

男バスの5人はほつと安心したかのように結衣たちを解放した。その後、結衣はこんなことを言い出してきた。

「京子、あかり、ちなつちゃん、ここは帰ってくれないか？」

「え…？」

「結衣ちゃん…」

「そんな…本当にいいんですか!？」

「あの子たちは私が全部話すから…」

「結衣…！ほんとにいいのかよ!？あの子たちを放っておくの？」

「私たちに関係ないし…別に3日間だけの約束だろ…」

「…もう勝手にしろよ!」

そういつて京子はそのまま去って行ってしまい、そのあとをあかりとちなつは追いかけていった。その後、結衣は一人で体育館に入り、その先に5人の女バスの子たちがいた。

「あ、ゆいにゃん!」

「船見さん…」

女バスの5人はすぐさま結衣のところへ行った。

「よかった…来てくれないかと思いました…」

「昨日はごめんね、ゆいにゃん…ってあれ？他の3人は？」

「あの、船見さん…3日の約束ですが…」

「試合があるんだってね」

「え…！？」

結衣の言葉に驚き、どうしてそれを…って結衣に聞いてみることに。

「さっき、男バスの子たちから聞いたよ。ごめん、君たちを3日で男バスに勝てるような練習なんて無理だよ。もっとほかの方法で何とか…」

「他の方法なんてないよ！あたしたちにはゆいにゃんたちしかないんだよーねえ、ゆいにゃん…！」

「…ごめん、それに私たちは部外者だし…」

「そ…そんな…ひどいよ…！」

「ま、真帆…！」

真帆はそのまま、体育館から出ていった。そのあとを紗季は追いかけていった。

「船見さん…最終日のコーチ…」

「…うん、今日が最後だし…」

結局、結衣は一人でコーチをし、女バスの最後のコーチを終えた。その後、美星に車で家まで送ってもらった途中、男バスとの試合のことを話した。

「結局、私たちを利用してたんですか？」

「本気で勝ちたかったからに決まってるでしょ？」

「かわいそうですよ。あんなに期待持たせちゃって…それに3日間で強くななんて無理ですよ…」

「…結衣はさ、6年生の時にバスケットしてたよね？」

「は、はい…」

「あんだ、あの時何があったの？途中で放り投げちゃうなんて…」

「…先生には関係ありませんよ…」

「…そう、そういえばさ、気になる子がいたって言うってたよね？その子も見捨てちゃうの？」

「………」

そのまま、結衣の家につくまで無言のままだった…。

すれ違う道で…（前書き）

やってしまったぜい…！ロウきゅーぶでも百合の方向へと突っ走ってしまっぜ…！全国の昴×智花が好きな方々へ、大変申し訳ございません…！自分の百合の妄想が止まらない…！！

すれ違う道で…

最後のコーチの翌日、結衣と京子の教室にて…

「本当によかったの…?」

「…」

「あの子たちを放っておいて本当にいいの!？」

ガタッ

「あ…」

結衣は突然立ち上がり、そのまま教室を出てしまった。そんな様子を同じクラスである綾乃と千歳は見ていた。

「どうしたんやろ、船見さんと歳納さん…」

「喧嘩でもしたのかしら…?」

そして放課後、いつものようにあかりとちなつは倶楽部（元茶道部）の部室に来たのだが…

「あれ、結衣先輩は…?」

「今日は帰るってさ」

「結衣ちゃん…」

そして、部活を休んで自分の買い物を買った結衣は…

「本当によかったのかな…？あれで…」

あの後から女バスのことが気になっていたのだ…。昨日、美星に言われた通り、『気になった子を見捨てていいの？』…湊智花を見捨てていいのかと…。そんなことを考えてると…

「「あ…」」

ここで、智花と出会ったのだ…。

「と、智花ちゃん…」

「船見さん。き、奇遇ですね…」

「今日は部活はいいの…？」

「はい、今日はお休みで…」

「そっか…」

「ふ、船見さんは…？」

「ちょっと…」

「そうですか…では」

「うん」

そのまま二人はとおりがった。なのだが、結衣は何を思ったのか、立ち止まってこんなことを言い出した。

「と、智花ちゃん！」

「は、はい！」

「その…ちようどあかりも帰ってきてると思うしあかりの庭でバスケの練習しない？ちようどゴールとボールは用意してるし」

「いいんですか？」

「うん」

すぐさま、結衣はあかりに連絡し、智花を連れてあかりの家に向かった。そしてあかりの家に着いた。

「結衣ちゃん、智花ちゃん、いらっしやい」

「ごめんね、あかり。急に来ちゃって」

「ううん、平気だよ」

3人はすぐさま庭に行き、結衣は準備をし、あかりと智花はいろいろと話し合っていた。

「智花ちゃんって日本舞踊や茶道の稽古をやってるんだ」

「はい、両親から習ってます」

「ちなつちゃんも茶道やってるから、今度一緒に教えてもらってみたいら？」

「今度機会ありましたら」

「智花ちゃん、準備できたよ」

結衣はボールを智花に渡し、あかりは2人のためにお茶を取りに行くため台所に向かった。

「じゃあ、フリースローの練習を…」

「あの、結衣さん！」

「なにかな？」

「わ、私と一対一で勝負してください！」

「え…？」

いきなりバスケットで勝負をしろなんていいだしてきて結衣はびっくりした。

「もし、私が勝ったら、コーチを続けてください！お願いします！」

「あ…」

コーチを続けてほしいと思う智花を前にして、結衣は断るわけにもいかないのだ…

「うん、いいよ」

そういつて、結衣はゴールを調整して、智花にルールを説明をした。

「ルールは智花ちゃんがゴールを一度でも決めたら勝ち。私はジャンプ禁止で…」

「そ、そんな！ハンデなんていりません！」

「ハンデはゲームを平等にするためにあるんだよ。じゃ、はじめようか」

そして結衣のコーチを掛けた勝負が始まった。すると、智花は素早い動きで結衣を追い詰めていった。

（な…すごい…！）

さすがの結衣もびつくりした。小学生とは思えないくらいの動きで、相手に油断も隙を与えないプレイだった。

（こんなにうまいなんて…でも、ジャンプはしないな…）

バッ

「あー！」

智花の隙をみて、結衣は智花からボールを奪った。

「まずは一本はとったね」

「ま、まだまだ！」

すぐさま、また勝負は再開するも、何度も何度も結衣はボールを奪ってばかりだった。

「そろそろあきらめる？」

「そんな！だって、時間制限はないんだもん！あ…ません…だから、あきらめません！！」

（すごい子だ…ここまで真剣だなんて…）

そんなバスケ勝負も終わり、結局智花はゴールを決めなかった。

「はあ…」

「ごめんね、手加減したら智花ちゃんに悪いし…。あの時ジャンプしてたら私は負けてたよ。なんでしなかったの？」

「それは…」

「？」

「結衣ちゃん、智花ちゃん、お茶持ってきたよ」

「ありがとう、あかり」

ここで3人はお茶を飲み、結衣は智花にバスケのことを聞いてみた。

「智花ちゃんは、どうしてそんなにバスケットで真剣なの？好きだから？」

「それもありますが、私がバスケットできるのはみんながいるからです」

「みんなって女バスの？」

「私去年まで慧心の生徒ではなかったんです。バスケットのことにすると負けず嫌いになって、どうしても勝たないと気が済まなかった…。毎日練習して、みんなにも教養したんです。それで私は孤立しました。当たり前ですよ。勝ち負けにこだわってみんなのことを考えなかった。その学校にはいられなくなって慧心に転校してもずっと一人でいました。みんなと何を話せばいいのかわからなくて…。でも、ある日の体育の授業で真帆と竹中君が喧嘩して…」

「男バスのあの子か…」

「男女対抗でバスケットをして、結局ひとりで脚氣回して、またみんなにひかれちゃうなって思ってたら…」

『ねえねえ、すごいね、バスケット！私にも教えて！もっかん！』

「それで女バスを作ろうって話になって、真帆が幼馴染の紗季を誘ったんです。最初はのりきではなかったんですが、真帆の説得で紗季も入ったんです。その後、愛莉とひなたも入ってくれて、晴れて女子バスケット部になったんです」

「そうなんだ…」

「また嫌な私が出てくるかもって心配しましたが、すごく楽しか

った…。みんなが教えてくれたんです。勝ち負けよりも大切なものがあるって」

「智花ちゃん…」

智花の話を聞いて、結衣は昔の自分を思い出した。昔自分も智花と同じようにバスケットをやめてしまったな…。と。自分も強さばかり求めるばかり、周りからひかれてしまい、結局結衣はバスケットに関わらないと思いやめたのだった。

「でも、男バスと試合して、女バスはどうするの？」

「その時はやめます」

「え!？」

「もうバスケットに関わりません。バスケットがなくなっても、みんなといれば…」

「…本当にいいの？好きなバスケットを…」

「バスケットは好き、でも一番大事なのは5人でいられる場所だから」

「…」

「…最後にもう一度、結衣さんとあかりさんに会えてうれしかったです！京子さんとちなつさんとも会いたかったですけど…」

智花はその満面な笑顔を結衣とあかりに見せた。その後、智花にシヤワーを貸してやり、智花は自分の家に帰って行った。

「
…」

あかりの家に戻ると、玄関にはバスケットボールが転がっていた。
それを見た結衣は…

「結衣ちゃん、今日夕飯は…」

「あかり、ちょっと智花ちゃんのところに行ってくる」

「え？」

結衣はそのまま家を出て、智花を追いかけていった。そして、歩道橋を渡る智花を発見し、智花に声をかけた。

「智花ちゃん！」

「！…結衣さん…？」

「やめないで…」

「え…？」

「バスケをやめちゃだめ！」

「あ…」

「もうバスケはやめようと思ってたけど…無理なんだ…！君を見過ごせなくて…！だからやめないで。バスケができる場所がひとつしかないなら、手放しちゃだめだよ…！あんなすごいシュートを打て

る君が簡単にやめるなんて言わないで」

「…私だって…やめたくないです…でもやめないと守れないんです！私の力では一番大切な場所を守るので手一杯だから…！！」

「守ってあげる…」

「え！？」

「私が守ってあげる！君のバスケも居場所も…！全部守ってあげるから。まだ男バスに勝てる見込みはないけど…でも、智花ちゃんはすごい才能がある。まだ勝機があるよ」

「…えぐ…うえええん！」

結衣の言葉でうれしかったのか、智花は泣き出してしまった。結衣はそのまま、智花の頭をそつとなでた。

「泣かないで…。私も全力を尽くすよ…」

すれ違う道で…（後書き）

やはり百合の方向へと突っ走ってします僕…。さらに困ったことが
ひとつ…智花のふたつ名どうしよ…。同じじゃあなんかあれだし…。

コーチ再び！

その夜、京子は自分の部屋で同人誌を描いてた頃…

ピリリリリ

「ん？」

誰かからメールが来て、携帯をとってそれを読んでもみると…

『今日は無視して悪かった。改めて考えなおして、またあの子たちのコーチをしようと思う！だから、また一緒にあの子たちを指導に付き合ってくれる？ 結衣』

それは結衣からのメールでまた女バスのコーチをやるとのことだった。最初は少し驚く京子であったが、次第にうれしい気持ちでいっぱいになった。

「まったく…」

ため息をついて、そのまま返信して、内容はもちろんオーケーのメールだった。

その後、このメールはちなつにも来て、ちなつも喜んで引き受けることに。

そして、結衣は美星のアパートに来ていた。

コンコン

ドアが開き、ジャージ姿の美星がいた。

「ん？どうしたの？」

「あの、男バスの試合のデータとかってありますか？」

「お…ふふ」

美星はにやついてすぐに男バスの試合の映像が入っているDVDを結衣に渡した。

「遅かれ早かれもう準備はしていたさ」

「ありがとうございます」

「で、試合勝てそう？」

「…確率は低いです。でも、まだ可能性はあります！」

「…ふふ、あの頃の結衣が戻ってきたんだね」

その翌日、七森中の倶楽部4人は慧心学園に来ていた。

「いやー、結衣がまたやってくれてよかったよー」

「まあそれは…」

「バスケ魂がよみがえったの？」

「…まあね…」

「よかった」

結衣がまたバスケットを始められてとてもうれしそうだった京子であった。そして、体育館に着き、中に入っていくと…

「……お帰りなさいませ、お嬢様！」「……」

「あ……」

「また……」

「メイド服だー！！」

女バスの5人がまたメイド服で4人を出迎えてくれた。結衣とあかりとちなつは苦笑いでいてその反面、京子は興奮していたのだ。そして、結衣は気を取り直して…

「えっと…、この間はごめんね。あんなひどいことを言っちゃって。きつと試合は勝たせてあげるから」

「しょうがないなー。許してやるよ、ゆいにゃん」

「真帆ちゃん……」

「私たちも、もっともつと練習しますから」

「あたしも頑張ります」

「おー、ひなもやるー」

「結衣さん、京子さん、あかりさん、ちなつさん、改めてよろしく
お願いします！」

「おう！私らにお任せ…って智花ちゃんっていつから下の名前で呼
ぶようになったんだ…？」

「昨日、いろいろあつてね。じゃあ、練習はじめるか」

すぐさま、9人は体操服に着替えて、バスケの練習を始めることに
…。智花と愛莉とひなたはランニングをすることに。それをあかり
とちなつがサポートすることに。あとの真帆と紗季はシュートの練
習をすることになった。指揮するのは結衣と京子であった。

「じゃあ、この距離からシュートをしてみて。今日から試合までそ
の位置でシュートをするように覚えておいて」

「少し遠くないですか？」

「大丈夫だよ。シュートを打ってみて」

「はい」

言われた通りに紗季はゴールに向かってシュートを打った。しかし、
外れてしまった。

「あ…」

「あーおしいなー」

「大丈夫。この調子で。じゃあ、今度は真帆ちゃん」

「了解！」

真帆もシュートをゴールめがけて打った。

「入れ！」

しかし、これも外れてしまった。真帆はしょんぼりしていたが…

「ゴールにとどいてるから大丈夫。あとは基本のフォームを思い出して」

「膝をやわらく…ですよね」

「うん。じゃあ、私はランニングしてる子たちを見に行くから。京子、この子たちの指導は任せた」

「うい！」

結衣は体育館の外にでて、智花たちの様子を見に行くとそこには…

「ひなた、しつかり！」

そこにはランニングをしていたひなたが倒れていた。それを見た結衣はすぐさまひなたのそばに行った。

「ひなたちゃん！大丈夫！？」

「結衣ちゃん、ごめんね…。ひなたちゃんが無理してるのをあかりたちが気づかなくて…」

「どうしたんだ!？」

その騒ぎを聞きつけ京子が飛び出してきた。

「ひ、ひなたちゃん!？」

「…大丈夫…だよ…お姉ちゃん…」

「な!す、すぐに保健室に!！」

何が起こったのか、京子はすぐにひなたをおんぶってダッシュで保健室へと向かった。それを見た結衣たちは呆気にとられていた。

「京子の奴、どうしたんだ!？」

「さあ…」

そして、ひなたを連れて保健室に向かってる京子はいつと…

「ひなたちゃん!すぐに保健室に連れてくから!」

「にゃーにゃーにゃー 大丈夫。お姉ちゃんの中で少し元気になりました」

「そっか」

そのあと、下駄箱に到着して、靴を脱ごうとするが、靴ひもがきつ

く結んであるためなかなか脱げなかった。

「ひなたちゃん、わりい。少しの間降りてくれるかな…？」

「だめー！」

「ど、どうしてですか…？」

「なぜならひなはお姉ちゃんの背中が気に入りました」

「それなら仕方ないか…。でも…」

「ひなた！？お前何やってるんだよ！」

すると、今度は目の前に以前、会った男バスの竹中がいた。

「おー、竹中」

「てか、あんた！コーチを終わったんじゃないのか！」

「わりーな、わけあって続けることにしたんだよ」

「ふざけるな！早くひなたを降ろせ！」

「わりい、これもわけあって…」

「あ！怪我したのか…？」

「おー、してない」

「そっか、よかった…」

竹中の反応を見て、京子は『はいん』と言い、そのあとこんなことを言い出してきた。

「さては、ひなたちゃんのことを好きなんだろう？」

「な！？ちげーよ！と、とにかく！あんたたちが女バスのコーチをしても俺たちが勝つ！あと一週間で廃部だ！あがいても無駄だ！はっはははは！」

竹中が去ろうとした瞬間、京子は竹中を呼び止めた

「待ちな！」

「なんだよ…」

「靴を脱がしてくれませんか？」

竹中に靴を脱がしてもらい、保健室へと向かっていった。そして、京子はひなたに竹中のことで話していた。

「竹中君ってひなたちゃんのこと好きなのかな？」

「うん？」

「あ、なんでもない。着いたぜ」

保健室が見えて、保健室に入っていた。

「失礼しまーす…」

そこには容姿はレイヤードのショートヘアと縁無し眼鏡をかけた物腰の柔らかい理知的な大人の女性が椅子に座っていた。きっと保健室の先生だろうと思っていたが、その大人びた姿を見て、京子は見とれていた。

（うわ…すげー美人…）

「あらー、どなたかしら」

「えっと、私は以前、美星先生にお世話になった…」

「あー、バスケットのコーチに来てる4人のうちの1人ね」

「この子が具合悪くて…」

「おー、冬子」

「くすつ、あなたも無垢なる魔性の餌食みたいね」
イノセント・チャーム

「え？なんすかそれ…」

「無垢なる魔性…。その子のふたつ名よ。私…生徒にあだ名をつけるのが好きなの…」

そして、冬子は京子に女バスのそれぞれのふたつ名を紹介していた。
プリズマティック・パド
た。愛莉は七色彩蕾、真帆は打ち上げ花火、
ファイヤー・ワークス
紗季は氷の絶対女王政、
アイス・エイジ
それぞれのふたつ名を聞いて興味を沸いた京子は『智花ちゃん？』と聞いてみたが…

「智花ちゃんは…まだ決まっていなかったけど…」

「そうですか…」

冬子は少ししょんぼりし、京子も少し残念そうな表情を浮かべた。そして、冬子はこんなことを言い出してきた。

「よければあなたにもつけてあげようかしら？名前は…」

「歳納京子です」

「じゃ、京子ちゃんも考えておくわ」

「はい！」

なんだかんだで杏子はひなたを保健室のベッドで寝かせた。

「お姉ちゃん」

「なにかな？」

「ひな、終わりたくない。でも、ひなバスケヘタクソ。足遅い。シートとどかない」

「…最初は誰だってそうだよ。たくさん練習してうまくなるんだよ。だから、ひなたちゃんもうまくなれるよ。だから明日からの練習は厳しくなるけど、大丈夫かな？」

「おー、どんとこい」

「うん」

番外編 まりちゃん争奪戦！？智花VSちなつ（前書き）

ここでひとつ番外編を描こうと思い書きました！

番外編 まりちゃん争奪戦！？智花VSちなつ

休みの日、結衣はいつもの3人と付け加えて智花、真帆、紗季を自分のアパートに招待した。そして、智花と真帆と紗季に親戚を紹介した。

「この子が私の親戚のまりちゃん」

「うわー、ゆいにゃんに雰囲気似ていてかわいー」

「かわいいですね」

「えつと…こんにちは」

「こ、こんにちは…」

智花がまりに挨拶をすると照れくさそうに挨拶をするまり。すると、智花の方に視線を向けてじいっと見つめていた。その後、まりは結衣に声をかけた。

「お姉ちゃん」

「ん？」

「あのね…」

なにやら結衣に何かを話してるようだが…。そして、結衣は京子とあかりと真帆と紗季を呼んでこんなことを話していた。

「ミラクるんが来たってびっくりしてるそうだ…」

「あー、智花ちゃんなんか雰囲気的に似てるよね……」

「ミラクるんってあの魔女っ娘ミラクるん！？ゆいにゃんたちも見てるの！？」

「あー、京子が見てるんだよ」

「へえーきょーたんが見てるんだー」

「うん。真帆ちゃんも見てるの？」

「うん！」

「はあ……真帆ったら……」

そんな真帆を見た紗季は呆れて結衣とあかりにこんなことを話した。

「実は、真帆もミラクるんが大好きなんです。だからトモにいつもコスプレさせてるんです」

「そうなんだ……」

「智花ちゃんも大変だね……」

「よし、もっかん！ミラクるんのコスプレを！」

「あ……！」

真帆は智花を連れていった。そして…戻ってきて…

「まりりーん！ミラクルんだよー！」

真帆が連れてきたのはミラクルんのコスチュームを着た智花だった。もうコスプレに慣れてしまったためか、この間のちなつのコスチューム時の時とは全然違う表情だった。それを見たまりと京子はすごい興奮していた。

「あ！」

「おー！ちなつちゃんとは雰囲気違うねー」

「それどういう意味ですか！」

「ほら、もっかん。あれやって」

「うん。愛と正義の…魔女っ娘ミラクルん！華麗に登場！！」

「おおー！！」

智花のミラクルん変身の振り付けも完璧だった。まりは興味深々に智花のミラクルん姿を見ていた。そんな様子をちなつは黒いオーラをただ寄せて見ていた…。

（な、なによなによ！私だって…私だって…！）

今度はちなつは京子呼びつけた。

「京子先輩！」

「な、なに…?」

「ミラクるんのコスチュームありますか!？」

「え?あるにはあるけど…」

「私も智花ちゃんに負けていられませんか!」

すぐさま、ちなつはミラクるんのコスチュームに着替えて、智花たちの前に来て…

「まりちゃん、またミラクるんが来たよー」

ドアから出てきたのはミラクるんコスチュームのちなつであった。しかし、まりの反応はというと…

「…」

「あ、あれ…?」

「ミラクるーん、魔法使って」

「ガーン」

無視されてしまい、ちなつはますますへこむばかりであった。それに引き換え、智花はまりの好感度をどんどんあげていった。

「ほら、もっかん。あれだよ」

「うん。ミラクルん・ドンキ！」

「おー！もう一回もう一回」

「うん」

（きいー！このままじゃ…結衣先輩を智花ちゃんにとられちゃう！）

ちなつの妄想

『子供の扱い上手だね、智花ちゃん』

『いえ、そんな…』

『結婚しよう！』

『は、はい！』

（なんてことになってしまったらー！！）

「あ、あの…ちなつさん…なにか具合でも悪いんですか…？」

「え！？あ…いや…！」

心配そうに紗季が声をかけてきた。ちなつは何を思ったのか、紗季にこんなことを聞きだしてきた。

「そ、そうだ！紗季ちゃんってミラクルんの魔法と違って知ってる

かな…?」

「え…あ…すみません。そういうの真帆しか知らないので私は…」
すぐさま、ちなつは真帆の方に視線を向けるも…

「ほら、まりりんにもう一回」

「うん」

ミラくるん智花に夢中になってとても声を掛けれる雰囲気ではなかった。そして京子に聞こうとしても結局、京子やあかりも智花に夢中であつた。

(こ、こうなつたら…!)

すると、ミラくるんちなつはミラくるん智花の前に立ち、こんなことを言い出してきた。

「み、ミラくるん智花ちゃん!私と勝負しなさい!!」

「ええ!?!」

「ち、ちなつちゃん…ちょっと…」

「勝つたらミラくるんの座はもらつわ!」

「え…えつと…」

「がんばれ、もっかん!」

「智花ちゃんならいけるって」

「ちょっと！なんで京子先輩がそっち側にいるんですか！？」

「まあまあ」

そんなこんなで、ミラクルんの座をかけて、智花とちなつが勝負をすることに。京子と真帆、そしてまりの3人である。

「てなわけで、智花ちゃんVSちなつちゃんのミラクルなりきり対決！まず、審査の方は可愛さ、愛情、正義感で決めるよー！」

「おー！」

「いいのかな…？あんなことさせちゃって…」

「あかりはどっちを応援すればいいのかな…？」

「もう…真帆は…」

そんなこんなで勝手にミラクルなりきり対決が始まってしまったのだった。まず、最初の審査は…

「まずは、パフォーマンスだ！」

「ば、パフォーマンス…ですか…？」

「そう！やはりパフォーマンスといえば、変身シーン！まずはミラクルん智花ちゃんー！」

「あ、はい…！」

「もっかん、がんばれー！」

あわてて、智花は構えて…

「愛と正義の…魔女っ娘ミラクるん！華麗に登場…！」

「おー！」

「さすがミラクるん智花ちゃん！」

やはり振り付けは完ぺきであった。もちろん評価も圧倒的に高いのであった。それを見たちなつはいつもとは真剣そうに智花の変身の振り付けを覚えようと観察していた。以前にも京子にやらされていたのだが、あれは京子の嘘であって間違った振り付けをやらされたのだった。

（よし！変身の振り付けは覚えた！これで結衣先輩に…！）

そして、構えて…

「愛と正義の…ってうわ！」

ガタッ

「痛…」

魔女っ娘ミラクるん…というところまで転んでしまった。その

せいか、さっきの智花の振り付けを忘れてしまったのだった。どうしようとするたえるちなつであつたが、みんながじいっとちなつを見ていたため、こんなことをしてしまった。

「か…華麗に登場…」

「それ…投入のポーズじゃん…」

以前、京子にやられたポーズをしてしまった。もちろん、この勝負は智花の勝ちとなつた。そして、次の勝負はというと…

「次は、正義感！」

「せ、正義感…？」

「ミラクルんといえば、愛と正義の魔法少女！その正義感をためすのは…これだー！」

京子が指差した方向を見ると…

「助けてー」

「ギーガギガギガ！世界を羞恥で満たしてやるー！」

そこには、助けを求めているまりとどこからでてきたのかガンボーの着ぐるみを着ている真帆の姿であつた。なんかわざとらしい雰囲気でもあつたが、これも対決のひとつである。

「さあ、まずはミラクルん智花ちゃん！」

「はい！おイタをするコはめった打ち」

これも真帆が教えたのか、ミラクるんの台詞も完ぺきに言っていた。その後、魔法（演技）でクリアし、評価も高かった。これを見たちなつは智花の完ぺきな演技に戸惑っていた。

（なんで智花ちゃんはあるのに完ぺきな…！？ミラクるんオタクなの…！？）

智花のことは完全にミラクるんオタクだと、勘違いをしているちなつだが、これも全部真帆におしえられて覚えたものであって、決して智花はミラクるんオタクではない。そして、とうとうちなつの出番になって…。

「お…おイタをするコは…めった打ち…」

自身なさげに台詞を言うちなつ。それを見た結衣と紗季がここで止めようと宣言するのだった。

「おい、もういいだろ。このままじゃあ、ちなつちゃんがかわいそうだ」

「そうよ。ちなつさんこのままだと身が持たないよ」

「結衣先輩…紗季ちゃん…」

「…しょうがないなー。じゃあ、結衣と紗季ちゃんの辞令によりこの対決は引き分けてことで」

「でも楽しかったー」

結局、この勝負は引き分けに終わったのだった。だがその後も…

「ミラクルん、本読んで」

「うん」

「智花ちゃん、子供の扱い上手だね」

（きいー！智花ちゃんに結衣先輩を取られる…！）

ちなつの嫉妬はまだ続くのであった…。

愛莉に自信持たせよう作戦！？（前書き）

七森中生徒会に関しては男バスの試合後に出す予定です。

愛莉に自信持たせよう作戦！？

その夜、結衣は男バスの試合をビデオで見ていた。男バスのプレーを把握しだいたいパターンをつかんだのだが…

「問題は愛莉ちゃんかな…？今日の練習の時も…。愛莉ちゃんさえなんとかなれば男バスの子たちには勝てるんだけどな…」

ピリリリリ

「ん？」

携帯が鳴っていて、電話相手は智花だった。

ピッ

「もしもし、智花ちゃん？」

『あ、結衣さん…こんばんは…。その、今勉強をしてましたか…？』

「ううん、男バスの試合を見ていた所」

『あ、そうですか…よかった…』

「ところで、どうしたの？」

『その、お風呂のことか…思いついて…愛莉のことか…』

「ああ、今私も愛莉ちゃんのことか…考えてて…」

その後も愛莉のことで話し合った。やはり愛莉の臆病をどうするかを結衣と智花が迷っていたとき、結衣は智花にこんなことを聞いてみた。

「そういえば、愛莉ちゃんの誕生日が4月生まれだから背が高いつて思い込みはいつからなの？」

『私が転入してからもうその思い込みが続いていて、愛莉は身長のことになると思い込みが強いんです』

「そうなんだ…」

『大きいとか小さいとか言葉にすごく敏感で…スイカは小玉つていうくらいしか食べないって言っていましたし、好きな食べ物は小豆で嫌いな食べ物が大豆とか…』

「どれも大きい小さいの感じが入っているね……あ！そうか、これだ！…」

『え！？』

「智花ちゃん、私にいい考えがある」

翌日、今日もまた女バスのコーチに来ていた倶楽部の4人。そして京子とあかりとちなつは結衣にある作戦を聞かされていた。それは…

「ほんとにそれでいけるの…？」

「いくらなんでもそんな…」

「大丈夫だって。愛莉ちゃんをセンターに立たせるためだから、みんなには協力してもらおうよ」

「成功するかわかんないけど、やってみるか…」

体操が終わった後、京子は愛莉にこんなことを言った。

「あ、愛莉ちゃん背が縮んだんじゃない？」

「「「え!？」」「」」

その京子の言葉に女バスの智花以外は全員驚いていた。それもそのはず、智花は昨日の夜に結衣に愛莉の作戦のことを聞いていたからだ。そして、愛莉は嬉しそうに京子に聞いてみた。

「ほ、本当ですか…!？」

「うん!背が縮んでる感じがするよ」

「よ、よかった。実はこの前、競馬の騎士さんが背が伸びないように筆筒で寝てるって話を聞いて、特注ベッドを作ってもらったんです。マットレスを私の身長ぎりぎりに切って、周りを板で囲ってもらって、ふたも付けたんですよ」

「そっか…(そこまでするなんて…)」

「それって棺桶みたい…」

「しっ！」

「うれしい！もう効果が出たんだ。よし、今日も頑張ろう！」

愛莉が張りきりだし、練習に入った。

「京子、ナイス」

「ふっふっふ、私にかかればこんなもんよ！」

その後も、練習し順調に進んでいった。練習が終わった後、結衣は智花に男バス戦での作戦を話し合っていた。

「こんな感じ行こうと思うの」

「私が竹中君を抑えればいいんですね」

「うん。竹中君は男バスの中でも実力が高い。それに対抗するなら智花ちゃんが一番だと思うんだ」

「はい、頑張ります」

「後は愛莉ちゃん…愛莉ちゃんには悪いけど、ちょっと仕掛けをしようと思ってる」

「仕掛け…？」

「そのために、みんなにはそれぞれの役割の細かいところは教えないつもりである。負担が多くて申し訳ないけど、君の力が必要だ！」

お願いね、智花ちゃん!」

「は、はい!」

「試合までもう少し、頑張ろうね!」

「はい!」

その後も女バスの練習は毎日毎日続き、女バスのレベルも以前とは比べ物にならないくらいに上達していった。

そして、休みの日でもあかり宅で練習をして…

「にゃふふ、ごはんて来たよー」

「じゃ、みんなあがつてー」

「……はい」「……」

そして夕食後、真帆と紗季とひなたがあかりの部屋を見ようとこっそり2階にあがつて行った。

「真帆、こんなことしたら…」

「大丈夫だよ。あかりんの部屋をちょこっとだけ見るだけだから」

「おー、あかりお姉ちゃんのおへやー」

2階に着き、あかりの部屋に行き、見てみると普通の部屋だったためか、真帆は少しがっかりしていた。

「なーんだ。意外と普通だった」

「おー、まほあれ」

ひなたが指差した方を見ると『お姉ちゃんの部屋』と書かれていた部屋があつた。しかも立ち入り禁止の張り紙が貼ってあつた。

「あかりんのお姉ちゃんの部屋かー」

「こら真帆、勝手に…」

「ちょこつとだけだつて」

すぐさま真帆は、部屋を開けてのぞいてみると…

「うわあ…」

「すごくものが散らかつて…え!？」

あたりを見るとそこには妹系の雑誌や同人誌、さらにはあかりの写真がいっぱい壁に貼られていてあかりの抱き枕まであつた…。

「おー、あかりお姉ちゃんがいっぱい」

その光景を見た真帆と紗季はただただ震えていて…『そ、そういうばあかりんにこんな話聞いたよ』って真帆が言つて、『最近パンツがよくなくなるんだ。この前だつて力二さんパンツが…』と紗季とひなたに話し、その下を見ると…あかりの力二さんパンツが…！

ボタン

ただ黙ってあかりのお姉さんの部屋の扉を閉めた。すると、そこに智花がやってきて…

「あ、真帆と紗季とひなた…ってどうしたの？」

「…いやー、トイレ探してー」

「え？トイレなら1階に…って紗季も顔色悪いけど大丈夫？」

「う、うん！大丈夫！」

「よかったー。それと結衣さんが呼んでたからすぐに来てね」

智花は1階に戻っていき、真帆と紗季はこんなことを話した。

「…いつかあかりん襲われるかも…」

「そ、そんな何言ってるのよ！」

あかりのお姉さんのことは智花と愛莉、さらにそのことを知らないあかりたちには秘密にしようと誓った（京子とはつくに知っているのだが…）。

対決！男バス（前書き）

次の番外編がちゆりを書くことと考えています。ちなみに、最後の方でも百合が…！

対決！男バス

いよいよ、男バスとの試合の日。体育館のフィールドには女バスと男バスが並んでいた。その試合をコーチをしていた倶楽部の4人と美星とさらには他の生徒もこの試合を見ていた。

「いよいよか…」

「おはようございます、簗先生」

そこに男バスの顧問、小笠原がやってきた。」

「無駄な悪あがきもこれまでです。勝つのは我々です！」

「小物ほど吠えるんだよな」

美星と小笠原が火花を散らしていて、その姿を倶楽部4人はその迫力に少し引いていた。

「す、すごい…」

「美星ちゃん、燃えてるな！。がんばれー、女バス！！」

「でも、勝てるかな…？」

「大丈夫だよ、あかりちゃん。あの子たちは必至で頑張ってたんだから」

そして、試合開始の笛が鳴った瞬間、ジャンプボールを制したのは

智花だった。そのまま、真帆にボールが回り、再び智花へとパスされていった。

「よし、作戦通り」

「いいぞー！」

その後、ボールは愛莉にパスされ、そのままゴールへと投げ出された。得点を最初にとったのは女バスであった。それを見た美星はびっくりしていた。

「すごい…」

「ただのまぐれだ」

「感じのわりーやつ」

その後も愛莉を中心に女バスは得点を重ねていく。

「すごい、これで2点目」

「これで男バスの子たちもワンツーマンで止められないことを知らせれる」

「でも、愛莉はどうして…」

「ごめんなさい、美星先生。私たち、愛莉ちゃんをだましてるんです」

それは試合が始まる前、結衣は女バスにそれぞれのポジションを発

表していた。

「じゃあ、みんなのポジションを発表するよ。ひなたちゃんはポイントガード、紗季ちゃんはシューティングガード、真帆ちゃんはパワードフォワード、愛莉ちゃんは…スモールフォワード」

「え!？」

意外なことを聞かれた愛莉は少し驚きを見せていた。そして結衣からこんなことを言われる。

「ほんとはこのポジションは智花ちゃんだけど、あえて愛莉ちゃんにすることにした」

「スモール…私が一番スモール」

「そう。このポジションはすごく重要で失敗すれば智花ちゃんと交代してもらうよ」

「交代…」

「うん。失敗したらセンターに行ってもらうね。そこは大きい人がやるポジションなんだ」

「ええ!?! 大きい人…」

それを聞かされた愛莉はショックを受けていた。でもこれは結衣のだましであってそのことは愛莉には黙っていた。結衣も申し訳なさそうに美星に全部話した。

「じゃあ、愛莉はスモールフォワードのつもりでセンターに」

「はい。でも、こうするしかなかったんです。愛莉ちゃんに自信を持たせるためにも…」

「でも、勝たなくちゃ女バスが…」

「わかってるって」

その後も試合は続き、女バスが一気に点数を稼いでいった。そしてタイムアウト、女バスの5人は結衣たちのところに集まり、作戦会議をした。

「みんな、いい感じだよ。あとは作戦通りに行ってもらえば十分だよ」

「……はい」「……」

試合再開、再び智花は愛莉にパスをしようとしたが、愛莉は男バスの2人に封じられたのだが…

「真帆！」

智花はまっさきに真帆にパスを繰り出し、そのまま真帆はゴールめがけシュートし、ゴールしたのだった。

「よっしゃー！」

「真帆ちゃん、すごい」

「すごいな…。あの子たちがあそこまで成長するなんて…」

その後も紗季がゴールを決めた。しかし、その後からだった。女バスたちの調子が狂い始め、男バスに点数を取られてばかりだった。ついには、同点に追い詰められてしまった。

「ああ！なんでだよ！」

「…スタミナだよ」

「え？」

「男バスの子たちはまだスタミナが残っている。けれど、女バスの子たちはスタミナ切れ…」

「どうするんだよ！このままじゃ…」

「大丈夫、そこはちゃんと考えてある」

そして、2回目のタイムアウト

「智花ちゃん、次の作戦。一気に攻めに行って得点を稼ぐことに専念して」

「わかりました」

「そして愛莉ちゃんは守りに入ってゴールを守って」

「はい」

その後も結衣はそれぞれに作戦を話し…試合再開

「行くよ!」

その後も試合は続き、点は取り合い、ついには1点差で男バスが勝っていた。そして、時間もあとわずか。ボールは智花の手に渡っていた。

「はあはあ…」

そして、目の前にはゴールをふさぐ3人の男バス…。そして、奥にはスタミナ切れ状態の真帆、紗季、ひなた、愛莉が…。それを見た結衣は最後まで智花たちを信じていた。

「智花ちゃん…」

「私が…私が負けるなんて…!」

そして、そのままゴールめがけてジャンプシュートをした。

「そんな、些細なこと!だって今は…みんなと一緒にだもん!」

そのシュートはゴールに向かっていったものの、ゴールには届かなかった。

「そんな…」

「もう終わりだー!」

結衣たちも誰もが終わったと思ったその時だった…

「任せて、もっかん!!」

すると、真帆がそのボールを手に取り、そして…

バツ

「あ…!!」

そのボールはゴールに入り、そして試合は終わった。

「や…やった !!」

最後の真帆のゴールが決まったことで女バスは男バスとの試合で勝ったのだった。その後、お互いに喜び合った。男バスのチームは小笠原が連れて去って行った。

「よかった…ほんとによかったよ!」

「ほんとによかったよ、ちなつちゃん!」

「うん!」

「…私、守れたかな…? 智花ちゃんの居場所…」

そんな喜び合う智花たちを見守っていた。結衣の表情からは安心感が出ていた。

そして、あかり宅で祝福のパーティをしていた。

「かんぱーい」

そのパーティは大いに盛り上がり、結衣がこんなことを言い出してきた。

「いやあ、あの時の真帆ちゃんが決めるところはすごかったよ。私は智花ちゃんが決めると思ってたて…」

「私毛」

「あかりも」

「私もです」

「私もてつきり智花が決めるかと……」

「え？あそこは真帆が決めるところでしたよ」

「私もです」

結衣と京子とあかりとちなつと美星は智花が決めるのに対しあそこは真帆が決めると女バスの子たちは言っていた。

その後も線香花火で遊んだりしていた。

「ほれ、これを見ろー！」

京子は線香花火を使って文字を描いていた。それを真帆とひなたに見せびらかしていた。

「おー！きょーたんすげー！」

「京子お姉ちゃんすごい」

「こらこら、そういう風に使っちゃ危ないよ」

そして、結衣は別の場所で花火を準備していると智花が声をかけてきた。

「あの、結衣さん」

「どうしたの、智花ちゃん？」

「その…コーチを続けてくれませんか？」

「いや、私たちはもともと素人だし、今度はプロの人を…」

「結衣さんたちじゃなきゃダメなんです！」

「え…？」

「その…私、結衣さんが好きなんです！」

「ええ！？いきなりそんな…」

「だから、最後まで…結衣さんに教えてもらいたいんです！」

「智花ちゃん…」

「じゃあ、智花がフリースローで50本決めたらコーチ続行でどう

「？」

いきなり美星が出てきてそんなことを言い出してきた。

「いくら小学生でもフリースロー50本は…」

「やります！」

（引き受けちゃったよ…）

対決！男バス（後書き）

こちらの計画では…結衣×京子、結衣×智花を書くつもりでいます。
ちなつさん…あかりさんとお幸せに…

番外編 初めてのデート！？（前書き）

完全に百合の方向へと突き進んでしまったロウきゅーぶ。結衣×智花勃発です！

番外編 初めてのデート！？

ある日の日曜日、結衣と智花は遊園地に来ていたのだった…。

「ついたね…」

「その、結衣さん…行きしょう」

「うん…」

2人がどうしてこうなってしまったのか、それは3日前のことであった…。いつものように体育館で女バスのコーチをしていた結衣と京子。今日はあかりとちなつは櫻子と向日葵の頼みごとで来てはいなかった。そこに京子が急に女バスの5人を呼び出してきたことから始まった。

「みんなー、集まってー」

いきなり京子は5人を呼び出した。いったいどうしたのか、結衣が京子に聞いてみると…

「おい、何してるんだよ…」

「へへーん、実はこの子たちにくじを引いてもらうんだー」

すると、京子は抽選Boxと書かれた箱を出してきた。そこにはめだちたGirlという言葉が消されていた。そして、京子はこんなことを言い出してきた。

「今度の日曜日、5人がくじ引いて当たりが出た子が結衣とカップルごっこしようと思ってー」

「「「「えええ!?!?!」」」」

急なことで結衣は怒りだした。

「ちょ…！なに勝手に決めてるんだよ!?!」

「まあまあ、これも女バスのコーチとなっってからまだ交流もしてないでしょ？だから、結衣と一緒にカップルごっこして、さらに仲を深めようと思ってー」

「それって私だけなのか…?」

「うん」

「なんでそんな…」

「あたし、ゆいにゃんとならどこでも行きたいなー」

「えっと…私は結衣さんとなら…」

「おー、ひなはお姉ちゃんとならいいよー」

「その…デートってことですね…」

「結衣さん…!」

女バスの5人はとてもわくわくしている様子で京子は満足げになっ

ていた。

「それじゃあ、くじを引いてねー」

5人はさっそくくじを引いてそれぞれのくじを手にとっていた。

「それじゃあ、いっせーのせであけるよ」

「「「「「いっせーのせ!」「」「」「」

…とその結果、智花が当てたということで結衣と一緒にカップルごっこをすることに。

「その…結衣さんは他の人とこんなことした経験は…」

「えっと…一度だけ…かな」

「ど、どんな人でしたか!？」

「いや、学校の友達とだよ。その時も京子が…」

「そうですか」

本気の恋愛じゃないことを聞いてほっと一安心する智花。すると、こんなことを聞きだしてきた。

「その時はどこにどんなことをしましたか？」

「あの時は何すればいいのかわからなくて、ベンチで一日中話し合ってただけで…」

（それは友達同士だからなのかな…？でも、結衣さんの友達だしそうよね、きっと…）

「…じゃあ、行こうか」

「は、はい」

そんなこんなで遊園地に入場する2人。その2人を陰で見ている人物がいた。それは…

「京子先輩、これはどういうことですか!？」

それはちなつと京子と真帆と紗季である。ちなつは結衣と智花がカップルごっこすると聞いて2人をつけてきたのだった。

「いやー、その時ちなつちゃんがいなかったからさー」

「そうじゃなくて、なんで結衣先輩と智花ちゃんがカップルごっこなんてやってるんですか!？」

「これは女バスとの仲を深めるための交流だよ。まあせっかく遊園地に来たんだし遊んで行こうよ、ちなつちゃん」

「ちょー！離してください!!」

京子はちなつを連れて他の遊園地の乗り物へと足を運んでいく。残ったのは真帆と紗季だけである。

「きょーたんとちなたん行っちゃったね」

「どうするの？これから…」

「そりゃあ、あたしらだけでもつかんとゆいにゃんを追いかけるに決まってるでしょ」

「行くの…？」

「あつたりまえじゃん！早くいかないと見失っちゃうよー」

「はあ…」

真帆と紗季は2人の様子を見ることに。最初に結衣と智花が乗るのはメリーゴーランドだった。

「そつえば、あかりが好きだって言ってたな」

「その…結衣さん。一緒に乗りませんか？」

「いいよ」

そして、2人は一緒に乗ることに。後ろに智花が結衣にしがみついでいて、まるで馬を連れた王子が姫を乗せているような感じであった。その光景を見ていた真帆と紗季はメリーゴーランドの他の馬車に乗っていてこっそりのぞいていた。

「もっかんやるー」

「あ、あれじゃあ…ちょっと近いような…」

「あ、動き出すよー」

その後、メリーゴーランドが動きだし、結衣と智花はとても楽しそうだった。

「楽しかった？」

「はい」

「じゃあ、次は…」

「結衣さん、これがいいです」

その後も、2人はいろいろ遊園地を周り、コーヒークップ、ジェットコースター、さらにはお化け屋敷など大いに楽しんだ。そして最後は…

「観覧車、乗りましょう」

「あー…」

「いやですか…？」

「そうじゃなくて、ちょっと京子のこと思い出してて…」

それは京子が刺激的なもので妄想しためっちゃ早い観覧車のことを結衣は思い出していた。それはそれでひどいな…って思ってしまう結衣。

「じゃあ、乗ろうか」

「はい」

2人は観覧車に乗って、そのあとを追う真帆と紗季もまた乗ったのだった。そして、結衣と智花はというと…

「しかし、カップルごっこで本気でデートみたいなことになっちゃうなんてね」

「で、デート…／／／」

デートという言葉に顔を赤くなってしまいう智花。すると、結衣は何を思ったのかこんなことを言ってきた。

「その…智花ちゃんは楽しかったかな？今日の…」

「あ…えっと、とても…」

「そっか…」

その後もうまく会話ができずにただ黙ってることしかできなかった。すると、智花が…

「結衣さん」

「なに？」

「結衣さんは…その、本気でデートとかしてみたかったですか？」

「ええ！？」

いきなりのことです感ってしまふ。急にデートをしてみたいと言われて何と答えればいいのかわからない。どう答えればいいのか考えた結衣は…

「えっと…」

「あ、すみません…変なことを聞いてしまつて…」

「ううん。でも、私も一度は…してみたいかな」

「…」

すると、智花はそつと結衣の方に体を寄せていった。

「智花ちゃん…？」

「その時は…またカップルごっこしませんか？」

「…いいよ」

2人はそのままただただ静かに夕日を眺めているのだった。その様子を見ようと頑張っている真帆だが、結局どうなったのかわからないままであつた…

「ああ、もう！全然見れなかつたよ！」

「当たり前でしょ。こんな上じゃあ…」

「でも、女の子同士のデートもいいよね」

「え！？…まあ、私も一度は…」

「ゆいにやんとしたいの？」

「な！だから、そのことを軽々しく言っちゃダメ！」

だが、その頃京子とちなつはというと…

「結局、京子先輩と全部の乗り物に乗ってしまった…。結衣先輩どこにいるんだろ…」

「次これ乗ろうよー」

「もう夕方じゃないですか！てか、それもう乗りましたよ！」

「何回乗っても楽しんだから早くー」

「ちょ、京子先輩ー！！」

まだまだ続くようであった…

番外編 初めてのデート!?(後書き)

いやー。どうしようかめっちゃくちや苦労しました…。

あれ?なんか忘れてるような…。

まいつか、次回も楽しみにー

智花の挑戦とふたつ名（前書き）

今回は短いです

智花の挑戦とふたつ名

男バスの試合の日の翌日の早朝。結衣と京子はあかりと一緒に登校するためあかりの家まで迎えに来ていた。しかし、いくらピンポンと鳴らしても無反応であった。

「どうしたんだろ、あかり」

「具合でも悪いのかな…？」

「あ、京子ちゃん、結衣ちゃん」

すると、庭の方からあかりがでてきて少しびっくりした。

「どうしたの？庭で…」

「ちょっとね」

あかりは2人を庭の方に案内してやってきてみるとそこには…

「智花ちゃん…」

智花があかりの庭を借りてフリースローをしていたのだった。

「どうして智花ちゃんが？」

「あ、結衣さんに京子さん、おはようございます」

「おはよう。もしかして…」

それは昨日のことであつた。それは智花がコーチを続けてほしいと結衣に頼んだ結果、50本フリースロー成功したらコーチをするという約束を結衣は思い出した。

「でも智花ちゃん、私らはいつでもコーチをしてあげても…」

「いえ、自分で決めたことですから最後まで…」

といいつつ、フリースローをつづけたのであつた。

「大丈夫かな…？智花ちゃん」

「まあ、本人がやりたいって言ってるんだから…」

そして、時は過ぎて放課後、倶楽部の部室にて。そのことをちなつにも話した。

「智花ちゃんが50本…ってそれはいくらなんでも」

「今日から毎日あかりの家でやるらしくてね」

「でも…！」

「ここは智花ちゃんを信じよう」

「そ…そうですね！」

「ちょっと！なぜ結衣の時だけ…！」

そして、毎日智花はあかりの家にいき、フリースロー50本目指し続けていた。それを結衣と京子も毎日みることにしている。しかし、なかなか決まらず平均して2、30本が入っていたぐらいだった。

それでも、毎日続けるたびに平均が40本代ゴールに入るようになったのだった。それから毎日毎日、続いて…

「…これで48本目か…」

「ん？」

突然、雨が降ってきたのだった。

「智花ちゃ…」

ここで区切ろうと智花を呼ぼうとしたのだが、それはとても真剣なまなざしだった。その後も投げ続けて49本目が決まった。

「あ…」

そして、50本目のシュートがゴールめがけ、行った。すると、雨がやみ晴れてきたのだった。そしてその瞬間

バツ

「あ…！」

「す…すごいよ！智花ちゃん…！」

50本目のシュートが決まり、あかりは喜びでいっぱいだった。

「すごいな…。とても小学生とは思えないよ」

「輝く魅力」
ラナンキュラス・アンティープ

「え…？」

いきなり京子が何か言ってきたので結衣は思わず反応してしまった。

「なんだよそれ…」

「智花ちゃんのふたつ名だよ」

「ふたつ名…？」

「ちなみに真帆ちゃんは打ち上げ花火ファイヤー・ワークスで紗季ちゃんアイス・エは氷の絶対女王インセント・チャーム政イシで愛莉ちゃんは七色彩蕾でひなたちゃんは無垢なる魔性だよ」

「誰がつけたんだよ」

「智花ちゃん以外は冬子ちゃんだけど、智花ちゃんは今私がつけたの」

「ふふ、誰だよ」

なんだかんだと言って約束通り、結衣たちは女バスのコーチをまた続けることにしたのだった。倶楽部に関しては1年間休部することに（主に何をしていたのかはわからないが…）。

そして、慧心学園にまた倶楽部の4人は来ていたのだった。

「また来ちゃったね」

「でも、私は別にやってもよかったよ」

「だから京子先輩が教えるんじゃないのに」

「じゃあ、入るか」

体育館の扉を開けて、その先には…

「ええ！？」

「「「「お帰りなさい、あなた！」「」「」」

女バスの5人が裸エプロン（下に水着を着ている）で4人を出迎えてきたのだった。しかし、結衣とあかりとちなつはその光景を見てさすがに引いてしまったが、京子は鼻血でぶっ倒れてしまった。

「お、おい！京子！しっかりしろ！！」

「えっと…それって…」

「紗季のアイディアだよ」

「ちょ！バカ真帆！！」

紗季の意外な一面を見て、あかりとちなつは思わず苦笑してしまったのだった…。

智花の挑戦とふたつ名（後書き）

ええ…智花のふたつ名は天船さんのアイディアを選びました。天船さんへご応募ありがとうございました。

合宿と生徒会（前書き）

アニメロウきゅーぶの八話の回はこの小説では省きます。理由は言うまでもなく…ってところですよ（笑）。また、昴の出番もないかもです…。また、今回から小説の書き方を変えます。

合宿と生徒会

「……ここね」

慧心学園にある人物たちがやってきた。それは七森中の生徒会たちであつた（会長は除く）。

「ここに歳納さんたちがいるんやて」

「慧心学園の初等部……ってか、なんでわたくしたちまで？」

「いいじゃん、面白そうだし」

「待つてなさい……歳納京子！！」

なぜ生徒会たちが来ているのか、数日前のことであつた。

七森中生徒会室、そこにはいつも以上に落ち込んでいる綾乃と励ましている千歳がいたのだった。

「あ、綾乃ちゃん…そんな落ち込まんといて……」

「なんで……なんで歳納京子がいないのよ！　すぐに帰っちゃうし、部室にもいないし！」

そして同じく生徒会メンバーの大室櫻子と古谷向日葵が来た。

「あれ？　杉浦先輩、元気ないようですが……」

「ああ、最近会いたい人に全然会えんくつてな」

「そういえば、赤座さんからこんなものを預かってますが」

向日葵からある紙を綾乃に渡した。

その紙には綾乃も驚くこんなものだった。

「な、なによこれ!？」

「どないした？ 綾乃ちゃん」

千歳もその紙を見ると……

『倶楽部 一年間休部届け』

「倶楽部ってあかりちゃんの入ってる部活じゃ……」

「こ……今度の休日に歳納京子を尾行するわよ!」

てなわけで、結衣たちをつけて慧心学園まで尾行してきたのだった。

そんなことも知らない結衣たちは、今度クラス対抗の球技大会の試合の合宿で来ていて、今は女バスの子たちと一緒にお昼ご飯を食べることにしていた。

「へえ、これみんなが作ったんだ」

テーブルの上には女バスの子たちが作ったおにぎりとお味噌汁があった。

全員はテーブルの前に座り、お昼ご飯をとることに

「まさか合宿までされるとは思わなかったよ」

「いいじゃん。私はこの子たちがいてくれるだけで幸せだよ」

「もう、京子先輩は調子がいいんだから……」

さっそく結衣はおにぎりをひとつとると……

「それ、トモが作ったおにぎりなんです」

「智花ちゃんか？」

「その……どうぞ」

「じゃあ、いただきね」

「この星形は……」

「それひなが作った」

「この小さいのは……？」

「私です」

「この丸っこいのは」

「私が作りました」

「そしてあたしのはこれ」

智花、ひなた、愛莉、紗季、真帆の順で自分たちが作ったおにぎりを紹介していき、結衣たちはそれぞれのおにぎりを食べた。

その後も楽しくお昼ご飯を食べた後は女バスの子たちは体育館で練習をしに行き、結衣たちは食器を洗っていた。

「料理までしてくれるなんていい子たちだよね」

「うん、みんないいお嫁さんになれるよー」

「京子先輩、手伝ってくださいよ！」

「でも…なんで竹中君は…」

結衣はさっきの女バスの子たちの話が気になっていた。それは竹中がどうしてバスケを選ばなかったのか……。彼がいれば、十分な戦力になると思ったのだから。

「た、大変です！」

すると、突然紗季がやってきたのだった。

「どうしたの、紗季ちゃん？」
「すぐに来てください！」

いったい何が起こったのか紗季と一緒に4人は体育館に行くところには…

「あれは…」

真帆とあの男バスのキャプテン、竹中夏陽が喧嘩をしていたのだ。
った。

「竹中君……！？ どうしてここに……？」

「早くとめないと……」

「止めようにも全然いうこと聞かないから……あの2人」

「でも、止めないと……！」

結衣はすぐさま2人の喧嘩を止めて、どうして竹中がここにいるのか結衣は聞いてみると……

「バスケにエントリーを……？」

「そうだよ」

「てめーバスケが嫌だからってサッカーに……」

「先生が間違えて俺をバスケにエントリーしちまったんだよ！」

「間違えてエントリー……」

「で、バスケにエントリーしたものは今日の合宿に参加だって聞いて来たんだよ」

なんだかんだで練習は始まったものの、竹中は1人だけ、みんなとは離れたところで練習をしていた。

いったいどういうことなのか結衣は美星に電話して聞いてみると

……

「どうして竹中君がここに……」

『おー、いつとくの忘れてた。合宿一人参加者一名追加、竹中夏陽以上』

「以上つて……真帆ちゃんと竹中君の中が悪いことを知ってて……？」

『あいつさ、断らなかったんだよ。間違えてバスケットにエントリーしちゃったんだけどって聞いたなら別にかまわないって合宿の参加も嫌がつてなかったし』

「竹中君が……」

『バスケットの方が大事だと思ってるんだよ。あたしからエントリーさせておいたし』

「そうですか……」

その後も美星の話を聞いた後、結衣は竹中の方に行つて……

「な、なんだよ……」

「一緒に練習しないの？」

「はあ？ 別にあんたには関係ないだろ」

「でもさ、せつかく来たんだし一度くらいは」

すると、真帆がこちらの方に気が付いて不機嫌そうな顔をして結衣に言った。

「ゆいにゃん、そんなバカほつといてもいいよ！」

「黙れアホ真帆！」

「もういつぺんいつてみ……」

「歳納京子お　　！！」

「ええ！？」

「な、なんだ……？」

「あ、綾乃……？」

突然扉が開き、真帆と竹中の喧嘩がはじまるタイミングに七森中の生徒会の副会長、杉浦綾乃と池田千歳、大室櫻子に古谷向日葵がやってきた。

そして、靴を脱ぎそのまま体育館に上がってきた。

「まったくこんなところまで……」

「お邪魔します」

「あ、櫻子ちゃんに向日葵ちゃん」

綾乃はすぐさま京子に近づいてきた。

「な……なに……？」

「部活の一年間休部届がきて、黙ってついてきたらこんなところで何やってるわけ？ しかも小学生相手に！」

「えっと……」

「とにかく、無断不純行為は罰金バツキンガムよ！」

「ぶは！ ば、罰金……罰金バツキンガム……」

「何が面白いんだ、それ……」

結衣の笑いのツボを見て呆れる竹中。

そんなこんなで京子は綾乃たちにもちゃんとわけを教えてあげたのだった。

「バスケのコーチを……？」

「それでいつも放課後にすぐ帰っちゃうんやな」

「なんで今まで言わなかったのよ？」

「女バスの子たちにいち早く会いたいからつい……」

「はあ……」

京子のいい加減さに呆れてため息をしてしまう綾乃。
ここで京子は綾乃たちにこんなことを言い出してきた。

「せっかく来たんだから、綾乃たちもこの子たちのコーチをしてみたら？」

「な、なんでそうなるのよ！」

「それにちょうど合宿だし、着替えは美星ちゃんが手配してくれるから」

「勝手に決めないでよ！」

「まあまあ、ええんとちゃうの？ 歳納さんに会えたことやし」

「私は賛成！」

「まあ、せっかくですから……」

てなわけで七森中学生徒会の4人もこの合宿に参加が決まり、さっそく京子は美星に連絡をし美星も喜んで手配してくれるのことであった。

まだ戸惑っている綾乃はこんなことを聞いてみることに

「先生もよく賛成してくれたな……」

「でも、バスケのコーチって言ったって何をすればいいのかしら？」

「主に結衣が練習を指揮して、私らはサポートするんだよ。いつもこうしてきてるから」

「それと、あの2人仲が悪そうだけど」

櫻子の指をさした方を見るとまた真帆と竹中が喧嘩をしていたのだった。

「あー」

「なんで男子が一人いるの？ 女バスのコーチをしているんじゃない？」

「……」
「実はね……」

綾乃たちにもどうして男子である竹中がいるのか、今度のクラス対抗の球技大会のことをすべて話した。

「でも、真帆ちゃんと竹中君は仲悪そうやけど」

「どうして仲が悪いのか、私たちもわからないんだよ」
「ちよっとランニングに行ってくる」

体育館から出てシューズを履き、竹中はランニングに行ってしまった。

真帆も追いかけてようとするが、みんなに止められた。

「なんだかコーチも大変そうね……」

「うん……」

仲直り大作戦（前書き）

ゆるゆりのアニメを見ているせいか、こればかり更新してばかりです。なもり先生のツイッターを見てもわかるとおりなもり先生が仕事しすぎ…。

仲直り大作戦

合宿初日の夜、紗季と愛莉は宿題のため勉強をしており、そこに綾乃と向日葵が2人の勉強を見ることに。

真帆とひなたと櫻子とあかりとちなつが寝ていてそこに京子と綾乃の百合プレイを妄想をしたのだろうか千歳が鼻血を出して倒れていた。

当然のごとく最初、千歳の鼻血に女バスのみんなは驚いていた。別の部屋で竹中は寝ている。

そして、また別の部屋では結衣と京子と智花は真帆と竹中がどうすれば仲良くなれるか相談していた。

「強力ですか？」

「真帆ちゃんと竹中君がどうすれば仲直りになれるか作戦を考えてほしいんだ」

「私も2人には仲直りしてほしいですけどそういうの苦手で……あまりお役にたてないかと」

「そっか、ごめんね。智花ちゃんなら気軽に話せれると思っててさ」「ふええ！？」

いきなりの結衣の発言で智花の頬は赤く染まってしまった。

京子は話を切り出すかのように結衣に言った。

「となると、私と結衣で考えるしかないね」

「といってもあの2人をどう仲直りさせればいいんだか……」

「や、やります！」

「「え？」」

「得意じゃありませんけど、結衣さんが私が一番だって言うてくださるのならお断りできません！」

「あ、ありがとう……」

「頑張っちゃいますよ、私！」

急にはりきる智花にびっくりしてしまった結衣と京子。

「とりあえず、作戦会議に……」

「頑張りましたよ！」

「う、うん……」

「智花ちゃんってこんなキャラだっけ？」

作戦その1。

みんなで美星から借りてきたゲームをすることに。

先ほどから真帆と竹中のペアが連勝していて、挑戦した櫻子と向日葵も負けてしまった。

「あー、負けちゃったよ」

「櫻子があそこで失敗するから」

「向日葵だって真帆ちゃんばかり狙ってるから負けたじゃん！」

櫻子と向日葵が喧嘩を始めてしまったが、これはいつものことなので気にしなかった。

「これで4連勝！」

「へ、余裕だ余裕」

2人はいい感じに息が合っていた。

「ゲームなんてよくありましたね」

「美星先生がもってけてって言われてね。ゲームがこんなところで役に立てるとはね」

「綾乃ー、次は私らでやろうよ」

「な、なんで私も!？」

「いいじゃん、せつかくだからさ」

そこに千歳は眼鏡を取り外し、脳内では……

『ほら、私が教えてあげるから』
『や、優しく教えて……』

「豊作やわ……」

説明しよう、千歳はメガネをはずすと視界を遮り、神経を集中させて本格的な妄想に入り、鼻血を出してしまう。

千歳の鼻血にきずいたあかりはすぐさまティッシュを渡した。

その後、京子と綾乃のペアで挑戦するも結局、真帆と竹中に負けてしまった。

「あー、負けた」

「強いわね、あの2人……」

「結衣ー、変わってよー」

「私？」

「じゃあ、智花ちゃん変わって」

「ええ!？ 私ですか？」

（ちよ、杉浦先輩！ なんで智花ちゃんに渡すの!？）

黒いオーラが漂いつつも誰も気づかぬまま、結衣と智花のペアでゲームをすることに。

しかし……

ドオオン

「あ、あれ？　これで終わり？」

「うわ……」

まさか智花がここまでゲームが強いとはだれも思いもしなかった。智花1人で真帆と竹中を倒してしまった。結衣はただただ啞然とするばかりだった。

「……ヘタクソ」

「……お前だろ」

2人はコントローラをひっぱなげ、また喧嘩を始めてしまったのだった。

「ちょ、だめだよ！」

「喧嘩しないの！」

「はっ！　ほっ！」

喧嘩しているのにも関わらず、智花はゲームに熱中していたのだった。

この作戦は失敗であった。

作戦その2。

今度はトランプで七並べをした。

しかし、ここでトラブルが……

「パス」

「私もパスです」

「私も」

「あかりもパス」

「うちもパスやわ」

「私もパス」

「わたくしもパスですわ」

誰も出さずにパスが続いていった。

そして、竹中の出番の時に……

「ちらっ」

「み、見るなよ！」

「夏陽！ お前が止めてるんじゃないのか！？」

「ちげーよ！」

そして、また喧嘩を始めてしまったのだった。

「2人とも、喧嘩は……」

「結衣さん、下！」

「え？」

智花の指差した方を見ると、ハートの5と8が落ちていたのだった。
た。

どうやら配るときに落としてしまったようだ……。

「なんでこうなるんだよ……」

作戦その3

竹中にも昼食を作るのを手伝ってもらうことにした。

他のみんなは順調に進んでいるのだが、たまねぎを切っている真帆と竹中はたまねぎを切っていくほど涙が出ていた。

「ごめん、目がしめて……全然進まない」

「うう……なんで俺がこんなことしなきゃいけないんだよ」

「だったら、夏陽は食べるな……！」

「第一、お前の切り方が……！」

「なんだとー！」

「やるかー！」

なぜか野菜を向け、喧嘩を始めてしまったのだった。

この作戦も失敗であった。

そして、廊下にて結衣と智花は真帆と竹中のことで話し合っていた。

「うまくいかないね」

「あの2人、前は仲が良かったんです。真帆がバスケットを始めてから急に仲が悪くなったって紗季が首をかしげてました」

「なんで真帆ちゃんバスケット始めただけで仲が悪くなるんだろ」

「……原因は私なのかもしれません。真帆が私のためにバスケットを作ってくれたから……」

「そんなことないよ。バスケットやりたかったのは智花ちゃんだけじゃない。真帆ちゃんだってバスケットをやりたいくてバスケット部を作ってくれたんだから。それにこれは真帆ちゃんと竹中君の問題なんだからあまり自分を責めちゃだめだよ」

「……結衣さん」

「トモ！ 結衣さん！」

ここで紗季が来て急に叫んだため結衣と智花はびっくりしてしま
った。

「さ、紗季ちゃん？」

「ごごごご、ごめんなさい！ 暗くて気づかなかったもので……」

「え？」

「だ、大丈夫です！ なにも聞いていませんし、携帯で写真撮って
ませんからごめんなさい！ トモと結衣さんがそんな関係だったな
んて…… キー！」

「紗季ちゃん、落ち着いて！ これは紗季ちゃんと思ってることと
違うから……って千歳まで！」

このタイミングで紗季のそばに千歳がおり、眼鏡を取り外してい
てこんな妄想をしてしまったのだった。

『ゆ、結衣さん……、今日はその、一緒に寝てくれますか？』

『いいよ。さあ、おいで。かわいい子猫ちゃん』

『結衣さん……』

「これはこれでありやな……」

「きゃ！ 千歳さん、鼻血！」

結衣と智花の百合の妄想で鼻血が出てしまい、妄想が止まらな
くなってしまった。

「ち、千歳……」

結局、千歳のせいで大騒ぎになってしまい数十分後なんとかおさまった。

女バスの5人が大浴場に入ってる頃、京子たちは待機していた。

「まったく、千歳はここまで来て……」

「ごめんな……船見さんと智花ちゃん見ていたらつい……」

「あれ？ 結衣先輩は？」

「結衣なら竹中君と一緒にジュースを買いに行つたよ」

そして、結衣は竹中と一緒に近くのスーパーに行き、ジュースの買いだしをちょうど済ませたところだった。

「ごめんね、買い出しにつき合わせちゃって」

「別に。暇だし」

学園まで結衣と竹中は夜道を歩きだしていった。

結衣は竹中と他愛もない会話をしていき、ここで結衣は真帆のことで竹中に聞いてみることに。

「竹中君はどうして真帆ちゃんがバスケやるのが気に入らないの？」

「……何も知らないからそんなこと言えるんだよ」

「知らないってなにを？」

「やめちまうんだよ。バスケだって！ 真帆は！」

「真帆ちゃんがバスケをやめる？」

「真帆って何をやらせてもすぐにうまくなるんだ」

「確かに、私も驚いたよ。真帆ちゃんがすぐにバスケだって上達したし」

「……真帆は逆上がりもはやぶさとびだって誰よりもすぐに覚えちゃう！俺だってまけたくねえから必死で練習して、同じことをやれるようにやったけどさ……で、俺ができるようになるとアイツはすっかり飽きててさ。『そんなことよりかくれんぼしよう』ってこうだぜ！アイツはなんでもできちまうと途端に飽きちまう。鉄棒とか縄跳びならいいけど、バスケットも同じようになったらたまんねえよ俺……そうなる前に、こっちから絶交したんだ！」

「真帆ちゃんが飽きてバスケットをやめると言いたいの？」

「ちよつとシュートができたくらいでバスケットの何がわかるんだ！ちよつとできるようになつたくらいでアイツはすぐにやめちまう」

竹中との会話で気持ちがわかるようになってきた結衣。

学園に帰ってきて、ボールが弾む音が鳴っていて、見てみると……

『116……117……』

真帆がシュート練習をしていたのだった。

そんな様子を見る竹中も驚いたのだった。

「前に智花ちゃんが言ってたよ。真帆ちゃんはいつもあの練習をしているんだって。真帆は女バスのために頑張ってるんだよ。真帆ちゃんは見つけたんだよ」

「見つけた……？」

「本気で打ち込めるものにだよ」

まだ真帆はシュート練習をしており、竹中はそれを見て何かを感じ取ったかのように寝室に行こうとした。

「竹中君はまだ真帆ちゃんがやめると思うの？」

「……真帆ってさ、お化けとか苦手でさ。ああゆう薄暗いところが

大嫌いなんだよ」

「……おやすみ」

そのまま、竹中は寢室の方に行った。

結衣は黙って真帆が練習しているとこを黙って見守っていたのだ。
った。

仲直り大作戦（後書き）

また次回も番外編をやろうと考えています。

そして、また困ったことに……。ひなたのパンツ事件をどうしよう
！

番外編 結衣と京子の一日（前書き）

今回はゆるゆりの原作6巻のお話です。そこに真帆と紗季が出るという話です。

ここでタイトルコールを……

「アツカリン」

あかり「はい」

智花「なんですか？」

ちなつ「ここに呼ばれたってことは……」

「アツカリン」

あかり&ちなつ&智花「「えええ！？」」「」

3人は透明になってしまった。

あかり「この小説でもやるの！？」

智花「なんですか！？ これは……」

ちなつ「私たちの出番はここだけってこと」

智花「そんな……」

ちなつ「影が薄いのが移った！」

あかり「それあかりのせいなの！？」

智花「私ヒロインですよね……？」

番外編 結衣と京子の日

ある日の休日、京子は結衣の家でゲームしながら今度の同人のネタを考えていたのだが、結局思いつかず。

その後、結衣とともに公園に出かけていったのだった。すると、そこには……

「あ、ゆいにゃんにきょーたん」

「お！ 真帆ちゃんに紗季ちゃん」

「こんにちは」

「今日は2人だけなの？」

「はい」

「せっかくだからあそぼーぜ！」

「うん！」

砂場で京子と真帆はトンネルを作ることにしたのだが、結衣と紗季はベンチで座っていたのだった。

というのも砂場で遊ぶのはやめておいた方がいいと思っている顔をしていた。そんなこともお構いなしにトンネルを作っていると猫がやってきた。

しよわわわわ

「……」

砂場におしっこをしてそのまま立ち去って行く猫。それに対して京子と真帆は砂場で遊ぶのをやめたのだった。

今度はブランコの方へ行き、ブランコで遊んだのだった。

「懲りない2人だなー」

「ほんとに真帆は」

「京子と真帆ちゃんは似てるなー」

その後も2人はブランコから飛び降りるなどの遊びで大いに楽しんだ。今度はパンダのばねの乗り物を見つけて京子は乗るのだが……

「なんじゃこりゃ……ばね弱すぎだろ」

「中学生の体重だとそうなるわな」

「今度は真帆がする」

「真帆も6年生でしょ」

公園で遊んだ後は小腹がすいたためワックへと向かった。ワックの中に入り、カウンターへと向かった。

「店内でお召し上がりですか？」

ワックの店員が言うと京子がこんなことを言い出してきた。

「テイクオフで」

ぺしっ

京子にツツコミを入れる結衣。その後、テイクアウトと答えたのだった。

「ご注文は何にしましょう?」

「スマイ……」

ぺしっ

「あたしてりやきねー」

「私はチーズをお願いします」

「私ダブルチ」

「えーと、てりやきとチーズバーガーとダブルチーズバーガーあとはポテトで」

「かしこまりました」

その後、ハンバーガーを買った後はベンチで4人で食べることにした。

「うま」

「おいしいよーゆいにゃん」

「真帆、行儀悪いわよ」

「外で食べるのもうまいな」

「きょーたんはいつもダブルチーズをダブチって略すんだ」

「ナウでヤングな略語だよ」

「えっと……」

「ほっというていいよ」

すると、食べているうちに京子はなにかに反応した。

「ピクルス抜いてもらうの忘れた」

「苦手だっけ？」

「そうではないけど、避けて食べたい」

「私は平気ですけれど」

「ドロップにはいつてるハツカみたいなやつか」

「ええ！？ あれはメインディッシュだろ！」

「そうだよ！ ゆいにゃん！」

「そうなの？」

食べ終えた後は4人は結衣の家に帰り、結局京子の他にも真帆と紗季も結衣の家に泊まっていくことに。

「いやー、まりりんと会って以来だね」

「それにしてもいいんですか？ 私たちまで……」

「いいってことよ」

「まったく……」

4人はお風呂に入った後、結衣、京子、真帆、紗季の順でパジャマがパンダ、トマト、ワニ、イチゴだった。結衣と紗季はともにゲームを楽しむことにするが、京子と真帆は公園で遊び疲れたのか布団で眠っていた。

「真帆は全く……」

「京子も公園で遊び疲れたんだろうね」

「お互い大変ですね」

「うん。でも、京子がいないとなんか落ち着かなくてね」

「私も真帆をほっておいたら何をしでかすか」

「……待って」

「寝言か」

京子から寝言が聞こえてきたのだった。するとこんな寝言を言ってきた。

「だから体にボンドぬっておけっていったじゃん」

「どういう状況だよ」

「もっかんゝパス……」

「真帆ったら」

京子の夢はどういうものかわからないが、真帆の夢はバスケットをしているらしい。数分後、京子と真帆が目覚めたのだった。

「今何時？」

「8時」

「8時かー結構寝ちゃったよ」

「ところで、体にボンド塗るってどういうこと？」

「ええ！？ 結衣ってそんなことするの？」

「お前だよ」

「真帆もバスケットの夢を見てたんだね」

「おー、楽しそうな気分だったのはそれかー」

そして京子と真帆もまじり一緒にゲームをすることに。すると、結衣がこんなことを言ってきた。

「そういえば、ワックの店員さんどこかで見たことあるような」

「アタシはなんかどこかで見た雰囲気だなーって思った」

「あー、あかりのねーちゃんだろ」

「気づいてたのかよ!」

「あかりのお姉さんでしたか……」

突然なぜか真帆と紗季はお互いに目を合わせたのだった。どうしたのか京子が聞いてみることに。

「どうしたの？」

「いやーあかりんのお姉ちゃんの部屋が……」

「バカ真帆!」

「あ……」

「？」

「「え?」」

あかりのお姉さんの部屋のことを言い出すと京子がきょとんとし

たのだった。京子は2人を部屋の隅っこに連れて行った。

「部屋見たの？」

「え！？ 京子さんですか！？」

「うん……」

「きょーたんも見ってたんだ……」

「その、このことは内緒だよ」

「はい……」

話が終わり、結衣の元へと戻って行ったのだった。その後、ゲームのボスを倒し、結衣が満足げであった。

「勝てた」

「そりゃああんだだけレベルあげりゃあ勝てるわ！」

「ゆいにゃんってレベル上げの上手いねー」

「ボスをあっさり倒すのが快感なんだ。ふふ」

「なにかストレスでもたまってるのか……？」

「結衣さんってなにかあったのかしら……？」

「アタシに聞かれても……」

京子はこのゲームをやるため、ケースから選んで取り出したのだ。
った。

「次これやろうぜ」

「おー恋愛ゲームかー」

「れ、恋愛ゲーム!？」

「いいけど……漫画のネタだしは？」

結衣にそれを言われると京子がびっくりした顔となり、結局それは明日となってしまったのだった。

そんな結衣と京子と真帆と紗季の一日であつたのだった。

和解と鉄板マスター（前書き）

このクロスももうロウきゅーぶ6話あたりか……。それにしてもなかなか番外編ばかりに力入れているような……。本編も頑張ります！

和解と鉄板マスター

合宿3日目、朝食を食べ終えた後、結衣とあかりは皿洗いをして
いた。皿を持ってきた紗季が結衣に声をかけてきた。

「いつも洗い物お願いしちゃってすみません」

「いいよ、紗季ちゃんたちにいつも炊事を任せているんだし」

「そうだよ」

「夏陽にも手伝わせましょうか？ あいつ、何もやっていませんし」

「大丈夫だよ。私とあかりで好きでやってるんだし」

「あの、昨日はすみませんでした。真帆と夏陽のために私を頼りに
してくださったのに……冷たい言い方してしまったなって」

「……大丈夫だよ。竹中君のことなら」

「？」

そんな結衣の発言に不思議そうな顔をする紗季に対してあかりは
ちんぷんかんぷんそうな顔をしていた。

その後、グラウンドに行き、ランニングをすることにした。もち
ろん七森中の生徒会メンバーたちも加わることに。

「ラスト一周、頑張って」

「歳納京子、いつもこんなことしているの？」

「まあ、女バスのコーチだからね」

京子と綾乃の会話をしているところを見た千歳は走りながらも眼鏡を取り出してこんな妄想をしていた。

『さあ、一緒に走ろう。私が付いてるよ……』

『や、やさしくして……』

「素敵な朝やな……」

「千歳さん！ 鼻血！」

智花が千歳の心配している中、櫻子と向日葵は張り合いながらもランニングをしていて、あかりとちなつは愛莉とひなたと並んで走っていた。

そして真帆はというと竹中と一緒に走ってるから、不機嫌そうな顔をしていた。紗季が竹中のことで真帆を話していた。

「どういふこと？」

「関係ないよ！ 一緒に練習したいなら勝手にすればいいし」

「……そうね」

ここでランニング終わり、休憩に入ること。紗季が結衣に午後
のスケジュールを聞いた後、紗季はクスツと笑った。

「夏陽が練習するのって結衣さんのおかげですよ」

「え？」

「結衣さん、昨日いろいろと仕掛けてたみたいだし」

「あー、ゲームやトランプのことね。でも、失敗したけれどね……」

ここで結衣が昨日、竹中がどうして真帆と仲が悪いのか紗季に全
部話したのだった。

「それで夏陽……」

「でも、竹中君も真帆ちゃんのことを真剣にバスケをしていること
をわかってくれたみたいだね。まだ真帆ちゃんとはぎくしゃくし
ているけど、合宿に参加してくれただけでも良かったよ」

「ふふ……。そういえば、櫻子さんと向日葵さんってなんであんな
に仲が……」

「あかりから聞いたんだけどお互い生徒会副会長を目指しているラ
イバル関係ってとこかな」

「そうなんですか」

「でも、それほど仲は悪くないみたいだね」

その後、結衣と紗季の会話が続き、体育館で真帆と紗季と竹中、そして櫻子と向日葵が掃除することになった。

「ちえ、なんで向日葵と一緒に掃除しなきゃいけないんだよ」

「それはこっちの台詞ですわ」

相変わらずの仲である櫻子と向日葵で、真帆も不機嫌そうに掃除をしていた。

「なんで俺たちなんだよ……」

「そーそー、なんで夏陽なんかと」

「俺なんかとどういう意味だ？」

「そーいう意味だったの！」

「まあまあ、いいじゃない。私たち幼馴染なんだし」

真帆たちのやりとりを見て向日葵がこういつてきた。

「三沢さん、櫻子と似てますわね」

「どーいう意味だよそれ！」

「早く掃除しなさい。しなきゃ湊さんたちも来ますわ」

「ちえー」

それから、5人で早くも掃除が終わって真帆がボールが入ったか
ごを持ってきた。

「少し早いけど、練習はじめよっか」

「うん」

「やってよーぜ。合宿だったのにさ練習量絶対足りないしさ。アイ
ツあまいから」

アイツとはきつと結衣のことだろう。それを聞いた真帆が怒りだ
した。

「ゆいにゃんを悪く言っな！」

「でも……」

「うわ」

いきなり竹中はかごとったボールを真帆にパスしたのだった。

「そんな悪い奴じゃない」

「……当たり前だろ」

「じゃあ、私らもやろーよ」

「わたくしたちは湊さんたちのコーチをやってるんですよ」

「いいですよ。櫻子さんたちもやっていただいても」

「それとひまりんあたしのことは真帆がまほまほって呼んで。それとみんなのことさん付け禁止」

「でも……」

「紗季ちゃんが言ってるんだし、やろーよ」

櫻子は向日葵をゴール前に連れて行き、バスケットを始めたのだった。そして真帆はというと

「あー、はずしちゃった」

真帆が投げたボールは外れてしまい、そのまま後ろへと弾んで落ちて転がりそれを竹中が拾った。

「なんだよ……」

2人の沈黙は続き、それを見ていた櫻子と向日葵も黙って2人を見ていた。すると、竹中が……

「わ、悪かった」

「え？」

「シカトして悪かった。ちょっと勘違いしてた。お前のこと」

「……や、やめろよ！　なんかかゆいだろ、そついうの！」

「ほらよ」

そして竹中は真帆にボールをパスした。すると真帆が照れくさそうに竹中を追いかけまわしはじめた。

「真帆ちゃんもやるなー。よし！　私も混ぜろー！」

「あ、櫻子！　……まったく」

櫻子も加わり、竹中を追いかけはじめてしまった。

数分後、ここで結衣たちが体育館に来ると真帆と竹中と櫻子と一緒にバスケットをしていた。それを隅っこで紗季と向日葵は見ていた。

「真帆と竹中君が……」

「それに櫻子ちゃんまで」

「一緒に練習してる」

「仲直りしたの？」

「さあ、どうなんだろう」

「なんか仲直りしてるっぽい」

「櫻子も真帆さんたちみたいに仲良くなれたら……」

その後、智花たちも加わり、バスケの練習を始めた。そして数時間後、ここで練習が終わった。

「練習はここまで」

「今夜の夕飯の買いだし私とちなつさんと愛莉だよね」

「うん」

「じゃあ、お買い物に行ってきます」

「ああ、実は夕べに材料は買ってあってね」

「材料？」

「結衣がお好み焼きにするんだって」

「……「お、お好み焼き!？」」「……」

紗季以外の女バスと竹中が大声をあげ、結衣たちも驚いてしまった。

「みんなお好み焼き嫌いなの？」

「いえ、そうではなくて……」

なんだかわからないまま、夕飯を作ることに。すると紗季が……

「誰？ この山芋おろしたのは」

「あ、あたしだけど……」

「あんたねえ、こんな目の粗いおろし金使ってどうするのよ！ 山芋はなめらかで入れる意味ないでしょ？ これもう一度すり鉢で……ああやっぱいい！ 自分でやるわ！」

そして今度はキャベツを切っている智花と愛莉の方へ向かった。

「トモ！ キャベツはそんなに長く切っちゃダメ！ 荒くみじん切り！」

「は、はい！」

今度は肉を切っている千歳と結衣の方へ行った。

「結衣さんに千歳さんもそんなにおおざっぱに切ってはいけません！」

「う、ごめん……」

「あはは……」

「ちょっと夏陽！ 何しでかそうとしてるわけ！？」

「こ、粉にだし汁を……」

「余計なことしないでそんなあついままでいれたら熱に入れたら台無しになるでしょ！」

「す、すみません……」

「みんな！ もういいわ！ あとは全部、私がやるから！」

お好み焼きを作るのを紗季一人で指揮をとっていたが、結局一人でやることになってしまった。

それを見ていた京子やあかり、そのほかにも綾乃も櫻子もみんな驚いていた。

「どうしたんだろ、紗季ちゃん……」

「あんなにお好み焼き作るのにこだわるなんて……」

「実は、紗季の家ってお好み焼き屋さんでよく店の手伝いしてるそうなんです」

「へえ」

「それで焼きそばやお好み焼きにはすごいこだわりがあつて」

「あの冷静な紗季ちゃんにも意外なところがあつたんだね」

意外な紗季の一面を見た京子たちはただただ紗季がお好み焼きを作っているところを見ているだけであつた。

和解と鉄板マスター（後書き）

なにか足りないと思ったら、ロリコン呼ばわりがないのが百合の現実……。エロはがちゅりシリーズでも智花たち出そうかな……？

窃盗の罰金バツキンガム（前書き）

この話どうしようかすごく迷った結果やるはめになってしまいました。とはいってもやはり結衣たちは女子中学生だからロリコン呼ばわりされていないのがロウきゅーぶらしくないところ。でも、頑張っていきます！

窃盗の罰金バッキング

「ひなたちゃんと竹中君がいない？」

結衣と京子が買い出しに行っている間、智花たちの話によると夕食の後にひなたと竹中がいなくなったのこと。

あかりや綾乃たちも探したものの、見つからなかった。

「夏陽のやつ、ひなが好きだからってとうとう誘拐を……！」

「それはないよ。まだ探してないところはある？」

「学校でいけるところは……」

「あ！もしかして、裏の神社かも」

「神社？」

「夏陽が作ったバスケのゴールがあるんですよ」

「よし、探してみるか」

「ええ！？あたし……」

「あ、そうか……」

「え？なにが」

昨日のこと、竹中から真帆は暗いところは苦手だということを思

い出した結衣は真帆にこういった。

「部屋にはあかりや綾乃たちもいるし、真帆ちゃんはお留守番した
ら？」

「う、うん……」

涙目になりながらもそうとう暗いところが苦手だったそうだ。結局、真帆はあかりたちと一緒に留守番で結衣と京子、そして智花と紗季と愛莉で裏の神社に行くことにした。

「竹中君はとにかく、ひなたちゃんがこんなところを通ったのかな
？」

「それにしても、真帆が暗いのが苦手なのよくわかりましたね」

「昨日、竹中君がそう言っててね」

「それに対して、ひなはお化けとか全然怖がらないんです」

「へー、ちなつちゃんはすげー怖がりなのに」

「あれ？ なんだろ」

懐中電灯の照らした先には地面になにかが落ちていた。その瞬間、紗季と愛莉は結衣の後ろに隠れて智花は結衣の服の裾をつかんだ。

「よし、私が見てくる」

「大丈夫か？」

「気を付けてくださいね」

強気な態度で京子は地面に落ちているものを拾ってよく見てみるとなにやら布で丸めたものだった。

「ハンカチかな…って！」

すると、広げてみるとそれは５・Ｃ はかまだひなたと書かれていたパンツであった。

「なんでこんな……」

「なんだったんですか？」

「うわああ！」

智花が声をかけてきて、いきなりのことびっくりした京子はそのひなたのパンツをあわててポケットの中にしまつて、誤魔化した。

「いやあ、ただの布きれだったよ……」

「なんでそんなにびっくりするんだ？」

「そ、そりゃあ……いきなり声かけられてきたらびっくりするよ……。暗いんだし。ははは……」

「「？」」

いったいどうしたのか、誰もが心配そうな顔をして京子を見てい

た。なんだかんだでそのまま、神社へと向かっていくと……

『もちろんひざでなげるわけじゃないんだけど……』

そこにはバスケのシュートを教えている竹中とそれを教えてもらっているひなたの姿があった。それを見た結衣は驚いていたのに対して、京子はキラーンとなぜか目を光らせていた。

「へえ、竹中君ってあんなところがあるんだ」

「ふっふっふ、やっぱりひなたちゃんのことが好きなんだな」

「何か言ったか、京子？」

「ううん、なんでも」

しばらく、2人の様子を見てるとひなたがこんなことを言い出して生きた。

『あれね？ 持ってきたハンカチがない』

（あ！ もしかして……）

ひなたのことばにポケットにあったひなたのパンツを見つめる京子。きつとパンツをハンカチだと間違えたんだなと納得していたのだった。

そして、ひなたはあきらめることなくバスケの練習をしていて竹中もまた、ひなたの特訓に付き合っていた。

その後、みんなは体育館へと戻っていき、このことをひなたと竹中に内緒であかりたちにはなした。廊下を歩いていた綾乃と千歳が

話し合っている中、浴場から上がった竹中が急いで部屋に戻っていき姿を見かけた。

「どうしたのかしら、竹中君」

「綾乃ちゃん、なんか落ちてるで」

「何かしら？」

竹中が落としたものを綾乃は拾ってみるとそれは……

「こ、これは……」

急いで、綾乃は竹中の部屋へと向かい扉を勢いよく開けた。それを見た竹中はびっくりしていた。

「な、なんだよ……」

「これはなんなのよ！」

「あー！」

綾乃が見せてきたのはひなたのパンツであった。しかも京子が拾ったやつであった。どうしてそれがあるのか、実は京子はひなたにこっそりと返すため、わざと浴場にパンツを置いてきたのだった。

そのパンツを竹中が拾ったのだった。それを見た竹中は大慌てで答えた。

「いや、それはその……浴場で……」

「着替えを忘れるわけないでしょ！　あなた、小6にもなってこんな変態行為していいと思ってるの？」

「えっと……」

「無断不純行為をするなんてこの杉浦綾乃が許さないわよ！」

「す、すみません……」

「私じゃなくてひなたちゃんに謝るべきでしょ！　不純異性行為は罰金バツキンガムよ！」

その後、綾乃の説教が終わった後、パンツは竹中は綾乃とともに泣く泣くひなたに返したのだった。竹中はとぼとぼ部屋に戻っていく途中、結衣に出合った。

「あ、竹中君……ってどうしたの？」

「いや……その……」

さっきの騒動を言えるはずもなかった。すると、球技大会のことを結衣に話した。

「あのさ、球技大会のことなんだけどさ、選手交代ができないだろう？」

「そうなのか？」

「怪我したとかいがい選手交代ができないんだよ！　知らなかったのかよ？」

「いや、美星先生に押し付けられて合宿させられたから……。でも、スタメン選びが重要になるね。やっぱり智花ちゃんと竹中君は……」

「……約束しろ、ひなたは外すな」

「え？」

「アイツ、頑張ってるから！ まだまだけど、チャンスを与えてほしいんだよ！」

「それは、誰だってそうだよ。女バスのみんなや竹中君だって」

「バスケは5人でやるんだ」

その後、竹中は部屋に戻っていくのをただただ啞然としか見ていなかった結衣。翌日、竹中が……

「どういうことだよ、夏陽！」

「球技大会はお前たちだけでやれ」

「なんで？ 合宿で一緒に頑張ってたのに……」

「そうだよ」

「あんた、やっぱり私たちと一緒にやりたくないの？」

あかりとちなつと紗季が言っても竹中は言い返してきた。

「そういうことじゃない。けど、今回は任せていいかなってお前ら5人に」

「竹中君……」

「俺にとつちや男バスを外で見られるいい機会だからな。女バスだけで頑張れよ」

真帆が竹中を止めるように結衣に頼んでみると結衣は……

「自分がでなくても勝てると思ってるんじゃないかな？ 竹中君は」

「えっと……それって女バスだけで勝てるってこと？」

「そうなの？」

「……勝つ自信がないなら、考え直してもいいけどな」

「なにをー！」

そのやり取りを見た櫻子と向日葵はこんなことを言い出してきた。

「なんだか、青春ですわね」

「私も青春したかったなー」

「櫻子じゃ、無理でしょうけれど」

「なんだよ、それ！」

また櫻子と向日葵の2人が言い合いになっている間、女バスは優勝指し、はりきりだしてきた。その後、球技大会の試合はというと、美星にビデオを撮ってもらい、娯楽部で見ることになった。

「みんな、すごいよー！　優勝しちゃったよー！」

「よかったね、結衣ちゃん」

「女バスの子たちが優勝しましたね！」

「うん。よかったよほんとに」

無事優勝できて、結衣たちはとても喜んだのだった。

窃盗の罰金バッキング（後書き）

昴がいなくてやっぱりロリ度がないなーっと感じてしまう自分。てなわけで次回の番外編は昴を出します！ 昴が出ていても百合のロウきゅーぶに変わりありません。

番外編 フリースロー対決！ 結衣VS昴（前書き）

いよいよロウきゅーぶの主人公長谷川昴の登場です！

ただ、この小説での昴は原作とは全く違います。

まずは智花たちとの面識がないこと。これは結衣たちがコーチしているためです。

そしてロリ度がないこと。これも智花たちに出合っていないためです。

ロリアニメなのにロリ度がないだと……w（ ; ）w

っと思っっている方に言っておきます。

これは百合小説です（ ^ ^ ）

……なんかあほらしくなってきたゞ（ ; ． ． ）ノ

あかり「今回あかりの出番ありますよね？」

（ 。（ ）コクッ

あかり「よ、よかった〜（涙）」

さすがにここまで出番なかったらかわいそうだからね（*´ `*）

番外編 フリースロー対決！ 結衣VS昴

今日も女バスのコーチを終えた結衣たちは美星に車で家まで送ってもらっていたある日、美星がこんなことを言い出してきた。

「そういえば、今度私の甥っ子に会ってみない？」

「美星ちゃんのこと？」

「長谷川昴っていうんだ」

長谷川昴という名を聞いただけで結衣は興味を持ったかのように美星に聞いてみた。

「どんな方なんですか？」

「結衣と同じくバスケットに熱中していたやつだけど……」

「？」

「いいや、今度会ってみた時にわかるよ」

そんなわけで4人は美星に連れてこられ、昴の家に来ていた。

「アポとっているんですか？」

「いいや」

「え……？」

「まあ、入れよ」

「あ、はい」

なんだかんだで不安になりながらも家に入ることになってしまった。美星は勢いよく家の扉を開けて、そのまま台所へと上がって行った

「おい、昂」

（いいのかな……？）

（まあまあ、美星ちゃんが言ってるんだし）

（あ、あかりなんだか不審者になった気分……）

（なんか美星先生、京子先輩みたい……）

「あら、美星ちゃん。昂君は今不在なの」

「ち、逃げられたか」

こつそりとあがった台所には非常に温和でおっとりしてそうな女性がいた。おそらく昂の母親だろうと結衣たちは思っていた。

「あら、その子たちは？」

「ああ、今女バスのコーチをしている子たちだよ」

「船見結衣です」

「歳納京子です」

「赤座あかりです」

「吉川ちなつです」

「まあ、あなたがこの前美星ちゃんがいっていた子たちね。どうぞ、あがって行って」

「お邪魔します」

そんなわけで4人はテーブルの椅子に座り、七夕はお菓子やらお茶をテーブルの上に置いた。

「どうぞ」

「すみません。いきなり家に入ってきて……」

「いいのよ。結衣ちゃんたちのことは美星ちゃんからちゃんと聞いているわ」

「そういえば、昴さんって今部活なんですか？」

「いや、アイツは部活やってないんだよ」

「え!？」

「でも、バスケに熱中してるって言ったよね？」

「実は昴が通っている高校のバスケット部は1年間の活動停止処分になったちまつてさ」

「……ええ!?」「……」

活動停止処分と聞いた結衣たちはさすがに驚いてしまった。どうしてそうなってしまったのか美星に聞いてみることに。
すると、美星は……

「その高校の部長が顧問の先生の娘さんとしかけおちちゃってさ」

「かけおちって……」

「しかも小学生だぜ?」

「ぶはあ!」

さすがの京子も思わず飲んでいたお茶を吹き出してしまい、笑い転んでしまった。

「な、なんだよそれ……。小学生に恋をしたってこと!?!」

「ま、笑ってしまうのも無理はない。それにしてもかわいそうだな。せつかくスポーツ推薦で入学した高校でまさかの休部になってしまうなんてな……」

「……」

その後も七夕は買い物に行くといって出かけていき、結衣たちは

会話しながらも昴を待っていた。

そして、玄関の扉が開く音が鳴り、誰かが帰ってきたみたいだ。それは……

「ただいまあ」

「よっ、ロリコン一味」

帰ってきたのは長谷川昴であった。美星がいるのを見た昴は少し苦い顔をしていた。

「ミホ姉……」

「お姉ちゃんは今お買い物いちゃってるから」

「そ、てかその子たちは？」

「ああ、この前話した例の女バスのコーチたちだよ」

「船見結衣です」

「歳納京子です」

「赤座あかりです。京子ちゃんと結衣ちゃんとは1歳年下の中学1年生です」

「あかりちゃんと同じく中学1年生の吉川ちなつです」

「俺は長谷川昴。君たちのことはミホ姉から聞いている」

「実は昴に合わせるためにこの子たちを連れてきたんだけど」

「それだけか？」

なんの興味をなさそうに昴は冷蔵庫から牛乳を取りだし、コップに入れて飲んでいた。

「せっかく会いに来たんだからさ、なんか話すことないのかい？」

（美星先生に連れてこられたんだけどね）

「もういいだろ……」

「なんだよー、せっかくバスケのことで話し合おうと」

「もうバスケはやめたんだ。なんだか冷めたんだ。休部になってから……」

（この人……私と同じだ）

険悪な雰囲気になり、誰も言葉を出さなかったが、結衣だけは違っていた。昴にこんなことを言い出してきた。

「昴さん」

「ん？」

「私と勝負しませんか？」

「結衣……？」

「勝負つて？」

「私が勝つたらバスケットを続けてください！ 昴さんが勝つたらもう手は出しません」

「なんでまた……」

「おやあ？ 中学生相手に怖いのか？」

「はあ！？ そんなわけないだろ！ わかったよ。やればいいんだろ？」

「ゆ、結衣先輩……」

「大丈夫、勝つてみせるよ」

「結衣ちゃん……」

「大丈夫だ。結衣はそんな簡単に負けたりはしないよ」

そんなわけで家の庭に行き、昴はバスケットのゴールとボールを準備し、結衣がルールを説明した。

「ルールはフリースロー対決。どちらかがフリースローを多く成功したら勝ち。一本一本交代でいいですか？」

「構わない。先攻は君からでいいよ」

昴から先攻をもらい、結衣からやることに。そして結衣はゴール

めがけ、ボールを投げまずは一本成功した。

「まずは一本！」

「結衣先輩、さすがです！」

「結衣ちゃんすごい」

「じゃ、次は俺だな」

結衣からボールをもらい、昴もゴールめがけボールを投げた。そのボールもまた一本成功した。

「うわぁ……」

「あっちもすごい……」

「やっぱり高校生だからかな？」

「次は君だよ」

その後も結衣と昴のゴールを決めていき、勝負はまだつかぬまま続いていた。しかし、結衣の体力も限界に近くなっていた。

「はぁはぁ……」

「少し休んだらどうだ？」

「いえ、まだ……」

その後もボールを投げ、ゴールをまた一本決めていった。

「結衣、大丈夫？」

「うん……」

京子も心配している中、まだまだやれそうであった。しかし、見かねた昴は結衣に聞いてみた。

「どうしてここまでして……」

「あきらめてほしくないから……」

「あきらめてほしくない？」

「私も一度、バスケットをあきらめたんです。でも、女バスのコーチをしていくうちにあの子たちがその情熱を取り戻してくれたんです。だから、昴さんも……！」

「ゆ、結衣……」

「結衣がここまで頑張ってるんだよ。それで昴はここであきらめちゃうの？ あんたにとってバスケットはなんだったの？」

「ミホ姉……」

そして、昴の番になりボールをゴールめがけて投げた。しかし、そのボールはリバウンドし外してしまった。

「あ……」

その一瞬、大歓声が響き渡った。

「やった ！！」

「結衣ちゃん、勝ったんだよー！」

「結衣先輩、高校生相手にすごいです！」

大いに盛り上がっている中、美星は昴の元へと駆けつけこんなことを話しかけた。

「今のボールわざとやったでしょ」

「さあな。でも、教えられたよ」

そして、昴は結衣の元へと行った。

「ありがとう、結衣。君のおかげでバスケットへの情熱を思い出したよ」

「いえ、私も昴さんがまたバスケットをやってくれるだけで」

その後、お互いに握手を交わし、この勝負は終わった。

数日後、今日も女バスのコートに来ている結衣たち。すると結衣は美星に今昴はどうしているか聞いてみることに。

「昴なら友達のすすめでバスケットの同好会に参加してるんだって。そこでバスケットを教えてるんだってさ」

「またバスケをやってくれてよかったです」

「アイツ、来年こそは全国を目指すって言ってたよ」

「夢が大きいですね」

そんなにぎやかな話し合いをしている結衣と美星であった。

番外編 フリースロー対決！ 結衣VS昴（後書き）

昴の出番はこの話だけかもしれません。一応、もう一度言っておきますが百合小説です。ロリではありません（＾　＾；）

またまたデートの巻！？（前書き）

昴×智花が好きですが、完全に裏切っている自分。今回は久しぶりに百合回といきますかー（´、`）

百合が書きたくて仕方ないやつですO（´、`）O

またまたデートの巻！？

休日、結衣は智花と一緒にスポーツショップに来ていた。しかし、智花はスポーツショップに来るのが初めての様子で驚いていた。

2人はバスケットに使うシューズが置いてあるコーナーに来ていた。

「こんなにたくさん……」

「前に使っていたメーカーってこれだっけ？」

「はい、そうです。どうしようかな……？ あ、これもいいかも」

実は今朝、結衣と智花はいつものようにあかりの家の庭を借りて、バスケットの練習をしていた時だった。練習の時に智花のシューズのひもが取れてしまったため、シューズを買いに来ていたのだった。

その日は京子もちなつもあかりもそれぞれ用事があるため、来てはいなかったのだった。

「あれは……」

その後、智花はシューズを買いスポーツショップを後にした。

「今日は本当にありがとうございました」

「気に入ったの見つかってよかったね」

「はい」

「じゃあ、これからどうしようか」

「あ、結衣さん。一緒に映画とか見にいきませんか？」

「いいよ」

2人はそのまま映画館へと向かい、智花が見たい映画は京子が好きなミラクルんの映画であった。

「ミラクルん？」

「真帆にいつもコスプレさせてもらってるので一度どんな話か見てみたくて」

（まだ見ていなかったんだ……）

なんだかんだで2人はミラクルんの映画を見ることに。そして映画が始まり、結衣は前にも京子と一緒に見たことあるので話は知っていたが、智花は真剣そうな顔をして見ていた。

「ら、雷香ちゃん！まさかあなたがライバーなんだったの！？」

「裏切られたような顔しないでよ。お前が勝手に信じこんだだけじゃないか」

「そんな……じゃああの時勉強を覚えてくれたことも給食をわけてくれたことも全てうそだったの！？」

「あっはははは！お前はとってもお人よしだったから近づくのが簡単だったよ」

『そんな……落とした消しゴムを拾ってくれたり、肩についていた芋虫をとってくれたのも全てうそだったの!?!』

『お前はとってもお人よしだったから』

『そんな……じゃあ、私の命令で焼きそばパンを買ってきてくれたりジュースを買ってきてくれたのも全てうそだったの!?!』

『あっはははは……っってお人よしは私かー!』

横を見ると、真剣そうなまなざしをしていた智花の姿があった。これほど真剣に見るのはミラクルンファンしかないと思っていた(京子も含めて)。

でも、智花はこれがまだ初めてミラクルンであつた。そして、話は終盤を迎えていた。

『行こう、雷香ちゃん。2人で力を合わせればあんな敵、簡単にたおせるよ』

『しょうがないわ……私はお人よしだから!』

こうして、ミラクルンの映画は終わって、2人は外に出てほっと一息。結衣は智花に映画の感想を聞いてみた。

「どうだった?」

「なんていうか、ライブるんっていい人だなーって思いました。あとミラクルンもかっこよかったです」

「そっか。じゃあ、喫茶店でもよっていく?」

「はい」

2人は喫茶店へとよっていくことにした。

「そういえば、京子さんってもうミラクルんの映画は……」

「ああ、アイツはもう3回も見てる。それで一回私も付き添いでもう見ててね」

「そ、そうですか……」

3回見ていると聞いた智花はすごいと思った顔をしていた。結衣も見かねて別にすぐくないよと言いつ返す。

すると、結衣はポケットにあったものを智花に渡した。

「智花ちゃん、これ」

渡したものはピンク色のリストバンドであった。

「いつも智花ちゃんとは朝練に付き合ってもらってるしよかったら
っと思つて」

「い、いいんですか……?」

少しぎこちない姿の智花に結衣は頭にはてなを浮かべていたがまあ
あいつかと思ひこつた。

「その、ありがとうございます。大切にします！ 結衣さんの力を
分けてほしいときに使わせていただきます」

「うん」

そんな2人の落ち着いた雰囲気が続いたのだった。

またまたデートの巻！？（後書き）

ゆるゆり7話でミラクルんの映画はやってまして、冬ですがこの小説の時期は原作通りで夏です。細かいことは気にしないでください
（ ^ ^ ; ）

いやー、久しぶりの百合ですかっとしたぜい……

書に恋してる 前編（前書き）

いよいよプールの回です。そして予定通り、アニメ8話の話は省きます。理由は言うまでもなく……ってところでしよう。

誓に恋してる 前編

今日もまた、女バスのコーチをしている結衣たち。練習を見てみると智花をはじめ真帆や紗季、ひなたも少しずつ上達してきたのであった。

しかし、愛莉だけはなんだか調子が出ていない様子であった。表情を見てみるとなんだか元気が出ていなさそうであった。そして練習が終わった。

「……………」ありがとうございます……………」

「いやー、あの子たちバスケットうまくなってきたよねー結衣」

「うん。でも……………」

すると、結衣は愛莉を呼び出した。

「愛莉ちゃん」

「は、はい」

「どこか調子悪いところでもあるの？　もし何かあったらすぐに言っ
つて」

「結衣さん……………」

「どうしたんだろ、愛莉ちゃん」

「なんだか元気がないみたい……………」

「ずっと前まではあんな様子じゃなかったのに」

しかし、何事もなかったかのように答えた。

「心配してくださってありがとうございます。でも、大丈夫ですから」

「あ……」

それでも愛莉を心配する結衣。更衣室へと向かっていく愛莉にこんなことを言い出した。

「愛莉ちゃん！」

「は、はい……！」

「別に無理はしなくてもいいよ。愛莉ちゃんだって私にとって大切な人だから！」

その発言を聞いた愛莉は驚きのあまり大声を出してしまった。すると周りにいた智花たちまでもが興奮してしまうのだった。

「ふええええ！」

「ゆ、結衣さん……！」

「うおおおお！ アイリーン、告られた！」

「ひなは？ ひなのこと大切ー？」

「ここにきて愛莉が追い上げー！」

「ちょ、違うよ……！」

「ゆ、結衣先輩……愛莉ちゃんのこと……」

「隠さなくてもいいんだよ、結衣」

「結衣ちゃんすごいよ」

「だから違うってばー！！」

結衣の説得でなんとか騒ぎはおさまり、どうして愛莉が最近元気がないのか智花たちに聞いてみることにした。

「プールの授業？」

「はい、再来週から」

「アイリーン泳げないもんね」

「それで元気なかったんだね」

「ご、ごめんなさい……こんなことで心配させちゃって……」

「うつん、話してくれただけでもありがたいよ」

「そーだ、水泳もゆいにゃんたちに教えてもらえばいいじゃん」

「おー、お姉ちゃんたちのすいえいー」

「そんな……結衣さんたちに悪いよ」

「大丈夫だよ。ね、ゆいにゃん」

「うん」

「よっしゃー、場所はうちのプールでいいよね」

その発言を聞いた京子は驚いてしまった。

「ええ！？ 真帆ちゃんの家ってプール付き……！？」

「前に真帆ちゃんは大金持ちだって聞いてなかったのか？」

「ごめん……」

話を聞いていなかったため知らなかったようであった。

「ごめんなさい、私なんかのために……」

「ううん、これも愛莉ちゃんのためにやるんだから」

「そういう言い方しているとまたトモの機嫌が悪くなりますよ」

「わ、悪くならないもん！」

（やっぱり智花ちゃんも結衣先輩のこと……）

「ちなつちゃん？」

「うっん、なんでもないよ」

「智花ちゃんのこと大切に思っているよ。これも女バスみんなのために何かしてあげたいんだ。もちろん、紗季ちゃんのことだってね」

「ふえ！？ そんな、私なんか……」

「紗季ちゃんだって大切な子なんだから」

「おー、ひなも？」

「うん」

「練習ですけど、次の日曜日はどうですか？」

「うん、いいよ」

そんなこんなで愛莉のための水泳の練習が始まろうとしていたのだった。

書に恋してる 前編（後書き）

この話、もしかしたら3部作に分かれて続くかもです。

書に恋してる 中編（前書き）

書き始めてから2か月がたちました。

この小説は京綾で行こうと思います。

理由は綾乃のキャラソンを聞いてたらこのカップリングも好きになつてしまいました。

まあ、結衣×智花を書いていますし、このカップリングを書かないわけにはいけないので、（＾　＾）／

誓に恋してる 中編

「今度の日曜日？」

「その日に愛莉ちゃんの水泳の特訓するんだよ」

今度の日曜日の休日に愛莉の水泳の特訓のことを綾乃と千歳に話した。すると、京子が綾乃たちを誘い出してきた。

「よかつたら、綾乃と千歳も来るかー？」

「な、なんで私たちまで!？」

「来てくれたら真帆ちゃんうれいって言ってたからさー」

「まあええんとちゃうの？ そしたら歳納さんに会えることやし」

「う……わ、わかつたわよ！」

綾乃と千歳も来ることになった。そして今日の女バスのコーチに来ていたのだが、なぜか真帆とひなただけいなかった。

「そつえば、真帆ちゃんとひなたちゃんは？」

「ゆいにゃーん、ちょっと来て」

真帆に呼ばれて結衣は体育館の倉庫の中へと向かった。しかし、暗くて何も見えなかったのだった。すると、突然扉が閉まり、ライトがついたのだった。

「え？」

この瞬間、結衣はびっくりした。すると、跳び箱の上に誰かが飛び出てきた。それは、水着姿の真帆であった。

「じゃじゃーん！ どうどう？ ゆいにゃん、似合う似合う？」

「え、あ……うん。とっても」

「だよねー！ じゃあじゃあ、こっちの水色とならどっちが好き？
って着てみないとだめか」

真帆は水着を脱ぎだし、水色の水着に着替えようとしていた。すると結衣はひなたのことを真帆に聞いてみた。

「真帆ちゃん、ひなたちゃんどこにいるか……」

「おー、ひなならここにいるよー」

後ろからひなたもやってきてひなたもまた水着に着替えていて結衣に披露していた。結衣も似合うと言い練習に戻ろうとするが……

「ごめん、みんなのところに戻らないといけないから……」

「あ！ まだいっちゃだめだよ！ ひな！」

「おー！」

真帆の命令でひなたは結衣に抱き着き、止めに入った。その隙に

真帆は別の水着へと着替えようとするも、ここで扉が開き紗季がやってきた。

「真帆、あんたね……って何してるのよ!」

ここで紗季が来たことによって真帆とひなたは紗季に叱られ、紗季は結衣に謝ったのだった。

「本当にすみません」

「いいよ、気にしてないから」

「ちょっと水着選んでただけじゃん」

「その方法が間違ってるの!」

「まあまあ、それより紗季ちゃんたちも練習しなくていいのかい?」

「いけね、練習しなきゃ」

「おー」

京子の台詞にコロツと切り替わったかのように真帆とひなたは更衣室へと向かい、着替えに行ったのであった。

「くら! 結衣さんにちゃんとお詫びしなさい!」

「すみません。真帆、結衣さんたちが家に来てくれるのが楽しみです

張り切っていました」

「そっか」

「じゃあ、あかりたちも頑張らなきゃね！」

「これも愛莉ちゃんのためにやるんだからね！」

「あ、はい！ 私頑張ります！」

「よし、私におまかせだよ！」

「だから、京子先輩が全部教えるわけでもないし」

そして、日曜日。真帆の家に智花と一緒に来ている結衣と京子と綾乃と千歳。あかりとちなつはその日はまた急用で来れなかったという。

でも、次の週は来れるのこと。とはいっても真帆の家はとても大きくて庭もまたとても広かった。

「うわあ……」

「すげえ……」

「こ、こ、ここってほんとに真帆ちゃんの家……なのかしら!？」

「綾乃ちゃん落ち着いて」

「はい、まるごと三沢家の敷地だそうです」

結衣と京子は驚いていて綾乃はとても興奮をしていたのであった。すると、門が開き、そこには本物のメイドがお辞儀していた。

「お待ちせしました。わたくし、三沢家にお使いしております久井奈聖といいます。どうぞ、こちらへ」

メイドの聖に案内されてさっそく、結衣たちは水着に着替えて5人が来るのをプールで待っていた。

とはいってもこれだけ広いとさすがの綾乃も興奮状態がまだおさまってもいなかった。

「べ、べ、別にすごいとかって……お、お、思ってもいないんだから！」

「綾乃ちゃん落ち着いて」

周りを見てみるとバスケのコートまであった。京子もまたあたりを見回してテンションも最大限に上がっていた。

「ほんとにすげー！」

「落ち着けて」

「ゆいにゃーん！」

5人が水着に着替えて結衣たちのところに来たのであった。

「すみません、遅くなって」

「ゆいにゃん、さっそくはじめようぜ」

「じゃあ、まずは準備運動を……」

「いらなーい。アイリーン捕まえるのにいっぱい走ったから」

見てみると少し恥ずかしそうにしている愛莉の姿があった。自分の水着が見られたくないからか顔も赤く染まっていた。

「なんか、ほんとに小学生なのかな。愛莉ちゃんって……」

ペシッ

「京子、それ言ったらダメだろ」

「わりいわりい」

そんなこんなで、さっそく結衣は水泳のコーチをすることになった。

「まずはプールで思いっきり遊んで、それから慣れていこうと思う」

「よっしゃー！ 思いっきり遊べるぞー！」

「と、歳納京子！ これは愛莉ちゃんのためにやってるんだから！」

ここで眼鏡をはずした千歳が京子と綾乃の百合を妄想し始め、鼻血が出てしまいプールにかかりそうであったが、聖が急いでティッシュを持ってきてくれて千歳の鼻血を止めた。

「世話掛けてごめんな」

「いえ、これも務めですから」

「じゃあ、愛莉ちゃんは私と手をつないでるから一緒に」

「は、はい！」

こうして、全員はプールで思いっきり遊んで行った。これも愛莉のためにと結衣は頑張っているが、京子は真帆とともににはしゃいでしまつてそれを綾乃と紗季が注意をして、それを見ている千歳はまた妄想をし始め、鼻血は聖に止めてもらっていた。

愛莉は少しずつプールに慣れ始めていたころであらう。そして、ここからが本番であつた。

誓に恋してる 中編（後書き）

まーた、あかりとちなつが省かれてしまったような気が……

書に恋してる 後編（前書き）

いやー、ちなつ×あかりはいい！ 今日買った同人誌にて。

それはさておき、この小説では百合とは関係ありませんが、昴×葵
つてのも書いてみようかなーっと思います（ほんの少しですが……）
。ちなみに番外編です（＾　＾）

＼アツカリンノにされた昴をほっておけない自分です（ー　ー）

そして、今回は京綾の回です！！

誓に恋してる 後編

遊び終えた後はいよいよ泳ぎの練習に入った。結衣と愛莉、京子と智花、綾乃と紗季、真帆とひなたのペアでまずはプールに潜る練習をしていた。

ちなみに千歳はプールの外で見ること。理由は言うまでもなく妄想で鼻血を出されては困るためである。さっそく結衣の指導の下でやっていた。

「まずは少しずつ、水に……」

少しずつ水に潜っていくのだが、顔が入る寸前に愛莉は飛び出してしまうた。

「う、ごめんなさい……」

「大丈夫だよ。もう一度」

しかし、何度やっても愛莉は飛び出してしまう。

「ごめんなさい……」

「うっん、もう午前の練習はここまでにしよっか」

「腹減った!」

「意地汚いわよ、歳納京子!」

そんなこんなで午前中の練習を終え、昼食をとった。

「「「「「「「「「馳走様でした」「」「」「」「」

「お茶とデザートをご用意させていただきます。しばしお待ちを」

「「「「はい」「」

「ほ、本当に真帆ちゃんの家ってすごいわね……」

「綾乃ちゃん、興奮しすぎやで」

「真帆ちゃん、ラムレーズンあるの？」

「あるよー」

そんな話をしている間、愛莉は一人でどこかへ行ってしまう。
それを見ていた結衣は愛莉を追いかけていった。

そして愛莉の元へと向かった。

「愛莉ちゃん」

「結衣さん……」

その後もどうして愛莉は泳げないのか聞いてみると、過去に池に落ちてしまい、それ以来水が怖くなったと結衣に話した。

「池にか……」

「昔ボートから落ちて、それから足を出して顔を出していれば何とか平気なんですけど私、本当に情けなくてせつかく結衣さんたちに

来てくれたのにみんなにも迷惑ばかり……」

その泣いている愛莉の姿を見ている結衣。そして、愛莉にこういつたのである。

「大丈夫だよ。私たちは愛莉ちゃんのそばにいるから。まだ時間はあるんだから」

「でも私、どんくさくてちつとも前に進めないから水泳でもバスケットでも、迷惑を……」

「誰も愛莉ちゃんを迷惑だとは思ってはいないよ。京子がいつも言ってたよ、誰だって最初からうまくいわけじゃないって。それに愛莉ちゃんがそんなこと思っていたらみんなが心配しちゃうよ」

「！」

「愛莉ちゃんは一步一步うまくなってるよ。コーチである私が言ってるから。だから愛莉ちゃんのできる範囲でいいよ。みんなと一緒に歩いて行こうよ」

「結衣……さん……」

「じゃあ、みんなのところへ行こうか」

「はい。それと私、これからはがんばります！ これからもよろしくお願いします」

「うん」

一方、結衣と愛莉がいない頃のプールでは綾乃が京子に言いたいことがあると言って京子と綾乃はただ2人立っていた。それを陰で愛莉のぞいて女バスの4人と千歳が温かく見守っていた。

「いよいよ告白やな……」

「はい……」

実は、数分前のこと。結衣が愛莉を追いかけていった時であった。紗季がこっそりと綾乃にこんなことを言ってきた。

「綾乃さん」

「何、紗季ちゃん？」

「今がチャンスじゃないでしょうか？」

「え！？ な、何の……？」

「京子さんに告白ですよ」

「ふええええ！？」

なぜ紗季が綾乃が京子のことを好きだっということを知っているのかというと前の合宿で千歳が全部教えていたからである。

もちろん、女バスの子たちは全員知っている。するとそこに千歳が割り込んできた。

「そや！ ここで歳納さんに告白しないともうチャンスはないで！」

「ち、千歳……」

「頑張ってください！ 綾乃さん！」

「あややん！ ファイト！」

「おー、綾乃お姉ちゃんがんばー！」

「……わ、わかったわ！」

てなわけで、みんなにエールを送られた今、京子に告白するときであった。

「話ってなに、綾乃？」

「と、歳納京子……その……あつた時から、……だったの……」

「え？」

「あつた時から歳納京子のことが好きだったの……！」

「……え？」

大声を上げて告白する綾乃にいきなりの告白に思考停止まで追い込まれ、体が固まった。その後も京子は戸惑いながらも言い返す。

「え……えつと……」

「好きだったのよ……あつた時からずっと……」

京子もまた、綾乃と同じくらいに顔を真っ赤にした。

「その……付き合ってください！」

またもや声を上げて京子に告白する綾乃。まだ少し戸惑いながらも京子は気を取り直し、改めて綾乃に言い返した。

「う、うん。いいよ」

「本当に！？ 遊び半分じゃなくて！？」

「あ、遊び半分だなんて……。綾乃がここまで真剣だなんて思ってもいないし、だから付き合ってもいいよ……」

「あ……」

その言葉から綾乃は嬉しさのあまり歓喜を上げていった。

「私……やっと素直に伝えることができたよ……」

ここで京子がこんなことを言ってきた。

「せっかく付き合っただから、これからは歳納京子じゃなくて京子って呼んでよ」

京子に言われたまま、綾乃は京子の名前を言う。

「え……えっと……京、子……」

「うん」

陰から見ていた5人は嬉しそうな表情を浮かべていた。

「綾乃さん、よかったですね」

「あややんがきょーたんに告白したぜー！」

「これからが本番ね！」

「おー、京子お姉ちゃんと綾乃お姉ちゃんはもう恋人同士ー」

「綾乃ちゃん、よかった……」

千歳もうれしさのあまりか、いつもよりも多く鼻血が出ていた。急いで聖がティッシュで止めていった。

そして結衣と愛莉が戻ってきた。でも、京子と綾乃のことは秘密にしてさっそく泳ぎの練習に入った。

「じゃあ、みんなで両隣の子と手をつないで」

結衣の指示通りに結衣、愛莉、智花、真帆、紗季、千歳、ひなた、京子、綾乃の順番で手をつないだ。

しかし、綾乃は少し恥ずかしそうな顔をしていたが、そこは気にせずに結衣は愛莉に言った。

「今はみんなで手をつなげばそばにいてくれる。だから1人なんかじゃない。10秒でいいから、顔に水をつけてみて」

「はい、やってみます」

愛莉はさつきとは別人のように少し前向きになっていた。深呼吸をしてから、一気にみんなで水に潜った。

みんなは10秒数えていく。1、2、3、4、5、6、7、8、9と数えていき、そして……

「ぷはぁ」

10秒間潜り切ったのであった。

「やったね、愛莉ちゃん！」

「頑張ったね！ 愛莉ちゃん！」

「愛莉、えらいえらい」

「アイリーンならできるとわかってたぞ」

「泳げるようになるのも、時間の問題よ」

女バスの4人が愛莉に一齐に集まり、励ましの言葉でいっぱいであった。

「ここまで成長するとはね」

「それを言っんなら、綾乃ちゃんも頑張ったで」

「綾乃も？」

「実は……」

「わー！ 千歳ー！」

綾乃があわてて千歳の口をふさぐ。その後も何でもないわよと結衣に言い返した。綾乃が告白したことは女バスの子と千歳以外にはいうのが恥ずかしいようだった。

番外編 櫻子と向日葵のはじめてのコーチ（前書き）

今回は櫻子と向日葵がコーチに来る回です。

今、昴×葵も製作中です。これも番外編でやります。

それと今回の話は微エロが入っています（笑）

番外編 櫻子と向日葵のはじめてのコーチ

SMSでの会話で智花と真帆とひなたと京子が話し合っていた。ちなみにこのSMSでの会話は京子も以前から女バスの子たちと話し合っていたのであった。

『明日きょーたんたち来れないの?』真帆

『ごめんね。私と結衣、あかりとちなつちゃんも用事があった』京子

『じゃあ、あしたはおやすみ?』ひなた

『うっん。明日はあかりが代わりの人が来てくれるって言ってたから』

『誰ですか?』智花

『それはね……』京子

そして翌日。今日の慧心学園の女バスのコーチに来たのは……

「いやー、久しぶりに来たよー」

「早くいきますわよ、櫻子」

「わかってるよ」

櫻子と向日葵が来ていたのであった。実は昨日のことであった。

「ちなつちゃん、明日コーチに来れるかな？」

「ごめん、私も無理なの……」

「どうしよう……。京子ちゃんと結衣ちゃんも来れないって言うてたし……」

そんなあかりもちなつも困っている中、櫻子が割り込んできた。

「なら、私が行ってあげるよ」

「櫻子ちゃん？」

「私もあの子たちに会いたいし、コーチもちろんしてあげるよ」

すると、向日葵も割り込んできた。

「ちょっと、あなた一人でできるんですの？」

「できるよ！ 私一人でも！」

「だいたいコーチがどんなものか知ってるんですの？」

「だからできるってー！」

こうして口げんかをしてしまった結果、櫻子と向日葵の2人で行くことになった。2人は体育館へ行き、そこには女バスの5人が体操服を着て待っていたのであった。

「あ、来た」

「さくつちにひまりん待ってたよー」

「やつほー、みんなー」

「お久しぶりです。櫻子さん、向日葵さん」

「智花さんたちもお元気で何よりですわ」

「だからー、さん付けは禁止だよー」

「えっと……」

「ごめんねー。こいつの癖でさー」

「でも、櫻子さんだけは呼び捨てですよね？」

それを聞いた途端黙り込んでしまふ向日葵。この沈黙を断ち切るかのように真帆が言ってきた。

「次からさん付け禁止でいいよね」

「わ、わかりましたわ。えっと……真帆……ちゃん？」

「うん、ひまりん」

「じゃあ、着替えよっか」

櫻子と向日葵は体操服に着替えてさっそくコーチをしていくのだが……

「えっと……何からやればいいんだろ……」

「そういえば、練習メニューを赤座さんたちからもらってませんわ」

「大丈夫です。私たちが持っています」

智花は向日葵に練習メニューを渡した。それを向日葵は見て、さっそく練習に入ろうとした。

「まずは……シュート練習からですよ？」

「よし、私が教えていくよ！」

「だからわたくしもいますわよ」

5人はシュート練習に入った。それを櫻子と向日葵が見る。その後2人で話し合う。

「うーん、どうかな……」

「なんていうか、みなさんうまいですね」

前にも練習するところは見たのだが、以前よりもうまくなっていた。それを見て物足りなくなったのか、櫻子がこんなことを。

「よし、私もやってみるか！」

「ちょ、櫻子！」

「まあまあ、やるだけだから」

ボールを持ち、女バスたちがやっているゴールとは反対のゴールの前に立ち、シュートしたのだが、外れてしまう。

「あーはずしちゃった」

「まったく……」

「ねえ、今度はひまりんもやってみたら？」

「いいんですか？」

真帆のお言葉に甘えて向日葵もシュートしてみることに。さっそくボールを手に持ち、ゴール前に立った。ボールを構え、シュートした瞬間であった。その大きな胸が大きく揺れていきその時、櫻子の機嫌が悪くなってしまった。

「ぐぬぬ……」

向日葵のそのシュートはゴールに入った。

「おー、ひまわりお姉ちゃんすごい」

「うおおおおー！」

もにゅ

「きゃああー！」

櫻子が勢いよく向日葵に近づき、向日葵の胸を掴み取ったのであった。

「ちょ、小学生たちの前で何をしているのですの!?!」

「おっぱい禁止!?!」

「だからなんですの、それ!?!」

その後も2人は言い争うになってしまった。すると、真帆とひなたと愛莉がこんな会話をしていた。

「そういえば、ひまりんもおっぱいでかいな」

「おー、あいりぐらいはあるー」

「ふえええ!?!」

「確かにあいりんといい勝負だ」

「真帆ちゃんまで……」

「ねえ、そろそろ止めない?」

このままだと、練習が進まないと思った紗季は真帆に言うと、そこで真帆がひなたにこんなことを言ってきた。

「よし、ヒナ! いけ!」

「おー!」

真帆の命令でひなたは向日葵の後ろに回り、向日葵の胸をつかみ揉んできたのであった。

「ひゃああ！　ちょ、ひなたちゃん……！？　何を……！」

「おー、ひまわりお姉ちゃんもすごい」

「あー、もう！　向日葵のおっぱいは私のだよー！」

その後も、櫻子も加わり、2人で向日葵の胸をもむ羽目に。

「ちょっと！　2人ともやめて！」

その後、2人の暴動はおさまった。かなり時間もロスしてしまった。櫻子と向日葵はみんなに謝っていた。

「すみません……。ほら櫻子も！」

「うう……ごめんね」

「いいですよ」

「真帆もいつもこんな感じでやっていますから」

「どういう意味だよそれ」

「では、練習の続きやりましょうー！」

「そうですわね」

その後も練習は続行し、今度は実践練習に入ることになった。見てもわかるとおり、智花が一番うまく、それに次いで真帆と紗季もよかった。

「智花ちゃんすごい……」

「真帆ちゃんと紗季ちゃんもですわ」

しかし、ひなたと愛莉が少し不安な動きであった。

「うーん……」

「櫻子？」

「愛莉ちゃんとひなたちゃんは前に比べてうまくはなっているけど……。なにか悩みでもあるのかな？」

「そうですね。癖のある動きではありますが、まだ動きに慣れていないようですわね」

「なんだか、私たちコーチっぽくない？」

「そんなことより、あの子たちをどのような練習でいけばいいか考えてますの？」

「うーん……」

さすがにコーチをやるのは初めてなため、2人はどのように指導をすればいいかわからなかった。

いつもコーチをしている結衣、京子、あかり、ちなつはどのような練習でやっていたのか考え込んでしまった。

「どうすればいいんだろ……」

「あの……」

「なにかな？」

「もう練習が終わりましたので」

練習が終わって、櫻子と向日葵のところへとやってきた5人。すると、櫻子が智花にどのような練習をしているのか聞いてみることにした。

「ねえ、智花ちゃん」

「はい」

「いつもどのような練習でやっているのかな？」

「えっと……」

少し考え込む智花。でも、数秒後に答えた。

「基本から充実に練習しているだけですよ」

「基本から？」

「トモ以外の私たちはみんな初心者で、結衣さんたちからはいつも

基礎から教えてもらってるんですよ」

「そうなんだ……」

智花以外は初心者だと初めて聞いた櫻子と向日葵。2人とも経験者だと思い込んでいたため少し驚いてしまった。

「だから、そこまで大まかに気にしなくてもいいですよ」

「そうだよ」

その後も練習メニュー通りに進めていき、コーチが終わった。

「……」
「……」
「……」
「……」

「みんなよく頑張ったよ」

「途中大騒ぎになりましたけれど」

櫻子と向日葵は体操服から制服に着替え終え、体育館から出るとそこにはある人物が待っていた。

「にゃふふ、コーチご苦労さん」

「えっと……」

「私は篁美星。女バスの顧問だよ」

「あ、初めまして。わたくしは……」

「あー、あかりちゃんが前言っていた」

「ちょっと、先生に失礼ですわよ」

「あんたたちのことはあかりから聞いてるよ。家まで送ってあげるよ」

「いいんですか？」

美星は車で櫻子と向日葵を家まで送って行った。

「すみません、わざわざ送ってくださいって」

「いいってことよ。それよりあの子たちのコーチをやってどうだった？」

「うーん、正直何をすればいいか……」

「わかりませんでした……」

「ま、そうなるか。どう？　せっかくだからこのままコーチをしてみても」

「それは……わたくしたち生徒会の仕事もありますし……」

「そっかー。もし、暇な時だけにコーチに来たら？　あの子たちも喜ぶからさ」

「喜ぶって……」

「あの子たちも2人のことが大好きだからね。だから会ってくれるだけでもうれしいよ」

「えっと……」

なんて答えればいいかわからな向日葵であつたが、櫻子は喜びのあまり、こう告げた。

「はい、また機会あれば」

「さ、櫻子！」

「いいじゃん。あの子たちに会えるだけでも私は嬉しいよ。向日葵もそうでしょ？」

「それは……そうですね」

「にやふふ。櫻子と向日葵、いいコンビだね」

2人のことを美星は口説いた。そんな櫻子と向日葵の初めてのコ―チは終わったのであった。

番外編 櫻子と向日葵のはじめてのコーチ（後書き）

櫻子と向日葵だけの話でした。

それと、この小説でさくひまをやるのかな……

海の誘い（前書き）

やっとアニメ9話。原作では10話から12話あたりの後に海の話になっていました。

てか、ロウきゅーぶのOVAとかでないかな……？

海の誘い

夏休み、結衣たちは真帆の別荘に遊びに行くことになった。

「いらっしやいまほー」

別荘の扉から真帆が出てきた。

「にゃふふ、来たぞ来たぞ」

「相変わらず真帆ちゃんすごいなー」

「でも、私たちまで来ちゃっていいのかな……？」

「なにいつてるんの。ゆいにゃんたちが来なきゃ始まらないよ」

「そうですよ。普段からお世話になってるんだし」

「遊びにつき合わせてくれてありがとうございます」

「おー、お姉ちゃんたち楽しくあそぼー」

「なんか照れるな……」

「うふふ。あかりも招待してくれてうれしいよ」

「じゃ、さっそく着替えて海でおよーぜ」

さっそく結衣たちは水着に着替えることに。早く着替え終えた結

衣と京子とあかりとちなつと美星は先にプライベートビーチで遊んでいた。

あかりとちなつは砂浜でトンネルを作ったり、結衣と京子と美星はというとビーチベッドでくつろいでいた。

「やつぱ海は最高だぜー」

「連れてきたことを感謝しろよ」

「そりゃあ、真帆ちゃんやみんなには感謝の気持ちでいっぱいだよー」

「夏休みはしっかりとコーチしてもらっからな」

「わかってますって。でも……これからどうしようかと、男バスや球技大会など目標はありましたけど」

「目標あつたら上達するもんね」

「じゃあ、プロを目指すとか」

「無理だ」

「ゆいにゃーん、きょーたーん、ちなたーん、あかりーん、お待たせー」

真帆の声がして振り向くと水着姿の真帆とひなたと紗季と愛莉の姿があつたが、智花だけは恥ずかしがっているのか後ろに隠れていた。

「どう？」

「かわいいじゃん」

「とっても似合うよ真帆ちゃん」

その後も紗季、ひなた、愛莉が1人1人と水着を披露した後は今度は智花の番であった。智花は頬を赤く染めていてまたなんていうか少し戸惑っていた。

「えっと……あの……」

「うん。智花ちゃんも似合ってるよ」

「ふえええ！ ええと……ありがとうございます……」

「よかったね、智花ちゃん」

「似合ってるぞ、もっかん」

「おー、みんなで選んだー」

「でも、大丈夫？」

紗季の一言で4人は智花の胸のどこを見た。

「え！？ 平気だよ！」

5人で盛り上がっている中、ひなたが結衣にこんなことを……

「あのね、お姉ちゃん。実は智花が少し御胸が……」

パツ

「なんでもありません」

「よし、じゃあお योगーぜー」

みんなに口止めされ、海の方へといった。その後もみんなで海で遊んでいた。愛莉は泳ぎを結衣に見せていた。

「どうですか、結衣さん？」

「前よりすごく上達してるよ」

「えへへ。結衣さんや綾乃さんたちのおかげです。綾乃さんと千歳さんたちにも会いたかったです」

「綾乃は急用で千歳は千鶴と一緒に出掛けてしまったからね」

「私は今、空を飛んでいるんだぞ！」

「きょーたんすげー！」

「おー、きょうこお姉ちゃんすごーい」

砂場では京子が真帆たちになにやら芸を見せていた。それを見ていた結衣はさすがに呆れていた。

「何やってんだか、アイツは……」

「ねえ、鬼ごっこしよー」

真帆の提案で鬼ごっこをすることに。じゃんけんの結果、鬼はひなた。ひなたが十秒数えている間みんなは一斉に逃げていった。

（手加減してあげるか……）

そして数え終わるとひなたは結衣の方へと追いかけていった。

「待てー」

「捕まえられるかなー」

結衣は手加減をしてひなたに合わせて少し遅く走って結局ひなたにタッチされた。

「あーあ、捕まっ たな」

「ぶー、お姉ちゃん本気で逃げて」

「こら、ゆいにゃん！ やる気あるのか？」

「ごめんごめん」

「まったく結衣はー」

すると、紗季がこんな提案をしてきた。

「なら、結衣さんと京子さんとあかりさんとちなつさんが捕まっ た

らなんでも好きなことができるのか……」

「「「なんでも!?」「」「」」

「ええ……!? あかりも?」

「なんで私まで!?」

「おっしやー! 負けないぞー!」

こうして女バスの5人は鬼になり、結衣と京子とあかりとちなつが逃げることになってしまった。

真っ先に女バスの5人は分かれて1人1人を追いかけていった。

「あかりさん、タッチ!」

「ひゃあ!」

「ちなたん、覚悟ー!」

「きゃあ!」

あかりは智花に捕まり、ちなつは真帆に捕まってしまった。そして京子という紗季とひなたに追い詰められていた。

「くそー、なかなかやるなー!」

「京子さんでも手加減はしませんよ」

「おー、きょうこお姉ちゃん覚悟ー」

「おっと」

京子はなんとかまたいで逃げ切った。

「はっはっは！ 私を捕まえるなんて10年早いぜー！」

「えーい！」

「うわ！」

しかし、その先には愛莉がいてすぐさま京子に突撃していった。
2人はそのまま同時に倒れてしまった。

「あ、大丈夫ですか？」

「う……うん……」

顔に愛莉の胸が当たっていたのか、京子は撃沈していた。残るは
結衣だけであった。しかし、結衣も簡単には捕まらなかった。

「さすが、クラスで一番早いだけある……」

「てか、私たちずっとここで待機なんですか！？」

京子たちは円が書かれている砂場に待機していた。そこに美星が
見張っていた。

「美星ちゃんも参加してんの？」

「いや、あの子たちに頼まれて見張りやっているだけだからさ」

そして智花たちはなかなか結衣を捕まえることができずに考え込んでしまった。

「ゆいにゃん早いな……」

「どうする？」

「にゃふふ、少女たち私がヒントを教えてあげるよ」

その頃、結衣は海でぶかぶかと泳いでいた。

「少し本気出しすぎたか……。あかりや京子も捕まっちゃったしな……」

すると、なにやら黒い物体が結衣に近づいてきた。

「な……まさか……！」

それに気づき、逃げようとするが目の前には紗季がさらに横にはひなた、愛莉が。すると、もう一つ黒い物体が結衣に近づいてきた。そして飛び出して出てきたのは智花だった。

「結衣さん覚悟ー！！」

智花は結衣に飛びつき、捕まえたのだった。だが、智花は何かにあたったのか少し結衣の元から離れてこんなことを言い出した。

「結衣さんも少し……」

「え？」

結局、みんな捕まったため約束通り好きなことをやらされることに。あかりとちなつには砂の城で埋められ、京子と結衣にはビーチベッドで寝ている智花と真帆に大きい葉っぱで仰いでいた。南の島でよくある光景であった。

「なんで私とあかりちゃんはこんなことに……」

「なんだか少し熱いよ……」

「こしょぐり〜」

「ちょ、やめ……」

ひなたと紗季はこしょぐりはじめ、あかりとちなつは笑い出してしまった。

「あつちも楽しそうー」

「私たちはこれでいいのか……？」

「みなさーん、そろそろお昼にしましょうかー」

ここで聖がバーベキューの用意を持ってきてくれていた。みんなはさっそく準備をし、その後お昼を食べてることに。

「おいしー」

「おいしいね、アイリーン」

「真帆ちゃん、ラムレーズンある？」

「ここまできいてお前は どうしてラムレーズンばっかなんだ……」

「姉さま！」

振り向いた先にはショートヘアの中性的な印象な女子と容姿はレイヤードのショートヘアと縁無し眼鏡をかけた物腰の柔らかい理知的な大人の女性が立っていた。

「かげ？」

特別編 『ハロウィンスペシャル みんなで仮装パーティー』（前書き）

今回はハロウィンということでハロウィンの話です！

久々に竹中君も登場です（ほんのちょびつとですが……）

昴「俺は！？」

＼アツカリンノ

昴「な、なんで透明になるんだ！？」

警察に通報されたやつ言うセリフか？

昴「あれはゲームの話で……」

（・・）

昴「そんな顔をするなー！」

昴はまたの機会の登場ということでハロウィンパーティーをどうぞ。

特別編 『ハロウィンスペシャル みんなで仮装パーティー』

今日も七森中の娯楽部は慧心学園の女バス部のコーチに来ていたのだが、京子だけがいなかった。

「ゆいにゃん、きょーたんはどうしたの？」

「それが後でくるって言ってたんだけど……」

その瞬間、体育館の扉が開きそこには魔女の衣装を着た京子の姿があった。

「トリックオアトリート」

「……」

その姿に結衣とあかりとちなつは思わず目に入ってしまう。以前にもサンタ姿で来た時と同じであった。

女バスの5人もまた、京子の魔女のコスプレに注目をしていた。

「ほら、お菓子あげないといたずらしちゃうよ？」

そういうと、京子はくれくれと言わんばかりにお菓子を要求してきた。今日は何をかくそう、ハロウィンである。

そのため、京子は魔女のコスプレをして結衣たちにお菓子を求めていた。

「もー、今日はハロウィンだからさー」

「いや、そんなこと言われてもおかし今はないし……」

「ぶうー」

お菓子がいないことにふくれっ面になる京子。せっかく魔女のコスプレで来たのにがっかりな気分になってしまい、不機嫌になっていた。

見かねた結衣は京子に……

「後でお菓子あげるからさ」

「きょーたん、似合うね」

「おー。きょうこお姉ちゃんかわいいー」

「そう?」

真帆たちの褒め言葉で機嫌を取り戻す京子。すると、真帆が……

「実はあたしらも衣装の用意してるんだー」

「ほんと!?」

「今日はハロウィンだからねー。みんな、集まって」

真帆が智花たちを連れて更衣室に行ってしまった。結衣たちは待つことになってしまった。

しばらくすると、更衣室から智花たちがやってきた。

「お待たせー」

振り返ってみるとみんなハロウインの衣装を着ていた。まずは智花は天使の衣装で真帆と紗季は海賊の衣装でひなたは不思議の国のアリスに出てくるアリスの衣装で愛莉はお姫様の衣装を着ていて結衣たちに披露していた。

「どうどう？」

「みんなすっごく似合ってるよー」

「よかったー」

「わー。ひなたちゃん可愛いよー」

「おー。あかりお姉ちゃんにほめてもらってひなづれしい」

「智花ちゃんのも似合ってるよ」

「あ、ありがとうございます」

「真帆ちゃんと紗季ちゃんのは海賊かー」

「真帆が選んだもので」

「ちなたんにはこれ」

「それは……」

真帆がちなつに渡したのはミラクるんのコスプレセットであった。

「あ、ありがとう真帆ちゃん」

前に京子にもらっているためあるんだが、せっかくもらったので断るわけにもいかなかったのでさっそく着てみた。

「なんでまた私が……」

「ちなつちゃん。可愛いよ」

「ちょ、京子先輩！」

ミラクるんのコスプレ姿を見た京子はちなつに抱き着いてきた。

「京子先輩！ 杉浦先輩がいるのにこんなことしていいんですか！？」

「ちなつちゃんはちなつちゃんで大切だと思ってるよ」

「せっかく衣装も着たことだし、仮装パーティーしようよ」

「でも、練習は……」

「今日だけはお休みでいいよ。ゆいにちゃんとあかりんの分も用意してるから」

「……まいつか」

真帆の提案で勝手に体育館で仮装パーティーをすることになってしまった。真帆から渡された衣装で結衣とあかりも衣装を着ることになった。

結衣はドラキュラの衣装であかりはかぼちゃの衣装を着ていた。

「よし、みなでおどろーぜー」

さっそくみんなは踊りを始めた。

その頃、体育館の外では竹中が来ていた。

「なんだか、騒がしいけど何やってんだ？」

体育館が騒がしいことに竹中は気になって体育館の中をのぞくとそこには衣装を着ていたみんなの姿があった。それを見た竹中は驚いてしまう。

「な、何やってんだよ!？」

「あ、夏陽」

「今日はハロウィンだから仮装パーティーしてるんだー。竹中君も入る？」

「なんで俺まで……」

「いいからいいから」

「ちょ……!」

真帆につられて竹中も衣装を着ることになってしまう。竹中の衣装はミイラであった。

「なんで俺はミイラなんだよ!!」

「衣装それしかなかったから。じゃあ夏陽も仮装パーティーに参加ね」

「まったく……」

こうしてみんなは体育館で仮装パーティーをすることに。踊ったりゲームをしたりと大いに盛り上がった。そしてパーティーは練習時間の終わり時刻で終わった。

「あー、楽しかったー」

「結局練習さぼっちゃったな」

「また明日からやればいいよ、ゆいにゃん」

「俺までやらされたけどな」

「おー、たけなかは楽しくなかった?」

「い、いや。楽し……かった」

「当たり前だろー」

「今日だけだからな!」

「楽しかったね、智花ちゃん」

「うん」

「トモも盛り上がったよね」

「てか、京子の魔女の衣装はどこから持ってきたんだ？ 前のサンの時も」

「それは秘密だよ」

「言うと思った」

これにてハロウィンの一日は終わった。

特別編 『ハロウィンスペシャル みんなで仮装パーティー』（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回からは本編に戻ります。

次の番外編は京子×綾乃のお話にしようか、昴×葵のお話にしようかどっちかにしようかと迷っています。

まだ京子と綾乃のいちゃいちゃっぷりを書いていませんので書きたいと思っています。

特別編 もしも慧心学園女バスケットとコーチの七森中倶楽部の4人が文月学園の

今回は特別編です。

六甲水さんの『バカとバスケットと召喚獣』とのコラボです。

この企画に協力してくださいました六甲水さんありがとうございました
すゝ（*^ ^*）ノ

内容は女バスケットとコーチである七森中の倶楽部が文月学園の見学会
に来たらというEFストーリーです。

ただ、本編とはほぼ同じ展開でそこに七森中の倶楽部がいたらとい
う話です。

特別編 もしも慧心学園女バスケット部とコーチの七森中娯楽部の4人が文月学園の

ある日、今日も慧心学園の女バス部のコーチに来ていた結衣たち。
すると、美星が結衣たちにあることを話してきた。

「文月学園の見学会？」

「そ、今度の土曜日から2週間、この子たちを連れて見学会に行く
んだけど、結衣たちも来る？」

「なぜまたそんな……」

「いいよー！ 美星ちゃん」

京子が割り込み、OKの言葉が出てきた。

「おい、京子……」

「いいじゃん。高校がどんなところか見てみたいんだもん」

「あかりも行きたいなー」

「私もです」

京子だけでなく、あかりやちなつも賛成の声が上がった。

「じゃ、決まりだな。今度の土曜日で文月学園で」

「まったく、しょうがないな」

結局、結衣たちも見学会に行くことになってしまった。

そして、土曜日。文月学園の見学会にみんなは来ていた。さつそく2年Fクラスのいかにもばっかっぽそうな顔をした吉井明久とじじくさい喋り方をする女の子にしか見えない男の子木下秀吉に案内され、Fクラスの教室に向かっていた。

ちょうど授業も終わり放課後だったため、6人の自己紹介を教室でしようと話になった。

「ついた。ここが教室だよ」

明久の指差した方を見ると教室の看板らしきものがあつたがともボロボロだった。しかも教室に入ってみると、そこは机替わりなのか、ちゃぶ台で椅子もなく座布団が置いてあつた。

それを見た京子の最初の反応がこうだった。

「うわ……きたな……。しかも教卓もボロボロだし、ここって教室なの？」

「京子、失礼だぞ」

「そうですよ。いくら汚くて臭くていかにゴキブリやクモ出てきそうで、ボロボロのちゃぶ台や座布団にいつかはつぶれてしまっうんじやないかって感じの教室でも失礼ですよ！」

（君が一番失礼なことを言っているような気がするけど……）

このことを思ったのは明久だけでなく他の5人誰もが思っていただろうみんなちなつのことをじいつと見ていた。

それはともかくとして、さっそく明久たちは結衣たちに自分たちの自己紹介をした。

「とりあえず、僕から、僕は吉井明久。よろしくね」

明るめに紹介するも、真帆が小声で紗季に……

「ね、あの人バカっぽくない？」

「ダメよ、真帆。あんまりそんな事言っちゃ」

「おー、バカっぽいお兄ちゃん」

「確かに、あのバカっぽい人のせいでこの教室がこんなことになってしまったとか……」

「だから失礼だろ」

真帆や京子の一言でかなりへこんだ様子で明久は教室の隅っこで体育座りをし泣き出してしまった。

「あ……泣いちゃったよ……」

「京子先輩！ あの人が世界、いや宇宙一バカな人でもそんなことを言っちゃ失礼ですよ！」

「いや、ちなつちゃんもそれは……」

「どうせ僕はバカなんだ！！　うわあああん！！！」

ちなつの一言で明久は泣き出して教室から飛び出してどこかへと行ってしまった。

「行っちゃった……」

「追いかけますか？」

「いや、ほっておけば帰ってくるさ。次は俺だな。坂本雄二だ。とりあえずこのFクラスの代表をやっている」

雄二が自己紹介をすると、またもや真帆が……

「あれ？　あの人前見たことあるよ」

「そうなの？」

すると、京子がこんなことを

「あー、前に黒いきれいな髪の人と一緒にデートしていた人かー。前に見たけれどその黒い髪の人、スタンガンであの人を襲っていたよ」

「それほんとなのか？」

「うん。この目でちゃんと見たよ」

「なんか、怖いよそれ……」

そんなこんなで5人で話が盛り上がっている中、雄二はため息をついてつぶやいていた。

「まさか小学生と中学生に見られていたとは……」

雄二の自己紹介が負えると今度はポニーテールをしていた女の子の番になった。

「島田美波です。みんなよろし……」

「あのお姉ちゃん小さいね。」

また真帆が一言。しかし、その言葉を聞いて美波の機嫌が一気に悪くなってしまう。それを見た結衣はこれ以上言っのをやめるように真帆に言った。

「真帆ちゃん、それ言ったらあの人が怒りそうだから……」

「そうだよ。真帆ちゃん。大きくなりたくたって大きくなれない人だっているんだよ」

またちなつの爆弾発言によって美波の機嫌が悪くなってしまった。すると、美波は教室から出ようとして、瑞希が止めに入った。

「あ、どこに行くんですか？」

「ちょっと、アキを捜してくる……」

アキとは明久のことである。美波は明久を捜しに教室から出ていった。

「きっと明久さんのことが心配でいったんですね」

「いや、それは違う」

「？」

「いいか小学生たちと中学生たち、さっきのお姉さんには胸の話はしないほうがいい」

「機嫌が悪くなるからですか？」

「そういうことだ。明久が死ぬことになってしまつから気をつけるんだ」

（死ぬ……？）

雄二の意味深な言葉に考え込む結衣。そして次はムツツリー二と土屋康太の番であった。

「……土屋康太」

すると、ポロつと写真が一枚京子の方へと落ちてきてそれを拾う。

「何か落ち……」

写真を見てみると、女装をしている明久の姿が映し出されていた。

「え？ これ……」

「……見てないな？」

「えー？ あ……はい」

京子はムツツリー二に写真を返すことにした。そして次は秀吉の番であった。

「木下秀吉じゃ。よろしくなのじゃ」

「ねえ何である人、女性なのに男物の制服来てるの？」

「きつと男に生まれたくて男の制服を着ているんだよ」

「いや、ワシは……」

「ほら、自分のことをワシと言ってるしね」

「そこは関係ないと思うのじゃが……」

このままじゃらちがあかないので話はここで区切ることにした。最後は姫路瑞希の番となった。

「姫路瑞希です。よろしくお願いします」

「優しそうな人ですね」

「あの人、ライバルんのコスプレ似合いそう……」

「そこかよ」

結衣のツツコミの中、瑞希は結衣たちの中では高評価であった。すると、ここで美波が帰ってきたが、明久の姿はなかった。

「あれ？ 明久はどうした？」

「探したけど、全然見つからなくて……。まったく、アキはどこに行っただのやら」

「そのうち帰ってくるからほっておくか。じゃ、次は小学生たちと中学生たちの番だな」

そんなわけで次は結衣たちの自己紹介となった。まずは智花たちから

「け、慧心学園初等部、湊智花です」

「同じく、三沢真帆です」

「永塚紗季です」

「か、香椎愛莉……です」

「ひなた、袴田ひなた」

「私は船見結衣です。この子たちのコーチを務めています」

「歳納京子です」

「赤座あかりです。京子ちゃんと結衣ちゃんとは1歳年下の中学1年生です」

「あかりちゃんと同じく吉川ちなつです」

結衣たちの自己紹介が済んだら美波が結衣に質問をしてきた。

「コーチって……」

「バスケットです」

「へえーバスケットか。それにしても船見たちは大変そうだな。まだ中学生で」

「いえ、私たちも頑張って智花ちゃんたちのコーチを務めているもので」

「いつつもゆいちゃんの指導のもと頑張っているんだよ」

「はは、そうか……って翔子!？」

翔子という言葉で結衣たちは後ろを振り返るとそこにはAクラス代表の霧島翔子の姿があった。

翔子は雄二に近づいてきた。それを見た京子は……

「あ、この人だよ。雄二さんとデートしてたのって」

「……………雄二、楽しそうね」

「お、お、お前……………なんでここに……………」

「……………さっき、泣いていた吉井から年下の女の子たちと欲情し

てると聞いて」

「あんにやる……よりによって翔子に……！」

「……………お仕置が必要ね」

「ちょ、翔子！ 離せ ！！」

雄二を連れだし、翔子は教室を出ていった。その後、雄二がどうなったのか誰も知らない。

「愛し合ってるんだね。あの2人」

「にしても、度が過ぎているようなんだが……」

結局、いなくなったのは明久と雄二だけである。雄二はともかくとして明久はすぐに戻ってくるだろうと思い、教室の中にいるものだけで会話をするようになった。

そしてなぜかあかりは瑞希に勉強の方を教えてもらっていた。

「わー、瑞希さんって頭いいんですね」

「そんなことないですよ」

「えへへ。あかりはとっても嬉しいです」

「あ……」

その満面なあかりの笑顔を見た瞬間、瑞希はついドキっとなった。その後も頬を赤らめあかりに少しずつ近づいていく。

「な、なんですか……?」

「あ、あかりちゃん……可愛いです〜!」

「ひゃあ!」

すかさずあかりに抱き着く瑞希。その後もすりすりとおかりに抱き着いたままであった。

「み、瑞希さん……!」

「あーもう、明久君と同じくらい可愛いです!」

「なんで明久さん!?!」

結衣のツッコミも入れる中、瑞希はまだあかりに抱き着くのをやめることがなかった。次第に瑞希の胸があかりの顔にあたっていた。それをみたムツリーニは興奮しだしついには鼻血をびしゃあと吹き出してしまった。

ガクッ

「つ、土屋さんが倒れましたよ!?!」

「あれはいつものことだから気にしないでいいですよ」

「そういえば、千歳もいつもあんなだったな……」

ムツリーニも倒れ、残ったのは女子だけとなった。

「ワシは男じゃぞ！」

おっと、女子＋秀吉だった。それはともかくとして、瑞希はこんなことを言い出してきた。

「その……あかりちゃんをお持ち帰りしてよろしいでしょうか？」

「えええ！？」

この一言はさすがに驚いてしまうあかり。しかし、京子とちなつの反応はというと……

「うーん、どうしようか……」

「このままあかりちゃんは瑞希さんの元で……」

「ちょっと！ 否定はしないの！？」

「いくらなんでもそれは……」

「そうですよ。おうちの方が心配しますし」

「むう」

結衣と智花の説得でなんとかあかりのお持ち帰りは阻止された。しかし、まだあきらめない瑞希はこんなことを……

「なら、あかりちゃん。今度おうちに遊びに来てください。いつでも歓迎しますよ」

「あ……はい」

「瑞希の趣味ってわからないわ……」

「まったくじゃ」

さすがの美波と秀吉も瑞希の行動を見て呆れかえってしまつ。その後もみんなでいろいろと会話した結果、もう帰ることにした。

その頃、みんなから忘れていた明久は……

「もう……死にたいよ……。あんなかわいい子までバカにされて……」

誰も目をむかない場所でひっそりと隠れてただ泣いていた。かわいい子とはちなつのことだろう。

そして雄二は……

「しょ、翔子！ それはまずいだろー!!」

「……………年下に手を出したお仕置き」

「ぎゃああああー!!」

何かしら、翔子からの制裁を受けていた。

ムツリーニは……

「……………」

教室でただ倒れていた。

えーコラボした結果、明久と雄二とムッツリーニの扱いが大変ひどいことになってしまいました。

正直、自分でも扱いがひどいなーっと思いました。

いつの間にか百合に発展しちゃっていました……

どうしてこうなってしまったのか（自分でいうな！）

感想としては、明久と雄二とムッツリーニが、アツカリーン／になっってしまったことに後悔……

別に明久たちが嫌いなわけではありません。

ただ面白くしようと思った結果、こうなってしまっただけです。

以上ですm (_) m

臨時部活（前書き）

今度こそ、本編です。

最近特別編ばかり書いていたもので……

臨時部活

「おー、げったんじゃん」

「げったん？」

「知ってるの？」

「ひなたの妹のかげつちゃんです」

「それに冬子ちゃんまでいるじゃん」

「この前、京子が言ってたのってあの人か」

「帰りましょう、姉さま」

「いや」

「どうして私の言うことが聞けないんですか？」

ひなたと一緒に帰宅させようとするかげつにひなたは拒否していた。すると、結衣がかげつに声をかけてきた。

「まあまあ、せっかく来たんだから帰ろうなんていわずに……」

「あなたが船見コーチですね」

「あ、はい」

いきなり声を掛けられてた結衣は思わず答えてしまう。すると、
かげつが……

「いつも姉さまに無茶とかさせていませんか？」

「え！？」

「ちょっと！ 結衣先輩がそんないじわるするわけないじゃない！」

かげつの発言でちなつが割り込んできた。その後も2人は口げんかになってしまう。

「でも、姉さまが無理をしているかもしれません」

「そんなことないわよ！ ひなたちゃんは一生涯懸命頑張っているんだもの！ あなたに何がわかるっていうの？」

「ぶー、おねーちゃんたちをいじめちゃだめ」

「え？」

「おねーちゃんたちはとっても優しくてひなの大切な人達です。おねーちゃんをいじめるとかげだつて許しません」

「う……」

ひなたの一言に黙り込んでしまっかげつ。すると、ひなたは結衣の方を向き謝ったのだった。

「おねーちゃん、ごめんなさい」

「ね、姉さま……」

「ジロツ」

「う……すみません」

ひなたに睨みつけられ、かげつも結衣に謝った。気を取り直して結衣は……

「うっん。よかったらかげつちゃんもご飯食べる？」

「そうだよ、げったん。話はそれから」

「……はい」

そしてかげつと冬子も加わり、どうしてここに来たのかを結衣と美星は聞いてみた。

「かげつが冬子に？」

「突然保健室に来て、海に連れて行ってほしいって」

「でも、どうしてここがわかったんですか？」

「私の線路離岸を甘く見ないで」

（なんちゅう先生だ……）

さすがの結衣と美星も呆れてしまう。

「かげつちゃん、ひなたちゃんの旅行が心配で仕方なかったみたい」

「そうだろうな」

「どうしてですか？」

「三年前くらいになるかしら」

冬子からひなたとかげつの過去のことについて話してくれた。ひなたが成長しないのはかげつ自身のせいだと思い込んでいるらしい。それを聞いた結衣はみんなに……

「みんな、これから臨時の部活をしようと思うんだけど」

「……………え？」

「かげつちゃんに部活のことを教えようと思ってね」

「こんなところで部活なんて！」

「もし、体調が悪くなったときには中断する。それでいいかな、ひなたちゃん？」

「おー。かげ、ひなは強いよ」

「姉さま……わかりました」

「がんばろ、かげつちゃん」

「うちの特訓は厳しいぞー」

「大丈夫です。体力には自信がありますから」

「かげつちゃん、すごい自信だなー。私に勝てるかな？」

「別に京子先輩がやるわけじゃないのに」

そんなわけで結衣の指導の下でひなたとかげつで体力勝負をすることになった。しかし、勝負は全部かげつが勝っていた。

「なんか、かげつちゃんすごいよ……」

「ま、私ほどってわけでもなけどね」

「偉そうに……」

京子の一言にツツコミを入れるちなつ。

「おー。走った」

「どうかな、かげつちゃん」

「この程度のメニュー。全然たいしたことありません」

「あっちもあっちで偉そう……」

またツツコミを入れるちなつ。結衣はかげつをほめた。

「すごいね」

「それより、そろそろ姉さまを休ませてください」

「ひなたちゃん本人が言ってるの？」

「え？」

「ひなたちゃん、まだやれそう？」

「おー。全然平気。まだまだ」

「ミニバスの試合は24分ある。この程度ならみんな大丈夫だよ」

「でも、姉さまは……」

「かげ、マラソンしよ。ひな、かげと一緒に走りたいな」

「でも……」

「走りたいな」

ひなたの無垢なる魔性の前にさすがのかげつも逆らえず答えてしまふ。
イノセント・チャーム

「は、はい……」

そんなこんなでひなたとかげつは体操服に着替えて真帆の別荘から海の砂場までひなたとかげつはマラソンをすることになった。

「大丈夫、ひなたちゃん？」

「おー。だいじょーぶ」

「私も並走するから」

「結衣さんが一緒なら安心ですね」

「ただなー、げったんに勝てるかな？」

「どうして？」

「かげつちゃん、去年のマラソン大会学年一位なんです」

「へえ、すごいね」

「それを言うなら結衣だってクラスで一番早いんだよ」

「いばるところじゃないですよ、京子先輩」

そして、準備が整いひなたとかげつはスタート位置についた。

「それじゃ、位置について」

「かげ、ひなが勝つたらもう口出ししない」

「わかりました。じゃあ、私が勝つたら無理はやめてくださいね」

「よいい、スタート！」

真帆の合図で2人は走り出した。その2人の後を結衣が追いか

る。先にリードしているのはかげつの方だった。

そして別荘のベランダから美星と冬子とあかりが見ていた。

「結衣ちゃんたち頑張ってる」

「ふふ、走ってる走ってる。一生懸命走っている子供の姿って素敵」

「あんたも走ってくれば？」

「あらー、いじわるねえ。私は子供たちも好きだけど美星ちゃんのこと……」

「よるな、変態」

「もつと言つて」

「なんかあかり……聞いちゃいけないこと聞いちゃったかも……」

「うふふ、もちろんあかりちゃんのこと好きよ」

「ふええ!？」

そんな3人のやりとりをしている間、ひなたとかげつはもう中間あたりにいた。しかし、それでもかげつの方がリードしていた。

（姉さま、あんなに息が上がって……）

「本気出して」

「え？」

「ひな、かげの全力見たいな。だいじょーぶだよ。負けないから」

「でも……！」

「真剣勝負なんだし、本気だしやつても全然かまわないよ」

「……わかりました。本気でいきます」

ひなたのお願いに応えてかげつは本気で走り出した。そのまま差をどんどん広げていった。

「すごいな、かげつちゃん」

結衣もかげつの走りを見て関心していた。

その頃、智花たちはゴールの海の砂場においてゴールの線を書いていた。

「やっぱり私たちも走ればよかったかしら」

「ひなちゃんなら大丈夫だよ」

「はは、紗季。げったんの心配症が移ったのか？」

「私だって信じてるわよ」

「結衣がいるんだし、大丈夫だよきっと」

「そうですね。結衣先輩があんな生意気な子供に負けるはずないですもん」

「ちなつちゃん……これはひなたちゃんとかげつちゃんの勝負だから……」

「うん、絶対大丈夫」

その頃、ひなたとかげつと結衣はというとかげつがどんどん差を広げていた。気が付けばもう10メートルくらいの差になっていた。そしてかげつは走りながら昔のことを思い出す。小さいころのひなたと自分のことを。すると、もうゴール手前までのところで後ろを振り返るとそこにはひなたの姿があった。

しかも差がすっかり縮まっていた。かげつも驚き、そのまま走っていく。

その頃、ゴールで待つ智花たちは……

「あ、来た」

「お、結衣たちだ」

ひなたとかげつと結衣がゴールの方に来ていた。そして、みんなはひなたとかげつを応援する。

結衣も見守る中、2人は最後の全力を振り絞った。そして、2人とも同じタイミングでゴールした。

その瞬間、みんな一斉にゴールと叫んだのであった。2人は力を出し切ったため地面に膝が付いてしまう。

「姉さま……」

「ひな……楽しかった。やっと……かげと走れた」

「はい……姉さまのラストスパートすごかったです」

「おー。かげに褒められた」

「もう、私がいなくても姉さまは大丈夫なんですね」

「どうしてひとり？」

「え？」

「1人はだめだよ。みんな一緒にいい。まほもともかもさきもあいりもかげと一緒にじゃなきゃ。ひなうれしい。走るの苦手だったからひなと遊んでもかげは楽しくないと思ってた。心配かけてごめんと思ってた」

「そんなこと……」

「ひな、いっぱい走れるようになった。だから、これから一緒に遊ぼう」

「……はい」

「おーし、みんな戻ったらお風呂だぞー」

真帆の別荘に戻ろうとした瞬間、かげつは結衣に声をかけてきた。

「あの、いろいろすみませんでした」

「ううん、大丈夫だよ」

「姉さまのことよろしく願います」

「わかってる。それとあまり自分を責めちゃだめだよ」

「え？」

「かげつちゃんがつらいとひなたちゃんも辛くなると思っから」

「ありがとうございます。これからは姉さまをいっぱい応援できると思います」

「そっか」

「ま、ひなたちゃんのこと私も私におまかせだよ」

「だから、京子先輩が全部教えるわけじゃないのに」

その頃、あかりはというと……

「うふふ、あかりちゃんも可愛い」

「ちょ、美星先生助けてー！」

「すまん、あかり……」

「そんなあー！」

あかりは冬子に抱きしめられたまま襲われていたのであった。

臨時部活（後書き）

結構長くなってしまいました。

お風呂のシーンはラッキースケベをかけるところがないため省き、代わりにあかりと冬子のラブラブ（？）シーンで終わらせました。次の本編は活動記録で教えたとおり、アニメ10話から12話の話を飛ばして原作6巻の話になります。

夏のサンデー（前書き）

ここからアニメの話ではなく原作6巻からのお話です。

今僕は原作7巻を読んでいます。

原作9巻は修学旅行の話だそうなのでそこにゆるゆりの修学旅行の話を入れてみようと思います。

夏のサンデー

朝、あかりの家にて、結衣と智花は今日もあかりの庭を借りてバスケの練習をしていた。いつもあかりの家の庭を借りてバスケの練習をしているのだった。

結衣の家はマンションなため練習できる場所がなく、京子の家もちなつの家もバスケの用具がないため唯一あかりの家だけが練習場所となっている。

練習が終わり、玄関にてあかりが出迎えてくれていた。

「練習お疲れ様」

「ごめんね、あかり。いつも庭を使わせてもらっちゃって」

「ううん。あかりは結衣ちゃんと智花ちゃんが毎日来てくれるだけでうれしいよ。智花ちゃん、シャワー浴びてきたら？」

優しくそうにあかりは智花に気配りをした。しかし、智花は外履きの靴ひもから手を放すと

「……いえ。結衣さんが先に」

中腰のまま優しく微笑んだ。でも、結衣は申し訳なさそうに智花に言った。

「いや、智花ちゃんが先にシャワー浴びてきなよ。汗もかいたことだし。風邪ひかせちゃいけないから」

「……ずるいです。そんな言い方」

結衣の言葉に拗ねたような声で小さく抗議した。

「わかりました。厚かましくて申し訳ないですけど……。その代わり」

すぐさま眉尻を下げた笑みを覚えてくれたのち、不意に何かを言うてきた。

「その代わり？」

「実は先週の日曜日に算数の宿題が出たんですけど、どうしてもわからない問題があってその……」

「教えてほしいってことかな？ わかった。あとでやってあげるよ」

「　　っ！　ありがとうございます！」

「そんな大げさな……」

「じゃあ、シャワーの後でご飯食べてから勉強しよ」

「はいっ！」

返事をした後、バスケットシューズを丁寧にそろえてから小走りで浴室の方へと向かった。

そして結衣とあかりはあかりの部屋に行き、智花を待つことにした。

「もう数か月になるか……バスケのコーチをしてから」

「そうだね」

「最初は美星先生のお願いを京子が強引に引き受けてそれから私たちは毎日智花ちゃんたちのコーチをしてきた。そして私はあの子たちから私のバスケットへの想いを思い出させてくれたんだ」

「そういえば、結衣ちゃん一度やめちゃったもんね」

「来年になったらさ、また本格的にバスケットをしようと思ってるんだ。あの子たちのコーチを終えてから」

「その時はあかりたちもバスケットしていいかな？」

「それはもちろんオッケーだよ」

「ありがとう」

うれしそうにあかりは言う。すると、あかりは智花の親御さんのことを結衣に聞いてみた。

「そういえば、智花ちゃんの親御さんってどう思ってるのかな？」

「私も一度もあっていないから何とも言えないな。確か智花ちゃんの親御さんって日本舞踊や茶道の稽古を習わせてるんだよね」

最初、智花が家に来た時に聞いたので結衣とあかりは知っていた。親御さんのことを話していると、ドアからこんこんと控えめなノックの音がした。

「智花ちゃん、上がったの？」

結衣が呼びかける。

「はいっ。すつきりしました」

すぐさまあかりはドアノブを回し、扉を開ける。

「別にノックしなくてもそのまま入ってきていいんだよ。今家は私たち以外誰もいないことなんだから」

「ご、ごめんなさい……」

別に謝らなくても　とあかりは言いそうになったのだが、結衣がまた智花が謝ってくるんじゃないかと思い、言いかけた。

「次は私がシャワーを浴びてくるね」

「うん。智花ちゃん、何か見たいテレビないかな？　ちょうどリビングにテレビがあるから」

「え！？　い、いえっ！　べ、別にみたいテレビはありませんし……！　今観なくても……ろ、ろく……！　6 - Cのみんながあらすじを教えてください！」

アニメを観ることを恥ずかしいと思っているのかと結衣は思った。別にアニメを観ることなんて恥ずかしいわけでもないと思って結衣は智花に……

「別に京子だってミラクルン観ているんだし。アニメを観ること隠

さなくてもいいんだよ。私だって面白いと思ってるんだから」

「……え！？ 結衣さんも観ているんですか？」

微笑みながら言った結衣の台詞に智花は驚いてしまう。しかし、結衣はそのアニメをちょこっとしか観ていなくまったく覚えていない。

なんとか誤魔化そうと記憶の部分のシーンだけを浮かべながら智花に言う。

「うーん……、最初は敵だったやつが最後の方で味方になってそれから……」

「三番目のシリーズですね！ 私、その時はまだ観ていなくて、真帆からDVDを借りて本当に感動しました！ やっぱ仲間ってほんとにすごく…… あああああっ！？ なんでもありません！」

「ふふ、じゃ私はシャワー浴びてるからあかりと一緒に観ていて」

「はわっ！ えっと……ありがとうございます……」

「じゃあ、行こっか智花ちゃん」

「はい」

まごつきながらも結衣とあかりにお辞儀をし、智花はあかりと一緒にリビングの方へと行き、テレビを観ることに。

そして結衣はシャワーを浴びることになった。

その後、朝食を済ませ、あかりの部屋にて智花の宿題のお手伝いをすることにした。

「みんなほとんどやっているみたいだね」

「は、はいっ！ 本当は昨日で全部終わらせる予定でしたが最後の問題がどうしてもできなくて……」

「智花ちゃんえらい」

あかりは智花をほめると照れながらもお辞儀する智花。結衣はあかりと智花を見てみると京子のだらしなさを思い浮かべてしまう。

（この2人はきちんと宿題をやっているのに京子は……）

それはともかく、さっそく智花の宿題を見てあげることにした。算数の宿題を見て教えていこうとした瞬間

「え……えっと……」

「どうしたの？ 結衣ちゃ……」

「……結衣さんもあかりさんもどうしたんですか？」

「……………」

ここで2人の脳が止まってしまった。プリントの最下部のチャレンジという問題を見てみるとそれはとても小学生レベルとは思えな

い……むしろ、中学生レベルそのものだった。

これは解けないわけだと結衣とあかりは思ってしまう。2人は慧心学園のレベルを思い知ることになってしまった。

しかし、このままではわからないまままで終わってしまうのも申し訳ないので結衣はあかりから数学の教科書を貸してもらい、問題を調べようやく解いたのであった。

思ってたよりも解くのに時間をかけてしまった。ほっと一安心し、あかりが下から飲み物を持ってくると言って部屋を出ていった。

（まさか……ここまで難しいとは思わなかったな……）

そのまま、宿題を教えていくが気が付けばもうお昼の時間となっていた。結衣と智花は立ち上がり、リビングの方へと向かおうとした。

「ご、ごめんなさい。長居してしまって……」

「ううん、大丈夫だよ。もうお昼だし食べていく？ 午後から予定とかって……」

「いえ、何もありませんけど、でも」

「じゃあ、あかりに頼んでくるよ。そういえば、飲み物持ってくるって言ってたのにあかり戻ってきていないな……」

「あ、あの」

結衣はそのまま階段から降り、台所の方へと向かおうとリビングの方へと行った。

「あかり、お昼ご飯なんだけど……」

その時、いつもとは違う光景に結衣は止まってしまった。そこには見知らぬ女性がリビングの方に座っていたのだった。

いつの間にか来客があったらしい。智花との宿題で全然気づかなかったのだった。

「えっと……すみません、取り乱しちゃいまして……」

その後もなんていえば分らない結衣。静かにほほ笑む女性はとも若々しく、20代に見えて、肩の上で柔らかく一房に束ねられた長い髪と、小柄なまっすぐしゃんと伸びた背筋がたまに流れるお茶のCMを連想させた。

まるで女優のような姿であった。

「あなたが結衣さんね、初めまして」

「は、初めまして……」

どうやら結衣のことを知っているらしい。思わず結衣は挨拶をしてしまった。きっとあかりが教えたみたいだが、本当にこの人は誰なのか気になって仕方がなかった。

「あ、結衣ちゃん」

ここであかりが台所からやってきた。

「あかり、この人は？」

「あのね、この人は」

「あのう、……やっぱりご迷惑なのは」

あかりが話そうとした瞬間、智花がやってきた。

「え……？」

智花の来客を見て結衣と同じようにはっと口を止めた。しかし、結衣とは少し違った反応だった。

その後、みるみる驚愕の色へと染め上げていった。

「お、お母さんッ!？」

普段とはまったく裏腹のうわずった声を響かせたのだった。しかし、結衣も智花の言葉に驚いてしまった。

「えええええ!？」

「うふふ、自己紹介が遅くなってごめんなさいね」

驚きのあまり固まってしまう結衣。その後も智花の母親は深々と頭を下げる。

「智花の母、湊花織です。結衣さん、娘がお世話になっています」

夏のサンデー（後書き）

ここで智花の母親の登場です。

原作にそったのですがやはりNBAスーパープレイが書けません…。
…。

智花の母親と買物（前書き）

正直、この小説を書いたときはまさか他の方もロウきゅーぶを読んでもしも昂×智花が多かったため書きづらくなった時もありましたが、それをはねのけ、今もこうして執筆を頑張っています！

最初、昂とゆるりメンバーを同時にだし、一緒にコーチをさせようと思いましたが、昂にはゆるりメンバーたちに手を出させてほしくないという理由で昂を省き、百合小説となっただけです。

智花の母親と買い物

まさか、智花の母親があかりの家に来ているとは思わなかったため、結衣も智花も驚きでいっぱいだった。

その後、4人でお話することになった。

「でも本当にごめんなさいね。智花ったら毎日お邪魔しちゃって。うちの庭、可愛そうだけどどうしてもゴールを置いてあげられないものだから……。結衣さん、あかりさん、まだ子供で練習相手にならないご迷惑でなければ、娘のことをどうぞよろしくお願いします」

「いえ、結衣ちゃんも智花ちゃんといっぱい練習したいって言ってますから。結衣ちゃんもあかりも大歓迎です」

先ほどから智花の母親・花織とあかりしかしゃべっておらず、結衣と智花は共に能面のような笑みを貼り付かせてお茶をすするばかり。

どうしてあかりはここまでしゃべれるのか不思議でいっぱいだった。普段はあまり目立っていないあかりだが、こういう時だけ目立っていた。

「結衣ちゃん、花織さんから美味しそうなお豆腐をもらったんだよ。しかも花織さんの手作りなんだって」

「そんなお構いなく！ 私が下手の横好きでこしらえたもので、不恰好で逆に申し訳ないくらいですから……」

結衣は豆腐のお礼をしようとしたものの口をはさむ間を見いだせなかった。それにしてもよく話をするものだと思ってしまう。

すると、あかりが結衣に声をかけてきた。

「そうだ、結衣ちゃん下りてきてなにか言いかけてこなかった？」

あかりの一言で会話は中断し、結衣ははっと気が付きあかりに言った。

「あかり、お昼ご飯なんだけど智花ちゃんの分を作ってほしいって言いに来たんだ」

すぐさま、自分の目的を果たす結衣だが、それを聞いた智花は辞退を表明した。

「いえっ、やっぱりもう家に帰ります！　ね、お母さん」

「そうねえ、あまり長居してもご迷惑でしょうし、そろそろお暇しましょうか」

花織も智花と同じ意見であつた。しかし、今この家には結衣とあかりだけである。あかりは2人の説得に打って出る。

「大丈夫ですよ。今は結衣ちゃんとあかりだけですし、にぎやかになった方がもつと楽しいですよ！　せつかくお豆腐もいただきまし
たし」

「いえいえ、お豆腐は結衣さんと2人で食べてください。大してそんなに量ありませんし……」

「お昼ご飯はお鍋にしようと思ってますのでちょうどお魚もたくさんありますから。あまり減多にお鍋はしませんので、2人もぜひ」

（お昼に鍋か……。でも、4人だしちょうどいいかな）

普段はあまりお昼に鍋なんてしないのだが、今回は智花と花織もいるんだからまあいいかと思う結衣。

拝み倒すかのようなあかりの視線に花織は悩ませていたがふつと表情を和らげ娘の智花に尋ねる。

「……………お言葉に甘えちゃおうかしら」

花織の言葉に智花は申し訳なさそうにコクリとうなずいた。

「よかったー。じゃあ、買い物は……………」

「私が行ってくるよ。あかりは花織さんと智花ちゃんと一緒に留守番してくれるかな？」

「はい」

すぐさま準備をしようとする結衣。すると、花織が結衣に……

「あ、それなら智花を連れて行ってください！ この子すごく力持ちだから、荷物持たせても平気ですし」

「お母さん！ 変なこと言わないでー！」

こうして、結衣と智花と一緒にスーパーまで買い物に行くことになった。

「あつ……」

「どうしたの？」

スーパーマーケットにたどり着く少し手前で智花がいきなり驚いたような声をだし、結衣は顔を覗く。

「携帯電話、おいてきちゃいました……。でも、大丈夫です。お母さんには行き先をちゃんと教えてありますので」

「そっか。でも、私携帯持っているからいつでも連絡できるから心配しないで」

そうですね、と智花は頷き、踏切を渡り、大通りを目指す。

「それにしても暑いね。智花ちゃんは平気？ 日傘くらいは用意してあげたかったんだけど」

もう梅雨も明けて、この日の太陽はぎらぎらと輝き、熱光線がじりじりと注ぎ続けていた。

「はい、大丈夫です。……それに私に日傘なんて似合いませんよ」
くすつと笑いながら結衣に言い返した。そして結衣も言い返してきた。

「そうかな？ 日傘も似合っていると思ってるけどね」

「ふえ」

智花を見つめ続けた結果、そういう描写が思い浮かんだことを言った。やはり今日の服装と日傘の親和性が抜群だと思っていた。その後も結衣はこんなことを……

「それと帽子もいいかもしれないな。どっちも紫外線対策に十分なものだし って智花ちゃん？」

「……い、いえ」

見てみると智花は深くうつむいていて頬を真っ赤に染めあがっていたのだった。それを見て心配した結衣は智花に言いかけた。

「智花ちゃん？」

「あ！ つ、つきましたね！ はうっ！」

「うわ！ 大丈夫……？」

声をかけた途端、智花は到着したばかりの大型スーパー入口のガラス扉に勢いよく飛び出すが、そこは自動ドアではなかったため、衝突してしまった。

「うっ……。今日の私、ひどい……」

両手で顔を覆って嘆く智花。けがはなかったが、逆に大恥をかいてしまったようで顔が赤く染まっていた。

結衣はあまりこういう智花の姿を見ていないため微笑ましく思ったりもする。

「花織さんって日本舞踊の先生なんだ」

「はい、私も少しだけ習っています」

2人で智花の母親、花織のことを話し合っていた。カートを押して野菜を物色していた。どうりで立居振舞がことなく上品で落ち着いて見えるわけだと思う結衣だった。

「でも、バスケのことは応援してくれてるみたいでよかったよ」

「はい！ お母さんは、自分が一番好きなことを一番がんばって言うてもらえます。だから舞踊は無理して続けなくてもいいって。」

「……あ、でも嫌いじゃないので、あきらめたいなんて思っていないんですけど」

「そっか」

「お母さんから」……。この言葉を聞いた結衣は何かにつつかかっていた。でも、今はお買い物しているので気にしないことにし

た。

「これで野菜はいいな。あとは魚だけか」

「ですね」

長ネギをかごに刺し、カートをUターンさせて最深部へと向かっていく。

「もともと魚屋だったんだけどスーパーになったんだって」

それはずっと昔、結衣がまだ幼い頃であった。その頃ははっきりとは覚えていないものの、その時はスーパーではなく魚屋であったという。

その名残があったためか鮮魚コーナーには特別に力を入れているらしく、新鮮な魚が多く横たわっていた。

「どれどれ……ってなんだこれ」

あかりからもらったメモを見るとそこには『おいしそうな魚』ということしか書かれていなかった。

「ふふ、お魚は特売品が毎日違うからだと思いますよ」

それを聞いた結衣はなるほどと思い、横たわっている魚を見ていた。すると智花が……

「……あ、結衣さん。このエビお買い得みたいですよ。ブラックタイガー」

手乗りサイズなのにやたら強そうな名前のエビを聞いたとき、この前京子が葉っぱで作った『ブラックタイガー号』という船を思い出していた。

なんだか、ある人気アニメの主人公が作ってその名をつけたと言っていた。しかし、なんのアニメなのかは聞いていなかった。

「ありがとう。エビはこれだけでいいかな？ 他に何かあったらいつでも言って」

「ええと、たぶんいいはずですが……。でも、すごいですね。エビだけでもこんなに種類がたくさん。……。あ、見てください結衣さん、あんなものまで！」

智花が指差した方を見るとディスプレイの最上級に飾っていたのは『伊勢エビ・一尾3600円』の札。

「まさか、伊勢エビまで……。でも、あれは高いからちょっと……」

「そ、そうですね……。あれは結婚式にしか食べられないですし……」

智花の発言で思わず驚いてしまう結衣。その後も思わずツツミを入れてしまう。

「どういうこと……？」

「ええと……。つまり私と結衣さんが結婚するときにあの伊勢エビを食べるって……。あああああ！ 私ったら何言ってるの……！？」

「お、落ち着いて！」

パニくる智花をひとまず落ち着かせ、その後も鮮魚コーナーを見て周り、魚をカートに入れていき、レジに行くことに。

カートを運んでいき、レジに進んでいくと智花が……

「あ」

智花がいきなり足を止め、呆然と正面を向いたまま立ち尽くす。

「どうしたの……？」

結衣もすぐに同じ方向を向いた。そこにはほんの数メートル先でお徳用チョコビスケットの袋を抱きしめたまま、きょとんこちらを見つめる少女の存在に気付いた。

栗色の髪を二つ結びにした、子猫のようにあどけない顔つきの女の子、そしてその隣には佳長い髪を三つ編みに結った眼鏡の少女がいた。

その少女たちは結衣は知っていた。

「真帆ちゃんに紗季ちゃん。どうしてここに？」

見まがう余地もなく、慧心女バス部員の2人であった。

「……」

「……」

無言が続いた。その後、真帆と紗季は互いに見詰め合ってアイコンタクト。それからくるつと後ろを向き、結衣たちとは反対の方に

歩み去ろうとする。

「……あの」

戸惑いながら動向を目で追っていると、5歩ほど歩いたところで真帆がわざとらしく髪を書き上げるようなしぐさと共に、

「新婚さん、いいらっしゃあーい!」

「ええ!?!」

真帆の言葉に驚く結衣。続いて紗季が窘めるように、

「バカ! そつとしてあげないと!」

そんな台詞だけを残し、2人は陣列棚の影に消えていく。

「ち、違つ! 真帆、紗季、誤解だよ!」

その後も智花は2人を全力で追いかけていったのであった。

智花の母親と買い物（後書き）

なんか、修学旅行の話を書きたくなくなってしまいました……。

万里の話在省き、小5の女バスの話を書いたら書こうと考えています。

番外編 千鶴初めての女バス（前書き）

今回は番外編です。

ここで千歳の双子の妹、池田千鶴が初めて登場します。

番外編 千鶴初めての女バス

ある日の放課後、ある七森中の生徒が慧心学園へと足を運んでいた。その人物は……。

「……ここか」

千歳の双子の妹、池田千鶴であった。実は数日前、千歳に女バスのことを話してくれてその女バスに興味を持ったため来ていたのであった。

「姉さんが前に話してくれた慧心学園……。それと歳納なんたらの話はむかついたが……！」

もちろん、京子と綾乃が付き合うことも話してくれている。その時はものすごく悲しんだのだが、姉さんが幸せならいいやという理由であきらめている。

この時間帯はまだ倶楽部のメンバーも来ていない頃であった。千鶴は門を通り、体育館に向かっていった。

そこからバスケットボールを弾む音が響いていて、ゴールに入った音も聞こえた。ここが女バス部の練習場所だと一目でわかった。

さっそく、扉を開け、中を見てみることにした。

ガラッ

「ん？」

千鶴が体育館に入った瞬間、女バスのメンバーのだれもが振り向いた。そして、そのまま千鶴に近づいてきた。

「あ、千歳さん」

「おお、せっちー!」

「お久しぶりです、千歳さん!」

「おー、ちとせおねーちゃん」

「お久しぶりです」

女バスの誰もが千鶴を千歳だと勘違いしていた。すると、アイガードをしていた長い髪の子、紗季の様子が変わった。

「あれ?」

「どうしたの?」

「なんか、いつもの千歳さんと少し違うような……」

「え? いつものせっちーじゃなか」

「でも……」

「あれ? ほんとだ。なんか目の色が少し違う……」

ピンク色の髪で、左の髪にリボンを結んでいる女の子、智花が言う。

「おー?」

「……紹介が遅れたね。私は池田千鶴。千歳は私の双子の姉さん」

「「「「ええええ!?」「」「」」」」

千鶴の紹介を聞いたとき、女バスの誰もが驚いてしまった。その後も、取り乱しながらも自分たちの紹介することに。

「慧心学園初等部、湊智花です」

「同じく、三沢真帆です」

「永塚紗季です」

「香椎愛莉……です」

「ひなた、袴田ひなた」

「よろしく。姉さんのことはいろいろとお世話になったね」

「はい、合宿に愛莉のこともいろいろとお世話になりました」

「それにしても、千歳さんに双子の妹さんがいたなんてびっくりしました」

「ほんとに似てるなー。ちづっちとせっちー」

みんな、千鶴に興味深々であった。まさか、千歳に双子の妹がいたなんて誰も思いもしていなかったからである。すると、ひなたが千鶴に質問してきた。

「おー。ちづるはどうしてここに？」

「この前、姉さんに女バスのことを話してくれて、それで興味を持つてここに来たんだ」

「そうですか」

「ちょっと見学してっていいかな？」

「もちろん、いいですよ」

「ありがとう」

千鶴は体育館のステージの上に座り、みんなの練習するところを見学することにした。見てみると、それは真剣そのもの、やはり部活だけに真剣に取り組んでいた。

（やはり、真剣にやってるな……）

そして休憩にはいり、真帆は千鶴の方へと向かっていった。

「ちづつち、今日はゆいにゃんたちは来ないの？」

「えっと、私と船見さんたちは違うクラスだし、何やってるかさっぱり」

「そっか」

「そう心配しなくても、結衣さんたちは来るよ」

「じゃあ、休憩終わったらまた練習しよっか紗季」

「！」

紗季といった瞬間、千鶴は食いついてきた。すると、千鶴は紗季に話しかけてきた。

「ねえ、ちょっと話いいかな？」

「ええ、いいですよ」

実は、前に千歳と話した時この紗季という子が京子と綾乃の恋に協力してくれたと聞いた。

その紗季に京子と綾乃のことを聞いた。

「君が協力したんだよね。歳納何たらと杉浦さんの……」

「ああ、京子さんと綾乃さんですか。もともと千歳さんが綾乃さんが京子さんのことが好きだったことを聞いて私たちも協力しようと思ったんです」

「……」

紗季の言葉に少し暗い顔になってしまった千鶴。心配した智花が声をかけてきた。

「どうしたんですか？」

「その……私は……」

今ここで千鶴が千歳と綾乃の恋を応援していたことを智花と紗季に話した。

「そうですか……」

悪いことしてしまったなと落ち込んでしまう智花と紗季。しかし、千鶴はううんと首を振り言った。

「いいよ。姉さんも幸せだって言ってたし、それにもともと杉浦さんが歳納何たらに好意を寄せていたことはわかっていたよ」

「千鶴さん……」

「そろそろ行くかな……」

「もう行っちゃうの？」

「でも、長くいると迷惑じゃ……」

「大丈夫ですよ。全然迷惑じゃありません」

「もう少しだけ見ていつてよー」

「……わかった」

「やったー！」

女バス部たちの説得で見てみることになってしまった千鶴。また練習姿を見ることとなった。

見てみると、仲もよく楽しそうにバスケットをやっているみたいだった。ここで千鶴は眼鏡を取り外した。

「……………」

千鶴は今、女バス5人の百合妄想をしていた。そのため、よだれがでていた。説明しよう、眼鏡を外して視界を遮り、神経を集中させて本格的な妄想に入り千歳とは異なり、よだれを垂らすのだ。ここで紗季が千鶴がよだれを垂らしていることに気が付いた。

「ち、千鶴さん、よだれ出てますよ……」

「でていない」

「いや、でてますよ」

「なるほど、せっちーとは違ってちづっちはよだれを垂らすのか」

「おー。ちづるのもーそーもーど」

「でも、鼻血よりはマシのようなでないような……」

ガラッ

「あれ？　なんで千鶴がいるの？」

ここで結衣たちがやってきた。

「あ、ゆいにゃん遅いよー」

「おい、千鶴ー！」

ここで京子が千鶴にスキンシップをとろうと千鶴に近づいてきたが、千鶴は京子を殴り飛ばした。

「しつこいー！」

「もう千鶴ったらー」

（杉浦さんがいるのに、こいつは……）

「遅くなってごめん。それじゃあ、今日の特訓に入ろっか」

「「「「はい「「「「」

生き揃えて返事をし、さっそく結衣たちは体操服に着替えようと更衣室に行った。その後、千鶴は鞆を持って帰ることにした。

「じゃ、これからもバスケ頑張って」

「はい」

「私も悔しいけど、アイツと杉浦さんの恋を応援してる。姉さんの幸せのためにも」

「ふふ、お互いがんばりましょ」

「うん」

紗季にさよならを告げ、千鶴は家に帰って行った。

その夜、千歳と一緒に夕食を食べているとき、女バスのことを千歳に話した。

「そうなんやー。それであの子たちどうやった？」

「みんな良い子たちばかりだったよ」

「うふふ、せやろ」

今日も仲良く話をしていたのだった。

買い物での合流（前書き）

大変長らくお待たせしてしまって申し訳ありません……。

それではどうぞ

買い物での合流

「なーんだ、お使いかー」

2人を全力で追いかけて、捕まえて事情を説明すると真帆がつまらなそうに口先をすぼめる。

「ふふ、まあそんなことだろうと思いましたけど」

紗季の不敵な笑みを見て智花は焦りをぬぐいきれないまま、軽く頬を膨らませる。

「もう、いじわる……」

「ごめんごめん。けど、トモが誰にもメールを返さないのも悪いんだからね。あんまり変身遅いから少し心配してたのに、知らん顔で結衣さんといちゃいちゃしてるんだもん。お仕置きでちよつとかにかいたくなっても仕方ないじゃない」

「そういえば、さっき智花ちゃん携帯忘れたって言ってたね」

「え、そうだったの!? ごめんね! 私携帯電話置き忘れてきちゃって……」

「じゃあ、しょうがないわね」

「う、うん……」

その後も結衣は真帆と紗季がどうしてここにいるのか聞いてみる

とどうやら美星のために買い物に来ていたといったのだった。
それを聞いた結衣は呆れかえる。

「あの人も京子みたいで……」

「いえいえ、ご飯作るのはただのついでですし、迷惑とかは全然
」

「ねーゆいにゃん、もっかん、こっちこっち！ アイリーンとヒナ
もいるから会いにいこー！」

紗季との会話の途中に真帆が割って入り、二つ結びをなびかせて
スキップ君に全員を手招きした。

「もう、勝手なんだから！ ごめんなさい、落ち着きがなくて」

「ううん、それに愛莉ちゃんとひなたちゃんがいるなら挨拶にいか
ないとね」

「はい！」

紗季は呆れた顔をしつつも真帆を追いかけて、四人で移動を開始す
る。商品棚をいくつかやり過すとドリンクコーナーで炭酸飲料を
真剣に見比べている愛莉とひなたの姿があった。

「おー？ おねーちゃんともかだ」

気づいたのはひなたの方で背伸びして小柄な身体を持ち上げ、驚
きと喜びを表すように両手を高々と振っている。

「こんにちは」

「やーやー」

遅れて結衣たちを見た愛莉の方はちらりと伸びた長軀をすくませながら、なぜか少し哀しそうに眉根を寄せて小声で一言。

「……し、新婚、さん？」

「なんで!？」

「だ、だから違っつてば!」

愛莉の言葉にツツコミを入れる結衣と智花。

「じゃあ、私たちはそろそろ行きます。トモも一緒に遊べればよかったんだけど、今日は仕方ないわね」

6人で立ち話をしていると、紗季が頃合いを見計らって結衣と智花に別れを告げた。

「えー! もっかんも行こうよー!」

真帆は不服をあらわにしてこちらに駆け寄る。当惑する智花。紗季は大きいため息をつき真帆の頬をつねっていさめにかかる。

「こら、今日トモは『勝負の日』なんだから邪魔しちゃダメでしょ」

「勝負かあ、仕方ないか」

（勝負の日ってなんだろう……？）

勝負の日という言葉に疑問を抱く結衣。当然、智花は取り乱した。

「だ、だからそんなのじゃないってば！」

「ふふ。まあそれはともかく、今日は先に約束があつたんだから無理には誘えないわ。みーたんちはまた今度ね」

窘めつつ、みんなに目配せして出立を促す紗季。

「おー？　ともか、行かないの？」

「……ごめんなさい。また明日ね？」

「うん。……残念だけどうがないよね」

4人がひとかたまりとなり歩き出す姿はとても寂しそうな雰囲気であつた。これを見た結衣はさすがに放っておけずに声をかけた。

「ちょっと待って」

「はい、なんででしょう？」

「提案だけど、みんなもあかりの家に来ない？　それで昼食を食べ、それから美星先生の家に遊びに行けばいいじゃないかな？　食事もあるに作ってもらつように頼んでおくから、それで晩御飯を

届けてやればいいから。どうかな？」

「めーあんだなゆいにゃん！ あたし賛成！」

「おー。あかりおねーちゃんち、行きたい」

この思いつきで真帆とひなたは賛成してくれ、愛莉も表情を華やがせる。しかし紗季と智花は少しだけ恐縮したようであった。

「でも、ご迷惑では……？」

「大丈夫。あかりも喜んでくれると思うから美星先生にも私が電話しておくよ」

説得を重ねる結衣。すると2人も提案を受け入れる気になってくれてうれしそうな顔を見せた。

「よっしゃー！ じゃーしゅっぱーつ！ ゆいにゃん！ 荷物一個持ってあげる！」

「あ……、別にいいのに」

結衣の持つているレジ袋を強奪し、先攻して駆け出した真帆を追いかけて、賑々しく6人で移動を開始する。

そのせいかあかりの家まで距離が近く感じたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2220v/>

ゆるい口ウきゅーぶ

2011年11月24日20時55分発行